

吉野ヶ里遺跡

平成2年度～7年度の発掘調査の概要

1997年3月

佐賀県教育委員会

吉野ヶ里遺跡

1997年3月

佐賀県教育委員会

序

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、工業団地計画に伴い昭和61年5月から実施しましたが、国内最大の環壕集落や墳丘墓の発掘などにより、平成元年2月以来大いに注目されてきました。その後の遺跡を取り巻く状況は平成元年3月の工業団地計画の中止、翌2年と3年の史跡・特別史跡としての指定、4年の国営公園化の閣議決定と急速な変化を遂げました。現在は国営・県営の吉野ヶ里歴史公園の早期開園をめざし整備工事も進展しています。

このような状況の中で、当委員会としては平成元年度から文化庁の補助を受け、遺跡の範囲確認や内容解明のための確認調査を継続しています。この間、南墳丘墓や青銅器鑄造遺構、北内郭跡の発見や北墳丘墓からの新たな甕棺墓と銅剣の発見など多くの成果をあげることができました。これらの調査成果は歴史公園整備の重要な基礎資料として最大限に活用しています。

平成元年度までの調査の概要については、これまで数冊の調査概要報告書により公表していますが、本書は平成2年度から7年度の6年間にわたる調査についてその概要を記したもので、この発掘調査によって出土した資料や調査記録の整理・分析を進めているところですが、発掘調査の進展と合わせ、吉野ヶ里遺跡の全容が明らかになるには、なお多くの歳月を要します。

本書を学術資料としてお役立ていただき、吉野ヶ里遺跡の今後の調査研究あるいは保存活用に関して、適切なご指導、ご助言を与えてくださいますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査にあたり適切なご指導をいただいた文化庁はじめ諸先生方、ならびに調査に協力いただいた地元神埼町・三田川町・東脊振村当局、地権者の方々、発掘に従事いただいた作業員の方々には衷心より感謝申し上げます。

平成9年3月31日

佐賀県教育委員会

教育長 川久保 善 明

例　　言

1. 本書は、佐賀県教育委員会が国庫補助事業として平成元年度から実施している吉野ヶ里遺跡発掘調査事業のうち、平成2年度から平成7年度に実施した発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、佐賀県教育委員会が主体となり、三田川町・神埼町両教育委員会の協力を得て実施した。調査にあたっては文化庁、大学、県文化財保護審議委員、その他各種機関の専門家の指導を得た。
3. 出土遺構の実測図作成は業者に委託したほか、調査員・調査補助員・作業員がおこなった。また、出土遺物の実測図作成は調査員・作業員がおこなった。
4. 出土した遺構・遺物の写真撮影は調査員がおこなったが、遺構の空中写真については業者に委託した。
5. 出土遺物の整理や調査記録類の整理は、吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所でおこなった。
6. II. 位置と環境で用いた吉野ヶ里遺跡周辺遺跡分布図（Fig.1）は、国土地理院が発行した25,000分の1の地形図（『久留米西部』『中原』『広瀬』『佐賀北部』）を使用した。
7. 本書の編集は調査員の協力を得て、七田がおこなった。執筆は、V. おわりにを高島忠平が、IV. 1. (2) の①青銅器鋳造関連遺構を森田孝志がおこない、その他については平成8年度の調査員がおこなった。
8. 出土遺物は、佐賀県教育委員会文化財課吉野ヶ里遺跡班の吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所（〒842 神埼郡三田川町大字手2721番地 ☎ 0952-52-9735）に保管している。

凡　　例

1. 遺構については、調査地区ごとに一連番号を付し、その前に遺構の種別を示すアルファベット2文字の略号を記した。遺構の種別は以下のとおりである。

・ S A … 樽跡	・ S B … 掘立柱建物跡	・ S C … 箱式石棺墓	・ S D … 溝・塙跡
・ S E … 井戸跡	・ S H … 竪穴建物跡	・ S J … 墓棺墓	・ S K … 土壙
・ S P … 土壙墓・木棺墓	・ S T … 墳丘墓・古墳・周溝墓		・ S X … 不明遺構

なお、将来広範囲に発掘調査を計画している地区内の小規模な調査区においては、便宜上調査区毎の遺構番号を付したものもある。
2. これまでに発掘調査を実施した地区（アルファベット3文字は略号）は以下のとおりである。

・ 志波屋六の坪乙地区(SRO)	・ 志波屋六の坪乙地区(SRT)	・ 志波屋五の坪地区(SGT)
・ 志波屋四の坪地区(SYT)	・ 志波屋三の坪甲地区(SST)	・ 志波屋三の坪乙地区(SSO)
・ 吉野ヶ里丘陵地区(YGK)	・ 吉野ヶ里地区(SYT)	・ 田手二本黒木地区(TDN)
・ 田手一本黒木地区(TD1)		
3. 遺構の法量はm単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。
4. 遺構分布図や遺構実測図の北方位や座標値、本文中の方位の表現は、すべて国土座標（第II系）による。

本文目次

I.はじめに.....	1	(2)遺物.....	34
①甕棺.....	34		
II.位置と環境.....	3	②銅劍.....	40
③その他の遺物.....	42		
III.調査の方法.....	6	3. 北内郭跡.....	44
(1)発生時代の遺構.....	46		
IV.調査の成果.....	8	①竖穴建物跡.....	47
1. 調査の年度別の概要.....	8	②掘立柱建物跡.....	49
(1)平成元年度の調査.....	8	③環壕・塙跡.....	50
(2)平成2年度の調査.....	8	④その他の遺構.....	54
(3)平成3年度の調査.....	8	(2)発生時代の遺物.....	54
(4)平成4年度の調査.....	8	①土器.....	54
(5)平成5年度の調査.....	9	②その他の遺物.....	67
(6)平成6年度の調査.....	9	4. 妙法寺跡.....	68
(7)平成7年度の調査.....	9	(1)遺構.....	70
2. 調査成果.....	14	①溝跡.....	70
(1)環壕集落の範囲確認調査.....	14	②掘立柱建物跡.....	71
①田手川東岸の県道古田・鶴線周辺.....	14	③柵跡.....	72
②田手川東岸南部.....	14	④土壤.....	72
③田手川西岸の南内郭跡南東地区.....	14	⑤井戸跡.....	73
④段丘南端部.....	17	(2)遺物.....	73
(2)その他の調査.....	17	①土器.....	73
①青銅器鑄造関連遺構.....	17	②陶磁器.....	79
②南墳丘墓.....	18	③瓦.....	80
③南内郭南方・南東方.....	23	④その他の遺物.....	80
④北墳丘墓周辺.....	25	V. おわりに.....	82
⑤南部外堀出入口周辺.....	28	1. 吉野ヶ里弥生集落の変遷.....	82
2. 北墳丘墓.....	29	2. 弥生時代後期の吉野ヶ里集落.....	87
(1)遺構.....	29	3. 吉野ヶ里遺跡の性格と意義.....	90
①甕棺墓の分布.....	29		
②甕棺墓.....	29		
③各甕棺墓の概要.....	31		

挿 図 目 次

Fig. 1	吉野ヶ里遺跡周辺遺跡分布図	4
Fig. 2	吉野ヶ里遺跡発掘調査調査区割り図	15
Fig. 3	吉野ヶ里遺跡発掘調査区位置図	16
Fig. 4	吉野ヶ里遺跡南埴丘墓・青銅器鋸造関連遺構実測図	19
Fig. 5	吉野ヶ里遺跡青銅器鋸造関連遺構出土弥生土器実測図	20
Fig. 6	吉野ヶ里遺跡青銅器鋸造関連遺構出土遺物実測図	21
Fig. 7	吉野ヶ里遺跡南内郭南方の調査区遺構分布図	22
Fig. 8	吉野ヶ里遺跡南内郭南東方の調査区遺構分布図	24
Fig. 9	吉野ヶ里遺跡北埴丘墓南と北東の弥生時代墓地遺構分布図	26
Fig. 10	吉野ヶ里遺跡南部の外環濠出入口跡遺構分布図・銅鑼実測図	28
Fig. 11	吉野ヶ里遺跡北埴丘墓甕棺分布図	30
Fig. 12	吉野ヶ里遺跡北埴丘墓出土甕棺実測図(1)	35
Fig. 13	吉野ヶ里遺跡北埴丘墓出土甕棺実測図(2)	37
Fig. 14	吉野ヶ里遺跡北埴丘墓出土甕棺実測図(3)	38
Fig. 15	吉野ヶ里遺跡北埴丘墓出土遺物実測図	41
Fig. 16	吉野ヶ里遺跡北内郭跡遺構分布図	45
Fig. 17	吉野ヶ里遺跡大型掘立柱建物跡・柱穴出土土器実測図	48
Fig. 18	吉野ヶ里遺跡北内郭跡豎穴住居跡出土土器実測図(1)	55
Fig. 19	吉野ヶ里遺跡北内郭跡豎穴住居跡出土土器実測図(2)	56
Fig. 20	吉野ヶ里遺跡北内郭跡豎穴住居跡出土土器実測図(3)	57
Fig. 21	吉野ヶ里遺跡北内郭跡豎穴住居跡出土土器実測図(4)	58
Fig. 22	吉野ヶ里遺跡北内郭跡豎穴住居跡出土土器実測図(5)	59
Fig. 23	吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(1)	60
Fig. 24	吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(2)	61
Fig. 25	吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(3)	62
Fig. 26	吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(4)	63
Fig. 27	吉野ヶ里遺跡北内郭跡出土土鉄器実測図	66
Fig. 28	吉野ヶ里遺跡北内郭跡出土中広銅戈実測図	67
Fig. 29	吉野ヶ里遺跡妙法寺跡遺構分布図	69
Fig. 30	吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(1)	74
Fig. 31	吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(2)	75
Fig. 32	吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(3)	77
Fig. 33	吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器とその他の遺物実測図	78
Fig. 34	吉野ヶ里遺跡弥生時代の集落・墓地変遷概要図	85

表 目 次

Tab. 1	古野ケ里遺跡発掘調査調査区一覧表	10
Tab. 2	古野ケ里遺跡北埴丘墓縛棺墓一覧表	44
Tab. 3	古野ケ里遺跡北内郭跡竪穴建物跡一覧表	51
Tab. 4	古野ケ里遺跡北内郭跡掘立柱建物跡一覧表	53

図 版 目 次

PL. 1	古野ケ里遺跡全景
PL. 2	青銅器鑄造関連遺構全景
PL. 3	南埴丘墓跡（仮称）全景
PL. 4	南埴丘墓跡（仮称）盛土の状況・土壤墓状遺構
PL. 5	南内郭南方・東南方調査区全景(1)
PL. 6	南内郭南方・東南方調査区全景(2)
PL. 7	南内郭南方・東南方調査区全景(3)
PL. 8	南内郭南方・東南方調査区全景(4)
PL. 9	外環境の出入口跡
PL. 10	北埴丘墓跡発掘状況
PL. 11	北埴丘墓跡縛棺墓(1)
PL. 12	北埴丘墓跡縛棺墓(2)
PL. 13	北埴丘墓跡出土銅劍・把頭飾
PL. 14	北内郭跡（上が西）
PL. 15	北埴丘墓跡出土銅劍
PL. 16	妙法寺跡発掘区全景

報告書抄録

ふりがな	よしのがりいせき へいせいにねんじらへいせしらぬどはくつちうきめい							
書名	古野ヶ里遺跡－平成2年度～7年度の発掘調査の概要－							
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第132集							
編著者名	編者 七田忠昭、著者 高島忠平・平成8年度の調査員ほか							
編集機関	佐賀県教育委員会							
所在地	〒840 佐賀県佐賀市城内一丁目1-59 TEL.0952-24-2111							
発行年月日	1997(平成9)年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査対象面積 (確認調査)	調査原因	
よしのがりいせき 古野ヶ里遺跡 （II・V・VI・VII・VIII）	よしのがりいせき 佐賀県神埼郡 三田川町大字 田手	413232 2014 3013	1001 33° 19° 24°	130° 22° 40°	19890401 ～	28,000m ² (約200,000m ²)	遺跡の内容の把握と、歴史公園建設に係る資料を得るために	
たてこまくらきもく 田手二本黒木地区 (II区)		413232	1002 2015 3015	33° 19° 12°	130° 22° 32°	19860331		
たてこまくらきもく 田手一本黒木地区 (I・III区)		413232	2017 5003	33° 19° 6°	130° 22° 36°			
よしのがりいせき 古野ヶ里地区 (V区)	よしのがりいせき 神埼町大字鶴	413216	1031 2081 3079	33° 19° 16°	130° 22° 32°			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
吉野ヶ里遺跡 吉野ヶ里丘陵地区	集落跡・墓地	弥生時代・古墳時代、中世	堅穴建物跡、堅立建物跡、環濠、壇場、豐原墓、古墳など	銅鏡、青銅製肥頭鎌、石器、磨石、箭矢、陶瓶、破片、鉄製工具、武器	北墳丘墓、細形銅劍、中細形銅劍、北内郭跡、中広形銅戈			
吉野ヶ里地区	集落跡・生産跡？	弥生時代	堅立柱建物跡、堅穴住居、水田の水路跡？	鐵頭など	高床倉庫跡群			
田手二本黒木地区	集落跡	弥生時代	堅穴建物跡、堅立柱建物跡、青銅器鋸造遺構、環濠跡、門跡など	青銅器鋸造遺構、鐵頭工具、鐵頭など	青銅器鋸造遺構、銅劍・銅矛鋸型、鉛洋、銅鏡			
田手一本黒木地区	集落跡・寺院跡	弥生時代、中世	溝跡、堅立柱建物跡、礎路、井戸跡、土塁など	瓦、龜甲陶器、圓筒器、鐵頭など	妙法寺跡、木製品			

I. はじめに

吉野ケ里遺跡は、佐賀県神埼郡の神埼町・三田川町・東脊振村にまたがる通称吉野ケ里丘陵上に存在する弥生時代から近世にいたるまでの大規模な遺跡である。

発掘調査は、神埼工業団地計画に伴う事前調査として1986（昭和61）年度から開始されたが、現地調査の最終段階である1989（平成元）年の2月下旬にはほぼ全貌が明らかになった弥生時代後期の大規模な環濠集落跡や甕棺墓地跡などが全国的に注目された。その後弥生時代中期の大規模な埴丘墓が調査され、把頭飾付き有柄細形銅劍をはじめとする5本の細形銅劍や79個のガラス製管玉などが発見されたのを機に、同年6月の県議会で工業団地計画は北部を残して中止され、遺跡は保存されることになった。平成2年5月の史跡指定（約22ha）、翌年5月の特別史跡昇格を経て、平成4年10月には国営吉野ケ里歴史公園（約54ha）が開園決定され、県営歴史公園（約63ha）とともに、現在整備工事が開始されている。

平成元年4月から文化庁の補助により遺跡の範囲確認調査や未調査地区の内容把握のための調査を継続して実施している。平成元年度・2年度の確認調査で弥生時代後期の環濠集落の範囲が約40haの弥生時代最大級の環濠集落跡であることが判明し、その後、段丘南部での南埴丘墓（仮称）や青銅器铸造遺構の確認、北埴丘墓の再調査による新たな甕棺墓群と銅劍類の発掘、弥生時代後期の吉野ケ里集落の中心的な空間と考えられる北内郭跡の発掘など、重要な遺構や遺物の発見が相次ぎ、吉野ケ里遺跡のもつ内容がさらに明らかになってきつつある。また、北内郭跡周辺での古墳（横穴式石室）や、妙法寺跡と考えられる中世寺院跡や中世城郭に伴う塹跡などの遺構・遺物も多く発掘されており、弥生時代以外の時期の内容についても明らかになってきつつある。

特に弥生時代の状況については、調査の結果、集落や墓地の変遷の内容、その内容から、多数の人々が集住していたこと、内部に祭祀空間を含む機能・階層の違いによる住み分けや施設群の構造上の相違があったこと、手工業的生産が早い段階で確立されていたことなどが判明し、都市的な様相を整え始めていたことが明らかになってきた^①。

平成元年度に実施した確認調査と工業団地計画に伴う調査については既に報告書などによって、その内容を公にしているが、本書では、平成2年度から7年度にかけて実施した調査の概要を述べているが、特に注目される弥生時代中期の北埴丘墓の再調査、弥生時代後期の北内郭跡の調査、中世寺院妙法寺跡の調査を主体にまとめている。

なお、調査の体制は、神埼町・三田川町の文化財専門職員各1名の派遣（県からの業務委託契約、3年からは三田川町のみ）による協力のもと、佐賀県教育委員会が主体となっておこなった。調査は文化財課吉野ケ里遺跡保存対策室（7年度以降は組織改変により文化財課吉野ケ里遺跡班が実施）、経理については文化課庶務企画係と対策室（班）の管理担当がおこなった。組織の内容については次頁に記した。

註

(1) 建設省九州地方建設局国営吉野ケ里歴史公園工事事務所「国営吉野ケ里歴史公園建物等復元検討調査報告書」

1996年3月

(2) 佐賀県教育委員会「吉野ケ里遺跡(佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ケ里遺跡の確認調査報告書)」

1983年3月

佐賀県教育委員会「吉野ケ里遺跡 発掘調査概報Ⅰ」 1993年7月

佐賀県教育委員会「吉野ケ里遺跡 発掘調査概報Ⅱ」 1994年2月

佐賀県教育委員会「古野ヶ里(神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書)」1992年3月

佐賀県教育委員会「平成4年度・5年度古野ヶ里遺跡発掘調査の概要—墳丘墓と北内郭跡を中心として—(付論)

古野ヶ里遺跡環境集落の成立・発展・解体」1994年1月

調査組織

【文化課】…事務局

課長 武藤佐久二(2)
天本 博(3・4)
市丸 利幸(5・6)
内田 泰智(7・8)
参事 岩崎 駿明(3)
森 醇一朗(4)
佛坂 勝男(6~8)
課長補佐 岩崎 駿明(2)
森 醇一朗(2・3)
佛坂 勝男(4・5)
小川 久人(4~6)
福山 正廣(7・8)
庶務企画係長 永松 和久(2~5)
岩瀬 茂生(6~8)
主査 浜野 清子(2~5)
小林 宜洋(2~4)
鷺崎 義彦(5~7)
古谷喜代美(6)
久保 信行(7・8)
主事 松瀬 弘(2・3)
池田 学(4~6)
富浦 道代(7・8)

【文化財課】…調査担当

課長 高島 忠平(2~8)総括
参事 木下 巧(6~8)
課長補佐 西村 貞幸(2・3)
(室長補佐も含む) 藤口 健二(2)
中牟田賢治(3~5)
瀬戸 明廣(4~6)
田平 徳栄(5~8)
深町 昌司(7・8)
企画調整主査 納富 敏雄(2~8)企画担当
山口 和夫(2・3)管理担当
多々良一夫(4・5)管理担当
鷺崎 格(6~8)管理担当
主査 石田 誠(2~4)管理担当
藤原 齊(5・6)管理担当
朝長 雅幸(7・8)管理担当
文化財保護主査 白木原 宜(2・3)企画担当
細川 金也(4)企画担当
指導主事 副島 正道(5・6)企画担当
犬塚 秀紀(7)企画担当
梅木 烈(8)企画担当
企画調整主査 七田 忠昭(2~8)調査担当
文化財保護主査 森田 孝(2・3)調査担当
吉本 健一(4~8)調査担当
指導主事 田島 春己(2~5)調査担当
原 直樹(6~8)調査担当
《業務委託派遣調査員》三田川町教育委員会 草野 誠司(2~8)調査担当
神埼町教育委員会 桑原 幸則(2) 調査担当

【発掘作業員】(平成8年度のみ)

秋吉京子・池田栄子・石松澄子・伊東キヨノ・伊東登・江口啓子・緒方昭二・緒方良美・小川ウタ・小川八重子・金丸文江・黒木優子・古賀清治・古賀道江・坂口サチ子・坂本昭子・佐藤春子・寺田和子・中島茂子・夏秋政治・野中光代・野口孝子・羽田すま子・平尾ハルヨ・平野三枝子・福島忠義・松本玉樹・御厨瑞枝・宮地久美子・山崎ひとえ・山崎三重子・横尾政一・吉田初美・吉原彰義

II. 位置と環境

吉野ケ里遺跡は、佐賀県の東部、神埼郡の神埼町と三田川町・東脊振村にまたがる通称吉野ケ里丘陵（「志波屋・吉野ケ里段丘」）の南部に位置する。遺跡は現行の行政区画では、神埼町大字志波屋（竹原地区）・同大字鶴（馬郡地区）、三田川町大字田手（吉野ケ里・田手地区）、東脊振村（辛上地区）に位置する。今回報告する吉野ケ里遺跡の各地区は大半が三田川町大字田手（吉野ケ里・田手地区）と一部神埼町大字鶴（馬郡地区）に位置する。

佐賀平野の東部にあたる三養基郡中原町から佐賀市にかけての脊振山地南麓には、多くの洪積世段丘が発達して、大小の段丘が山麓部から南部の肥沃な沖積平野へ舌状に延びており、このような自然環境が佐賀平野東部地域の特徴となっている。この地域は、県内でも特に遺跡の密集するところとして知られており、旧石器時代から中・近世までの遺跡が多数存在している。以下、三養基郡西部の中原町・上峰町・三根町以西、佐賀郡大和町以東の地域について記す。

旧石器時代の遺跡は、山麓部や段丘上にその存在が確認されているが、本格的な調査が実施された例は少なく、表面採集か後世の遺構などに混在したものが発見される例が多い。中原町蛭方遺跡からは鍛器やナイフ形石器が、同町町南遺跡や東脊振村古賀遺跡などからナイフ形石器が、吉野ケ里遺跡でもナイフ形石器を主体とする石器群が多く出土している。また、数少ない本格的な調査例である神埼町船塚遺跡からは2層にわたる文化層から鍛群が確認され、ナイフ形石器や台形石器・剥片尖頭器などが出土している。特に、瀬戸内系石器群の出土は興味深く、当地域における旧石器文化の様相を窺うことができる。

縄文時代は、旧石器時代と同様に山麓部や段丘上に遺跡が確認されており、その数も増加している。押型土器の出土で学史的に著名な東脊振村戦場ヶ谷遺跡をはじめ、中原町香田（早期・晚期）、神埼町船塚（早・前期、晚期）・同志波屋六本松（早期・後期）・同志波屋一の坪（早期）、東脊振村夕ケ里（後期）、佐賀市金立開拓（早・前期、後期）・同久保泉丸山（早期一晚期）・同鈴能（晚期）など多くの遺跡が確認されている。これらの内、晚期に存在する久保泉丸山遺跡や香田遺跡では支石墓群が検出され、吉野ケ里遺跡周辺では晚期の集落跡と考えられる神埼町馬郡、三田川町田手二本松、東脊振村浦田など平野に面した遺跡で多数の土器片が発掘されており、この地域における弥生文化生成の実態が明らかになる日も近いと考えられる。

弥生時代になると遺跡の数は急増し、その分布も南部の沖積平野まで広がるようになる。近年の農業基盤整備事業などの開発に伴い平野部の調査が増加した結果、段丘のみならず平野部の状況が明らかになった。前期の遺跡は町南、東脊振村西石動・同松原、神埼町切畑、吉野ケ里など段丘上や山麓部に立地するもの他、前期に南部三角州地帯の千代田町上黒井・同詫田西分などの貝塚を含む集落群が形成されたことが明らかになっている。

中期以降、集落の範囲はさらに拡大し数も著しく増加する。上峰町切畑や東脊振村三津永田・同横田など副葬品をもった弥生時代墓地が從来から知られていたが、近年の大型開発に伴う調査の増加により、山麓部や段丘上の中原町蛭方原・同町南・同原古賀三本谷、上峰町船石南・同一本谷、東脊振村下石動・同夕ケ里・吉野ケ里、神埼町の五本黒木・同川寄・佐賀市琵琶原・同村徳永などの集落跡が、中原町蛭方・船石・船石南・上峰町と東脊振村にまたがる二塚山・西石動・東脊振村石動四本松・吉野ケ里・神埼町花浦・同志波屋六本松・同朝日北などから墓地跡が発掘されている。また、平野部においても神埼町利田柳・同荒堅目・詫田西分・同柿・三根町本分・同天建寺南島遺跡、さらには弥生時代終末期を中心とした諸富町德富櫻現堂・同村中角遺跡などの調査により、弥生時代集落立地の南下を示した。

このような多数の遺跡の中には、先に挙げた切畑や五本谷・二塚山・横田・三津永田、東脊振村石動四本松・三田川町の目連原桜馬場・同吉野ケ里北塚丘墓などから漢式鏡、青銅製や鉄製の武器・武器形祭器、装身具など



Fig.1 吉野ヶ里遺跡周辺遺跡分布図

1 金立開拓遺跡	23 花浦古墳群	45 谷渡古墳群	67 西尾遺跡(園子)
2 久保島丸山遺跡	24 宝渡原六本松遺跡	46 墓上遺跡	68 北尾遺跡(園子)
3 鈴鹿遺跡	25 鶴塚遺跡	47 二ノ山遺跡	69 鶴川城跡
4 駒駄原遺跡	26 戰場・谷瀬跡	48 船石南遺跡	70 錦川城跡
5 篠木野遺跡	27 三津木田遺跡	49 船石南遺跡	71 本告城跡
6 村熊水遺跡	28 伊勢坂前方後円墳	50 切通遺跡	72 上黒井貝塚
7 泉三本聖遺跡	29 下三津前方後円墳	51 一本谷遺跡	73 猿道跡
8 櫻の木遺跡	30 吉野ヶ里遺跡群	52 目連坂古墳群	74 直鳥城跡
9 熊本山古墳	31 幸上魔寺跡	53 塔の坂魔寺跡	75 貴羽当神社遺跡
10 開行丸古墳	32 馬鹿・竹原古墳群	54 下中札遺跡	76 柴尾貝塚
11 麥原山神籠石	33 佐野古墳群	55 宝渡原前方後円墳	77 淀田西分遺跡
12 鶴塚古墳群	34 伏見遺跡	56 佐野古墳群	78 佐野古墳群
13 鶴塚古墳群	35 鳥の原遺跡	57 佐古賀三本谷遺跡	79 光照日遺跡
14 駒塚寺城跡	36 梅田遺跡	58 ドンドン高遺跡	80 南里・東日塚
15 朝日遺跡	37 松原遺跡	59 長方原遺跡	81 風ノ江遺跡
16 日の原山跡	38 タケリ遺跡	60 長方前方後円墳	82 本分貝塚
17 尾崎土生遺跡	39 西石動鶴丈古墳出土地点	61 長方墓跡	83 石井北方貝塚
18 尾崎利田遺跡	40 西石動古墳群	62 八幡社遺跡	84 天達寺前路遺跡
19 利田柳遺跡	41 下石動遺跡	63 山口古墳群	85 持丸貝塚
20 川音吉原遺跡	42 蓬仙寺魔寺跡	64 梶尾谷遺跡	
21 川音若宮遺跡	43 鶴山西山南古墳群	65 鶴尾御前出土地	
22 的五本黑木遺跡	44 星形原古墳群	66 鶴尾御前出土地	

の重要な遺物が出土している。これに加えて西石動や姫、佐賀市裡の木・同鍋島本村南、大和町惣座、吉野ヶ里遺跡からは初期のものを含む銅劍・銅矛・銅戈の鉄型などが出土している。これらは当地域が国内において青銅器製作が開始されたことを示し、弥生時代青銅器の生産問題に重要な資料を提供した。豊かな農業生産を基礎とした先進的な金属器文化が花開いていたことを示している。

これら弥生時代の数多くの集落や墓地跡の調査成果は、水稲耕作を基盤として各種の手工業的生産をおこない人口密集地として発展したこの地域の特徴を示したが、一つの地域をめぐる集落群や墓地群の構造や格差、あるいは相互の有機的な関係を窺い知る資料として重要である。

古墳時代では、集落遺跡としては三田川町下中村、東脊振村タケリ・同浦田・同瀬ノ尾、神埼町志波屋六本松・同馬郡などで確認されており、墳墓としては東脊振村西一本杉の墳墓、五本谷の方形周溝墓群、吉野ヶ里の前方後方形墳墓や方形周溝墓群、佐賀市銚子塚前方後円墳、三田川町と上峰町・東脊振村にまたがる目達原古墳群（前方後円墳7基・円墳4基以上）、神埼町伊勢塚前方後円墳、中原町姫方前方後円墳などの古墳が築造される。山麓部では中原町山口、上峰町谷渡・同星形原・同鎮西山南麓、神埼町猿獄・花浦古墳群などの古墳群が形成される。「古事記」や「続日本紀」「国造本紀」にみえる目達原古墳群を宮んだと考えられる筑紫米多国造、「日本書紀」にみえる嶺県主、「続日本紀」にみえる佐嘉君などの豪族や有力農民層の動向が窺い知れる。

奈良時代には律令国家の成立に伴い、この地域の内中原町・上峰町・三根町は三根郡（律令時代初期には神埼郡に属する）、現神埼郡と佐賀市の南部の一部は神埼郡、大和町、佐賀市の大半は佐嘉郡の範囲に含まれた。大和町には国守跡、国分寺・国分尼寺跡などが存在し、その南には東西方向の駿跡跡が存在する。この駿跡跡は大和町から吉野ヶ里遺跡を経て中原町までの約17km区間に痕跡をとどめており、数箇所で発掘調査が実施されている。吉野ヶ里遺跡や西に接する神埼町中園・同志波屋二の坪遺跡などの調査で、企画的に配置された多数の掘立柱建物跡群や井戸跡群が発掘され、木簡や墨書き土器（「神埼刷」など）などの文字資料、帶金具などが出土するなど、神埼郡家などの存在が想起される。この時代の集落跡も幾つか確認されているが、上峰町塔の塚庵寺、東脊振村辛上磨寺などの寺院跡は著名である。

平安時代には690町の勅旨田から発展した「神埼荘」と呼ばれる院領莊園が神埼郡域の大部分を占めるようになったと推定される。多数の中国の越州窯青磁や白磁・綠釉陶器・新羅の青銅鏡・木製馬鞍などを出土した三田川町下中村遺跡、木簡や綠釉陶器などを出土した神埼町荒野目遺跡などか知られているが、他にも吉野ヶ里遺跡など平安時代から中世にかけての輸入陶磁器を出土する遺跡が数多く存在しており、対中国貿易拠点の一つとしての神埼荘の性格を窺わせている。

中世になると武士階級が実質的支配権を確立したと考えられ、小山塊上の山城跡や山城麓の館跡、平野部には環濠館跡などが多数存在しており、勢福寺城麓の神埼町城原二本谷遺跡や同町姫川城などのように発掘調査によってその内容が明らかになったものも存在する。また、吉野ヶ里遺跡内には建治4・弘安元（1278）年、元寇の際に勅願祈祷寺として創建されたとされる田手川左岸の東妙寺より20年前の正嘉2（1258）年創建とされる妙法寺（尼寺）跡が存在している。

以上のように、この地域は縄文時代晚期（弥生時代早期）以降、農業と金属器などの先進文化をいち早く摂取し発展させたものと考えられる。吉野ヶ里遺跡が立地する佐賀平野東部地域が長期間にわたり政治的・軍事的に重要な位置を占めた背景には、水稲耕作に適した気候と広大な肥沃な土地や、南に国内外に開かれた有明海をもつなどの有利な地理的条件が少なからず影響しているものと考えられる。

III. 調査の方法

吉野ケ里遺跡のは広大な範囲の遺跡であるが、その内約22haは平成2年5月19日に史跡、翌3年5月28日に特別史跡に指定され、また、その周辺の約28haは県史跡として県文化財保護審議会の答申を受け、買収とともに指定を進めている。従ってこれら指定地内の埋蔵文化財は恒久的に保護されるものであり、埋蔵文化財の調査と言えども、保護・保存という点に注意を払いながら実施している。

遺跡・遺構のもう情報は、現状の調査ではその一部しか把握できないものと認識し、将来の発掘技術や科学分析などの進歩に対応するため、遺構を完全には発掘しないで埋土を残しておくように努めている。しかし、このような方法をとった場合の弊害も多い。吉野ケ里遺跡の全体像の把握を目的としている調査であり、個々の遺構の詳細の把握、またそれらの集合体である遺跡全体の把握については、完全に発掘しない限り困難を極める。現在進められている国営・県営吉野ケ里歴史公園の構造復元などの整備計画の策定にあたり、その根拠を完全に説明できないのが現状である。しかし、歴史公園開園後において、それまでの調査分析の成果をまとめ、目的を明確にした調査の計画や方法などを立案し、本格的かつ細密な発掘調査を公開しながらおこなう必要がある。発掘現場の公開については、歴史公園の基本計画にもうたわれている。

なお、調査に関する指導については、文化庁記念物課はじめ佐賀県文化財保護審議委員、調査内容に造詣の深い専門家などに依頼している。

調査終了後の遺構の埋め戻しについては、当初真砂土によって発掘された遺構が隠れる程度埋め、その後調査開始時に除去していた表土によって完全に埋め戻していたが、検証のための再調査の際に、真砂土と遺構との間に界面が生じ斜面などにおいてはズレが生じるなどして遺構を傷つけた部分が確認されたり、再調査の際に遺構の表面に埋もれた状態の真砂土の除去に困難を極めるため、近年では、元来遺構を覆っていた表土をそのまま埋め戻すことにしていている。

1. 調査の種類と法的な手続き、費用負担など

(1) 遺跡の内容把握及び歴史公園整備計画策定の基礎資料を得るための調査

基本的には最小限の発掘（破壊）によって、ある程度の成果を得る方法で調査方法をとっている。

法的には特別史跡指定地内の調査については、文化財保護法第65条に基づいて、文化庁長官宛て現状変更願いを提出し、許可され次第調査を開始し、終了次第埋め戻して旧状に復元している。また、指定地以外の埋蔵文化財包蔵地を発掘する場合でも、整備工事計画等によって遺構が損傷しない限り、同様な調査方法をとっている。文化財保護法第98条の2に基づいて、文化庁長官宛て埋蔵文化財発掘調査通知書を提出している。この種の調査については基本的に文化庁の補助金事業としておこなっている。

これらの発掘調査によって出土した遺物については、遺構を完全に発掘しないため、すべては取り上げないが、遺構の年代を知る資料や埋め戻した場合将来損傷や劣化の可能性がある資料については取り上げ、吉野ケ里遺跡発掘調査事務所に保管し整理をおこなっている。ただし、重要文化財等に指定された資料については、現在佐賀県立博物館で保管し、展示などに活用している。出土し取り上げた遺物は、その年度の末に文化財保護法第98条の3に基づき、所轄の神崎警察署に埋蔵文化財発見通知を提出している。

(2) 歴史公園整備工事で破壊される遺構の調査

史跡指定地内においては、整備のために遺構を破壊することはないが、無指定地域において構築や便益施設建設などの要因で、記録保存のための発掘調査を実施する場合は、遺構を完全に発掘し記録として保存している。この場合も文化財保護法第98条の2に基づいて、文化庁長官宛て埋蔵文化財発掘調査通知書を提出している。こ

の種の調査については基本的には国営区域については建設省からの受託事業として、県営区域については県の開発部局からの再配当事業としておこなう予定である。

また、出土した遺物はすべて取り上げ、吉野ケ里遺跡発掘調査事務所に保管し整理をおこなっているが、その年度の末に文化財保護法第98条の3に基づき、所轄の神崎警察署に埋蔵文化財発見通知を提出している。

2. 発掘調査の方法

実際の発掘調査の方法については、調査の目的を明確にした後調査区を設定し、バックフォアなどの建設機械によって表土を除去するが、小範囲の調査の場合は人力のみで行う場合もある。その後の遺構検出や遺構発掘はすべて人力によるが、その手法は調査区の広狭や目的によって異なる。

(1) 小範囲の調査区の場合

環壕の連続線を把握する場合や、地形、土地の買収状況によって面積の狭い調査区（大半が細長い調査区）を設定した場合は、調査によって破壊される面積が少ないために検出した遺構の一部を完全に発掘し、検出遺構の写真撮影と実測、堆積状況の土層図作成などをおこない発掘情報を記録する場合もある。また環壕跡などの連続線の確認の際は路線のみを確認し振り下ろしが多い。位置の測量は原則的には国土座標に基づいている。

(2) 広範囲の調査区の場合

狭い調査区では遺跡の内容が掴めないと判断した場合、広範囲な発掘調査を実施するが、表土除去の後、特に環壕跡や竪穴建物跡、大型の柱穴、土壤などの遺構については完全に発掘するのではなく、最小限の調査（破壊）で最大限の成果をあげられるよう努力している。例えば環壕跡の発掘の場合、他の遺構と同様平面的に遺構の検出をおこない、遺構分布図を作成して、環壕跡の要所要所に断面観察のためのトレンチを設定し、環壕の断面形態や深さ、内部の埋土や土器などの堆積状況を記録し、遺物を層位的に取り上げるにとどめている。

調査区はすべて国土座標によって測量し、調査区内部の遺構も座標によって図面上に記すことができるようになり、検証するための再発掘にあたっても容易にその位置がわかるようにしている。

写真撮影は、35mm版と4×5inch版（またはプローニー版）のカメラを用い、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルム（場合によってはカラーネガフィルム）に撮影している。また広範囲の調査区については、業者に委託してバルーンによる空中写真撮影をおこなっている。遺構実測は、調査区位置図は縮尺500分の1、遺構配置図は縮尺100分の1、遺構実測図は縮尺20分の1、遺物の出土状況などは縮尺10分の1でおこなっているが、作業員（実測要員）や調査員、あるいは埋蔵文化財の測量専門業者に委託しておこなっている。

出土遺物の整理は吉野ケ里遺跡発掘調査事務所でおこなっているが、洗浄（青銅器・鉄器などの特殊な遺物については精び落としなど）の後、註記、接合、復元を施し、実測をおこなっている。遺物実測は、基本的に原寸で、甕棺など大型のものについては縮尺2分の1あるいは3分の1でおこなっている。

3. 調査中の遺跡・遺物の公開

現在、仮整備の段階で公開している復元集落周辺における発掘調査については、見学路や案内板などを設け、見学者に対し積極的に公開しながらおこなっている。また、重要な遺構や遺物が出土した場合には、参加しやすい休日などを選び、発掘現場において現場説明会を、展示室において遺物の特別展示会などをおこなっている。発掘状況と整備された復元集落の両者を見学することによって、文化財についての理解が進むものと考えられ、将来にわたって発掘中の遺跡公開を継続する必要がある。

IV. 調査の成果

1. 調査の年度別の概要

平成元年度からの吉野ヶ里遺跡発掘調査は、平成元年度に102箇所の調査区を設けて実施した後、平成2年度から7年度末までに124箇所の調査区（第103調査区～第226調査区）を設定して実施した。なお、前回の報告（佐賀県文化財調査報告書第100集「吉野ヶ里遺跡」1990年3月）で1～89調査区の概要については述べているので、本書では掲載することができなかった第90～102調査区についても今回加えて報告する。

(1) 平成元年度の調査

第90～102調査区では、平成元年度までの調査で明らかになっていた南内郭西方外環境外側（吉野ヶ里地区V区）の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群の範囲を確認する調査をおこなった。トレンチ調査ではあったが、弥生時代の竪穴住居跡11基以上とともに弥生時代後期から終末期と考えられる掘立柱建物跡5基以上を確認し、高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群の範囲を、取り合えず外環境の外側から段丘裾部までの約2.2haと推定することができた。また、この建物群の南側では急な傾斜の落ち込みが確認され、あるいは段丘斜面を切り落すなどの地形の変化をおこなっていた可能性も考えられる。いずれにせよ、将来の面的な調査が望まれた。

(2) 平成2年度の調査

環境集落の南と東への広がりを確認するための調査をおこない、明確な外環境の延長部分を確認するに至らなかった中で、南内郭跡南東方の田手川左岸（杉籠遺跡・田手遺跡ほか）と右岸（吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区）の段丘裾部を巡るらしい溝跡を検出した。特に右岸部分では弥生時代中期から後期と考えられる溝の外側（東側）に土壘が残存しており、内側には斜めに穿たれた逆茂木状の杭群の跡と考えられる小穴群が多数確認された。この溝跡を、段丘西を巡る外環境の延長線と考えた場合の環境によって囲まれた区域の面積は、高床倉庫と考えられる南内郭跡西の掘立柱建物跡群（約2.2ha）を含めて、約40haとなった。

また、未調査区の確認調査にも一部着手し、JR長崎本線北の南部段丘上（田手一本黒木地区Ⅰ区）において北埴丘墓と同様の工法で弥生時代中期前半に築かれた埴丘墓状の盛土遺構（南埴丘墓）や、平成元年度に一部確認していた青銅器鋳造に関わる土壙状の遺構（田手二本黒木地区Ⅲ区）を調査した。

(3) 平成3年度の調査

南内郭跡東部の環境集落への主たる出入口と考えた地区（吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区）の調査や、南内郭すぐ南（同地区）の壺棺墓群などを調査を実施した。南内郭跡東（吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区）に沿って列を成していた壺棺墓群がこの地区で新たに検出した弥生時代中期を中心とする約100基以上の壺棺墓の墓域で終了していることが判明した。また壺棺墓群の中に新たに掘削された弥生時代後期の塹跡からは小形製鏡などが発見された。

(4) 平成4年度の調査

特別史跡内でこれまで未調査だった県道吉田鶴線の北に接する地区（吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区、工業団地計画に伴う発掘調査で明らかになっていた県道南の環境区画跡一後の南内郭跡と区別するために北内郭跡と呼ぶ）と、平成元年に一部調査を実施し7基の壺棺墓とともに銅劍5点、ガラス管玉79点などを出土した北埴丘墓（吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区）の再調査を実施した。

北内郭地区では北半部を主に調査し、2重の環壕（内壕・中壕）によって囲まれた弥生時代後期の環壕区画跡（北内郭跡）を検出した。この環壕区画の全体像を把握するため、南半部にはトレンチを設定して調査した。その結果、2重の環壕はA字形に近い平面形をしていることが判明した。その他にも横穴式石室をもつ小円墳、平安時代から中世にかけての墓群、中世の塙跡などが発見され、多くの土器とともに青銅製武器形祭器（中広形銅戈）や鉄器などが出土した。また北墳丘墓の調査では新たに弥生時代中期の斐棺墓7基を発掘し、内部から銅劍3点を発見した。

（5）平成5年度の調査

北内郭跡の調査を継続するとともに、北墳丘墓と北内郭跡の間（吉野ヶ里丘陵地区V区）および北墳丘墓の北東に位置し、平成元年に墓壠のみ検出し埋め戻しておいた斐棺墓地の調査を実施した。また、墳丘墓東に位置する大型の土壙についても内容確認のための調査を実施した。

北内郭跡の調査では、平面A字形に巡る二重の環壕による区画の全域と、その内外で多くの竪穴建物跡や掘立柱建物跡などを検出した。環壕区画内部で3間×3間（約12.5m四方）、径40cm～50cmの柱16本を用いた大型の建物跡を見えるなど、北内郭跡の建物配置や変遷、構造など、北内郭の全貌が明らかになった。また、斐棺墓地の調査では、それぞれの墓域を構成している斐棺墓を主体とする墳墓の配置や変遷などが明らかになり、中期の古い2基の斐棺墓の棺内から多数の縫い合わせた部分を含む多数の絹布片などが出土した。また、墳丘墓東の大型土壙からは中期中頃以降の長期間にわたる多数の土器などが出土し、墳丘墓周辺での長期にわたる祭祀行為の存在を想起させた。また、北墳丘墓南の斐棺墓地の北部では、北墳丘墓と関係が深いと考えられる弥生時代後期の掘立柱建物跡を確認した。

（6）平成6年度の調査

遺跡南部の状況を把握するために南内郭跡南および南東部一帯（吉野ヶ里丘陵地区VI区）の調査を実施した。南内郭跡南一帯からは弥生時代前期の環壕の一部、出入口（陸橋）をもつものを含む中期の大規模な漆跡や、区画と考えられる後期の漆跡や、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・貯蔵穴跡・斐棺墓・土壙墓など、中世の塙跡などが発見された。また南東の谷部（吉野ヶ里丘陵地区VII区）では、弥生時代の人工的な谷が、その東の水田部からは中・近世の溝跡や井戸跡・掘立柱建物跡などを確認した。

また、北内郭跡北西約80m（吉野ヶ里丘陵地区II区）に位置する外環壕跡北西の斜面の調査を実施した。斜面下では多数の小穴群や土壙、弥生時代中期の斐棺墓や後期と考えられる石蓋土壙墓などを確認した。小穴群は外環壕の方向あるいは斜面裾の方向に帶状に分布していることから、防衛のための逆茂木状の施設が存在していた可能性もある。この部分の外環壕は、中期から後期初頭にかけての斐棺墓群を壊して掘削されていることが昭和62年度の発掘調査で明らかになっていたが、この斐棺墓群の分布範囲が数少ないものの斜面下の部分まで達していることが確認された。

（7）平成7年度の調査

7年度後半頃から、国営歴史公園の造成工事が開始される計画であったため、北墳丘墓周辺（吉野ヶ里丘陵地区V区）や北内郭跡（吉野ヶ里丘陵地区VI区）の補足調査、南部の外環壕出入口（田手二本黒木地区II区）の調査を実施した。また南部未調査地区においてまとまった土地の買収が終了したため、段丘上の妙法寺跡の一部

Tab. I 吉野ケ里遺跡発掘調査調査区一覧表

(平成2~7年度、元年度の第90~102調査区も含む)

調査区番号	地 区 名	調査面積 (m ²)	調査年度	主 な 遺 構	主 な 遺 物	備 考
90	吉野ケ里地区 VI区	27	元	弥生…柱穴		高床倉庫群
91	~ ~	145	~	弥生…掘立柱建物跡2 平安?…井戸跡1		~
92	~ ~	85	~	弥生…竪穴住居跡2、掘立柱建物跡1 (第102調査区にかかる) 古墳…掘立柱建物跡1 (第100調査区にかかる)		~
93	~ ~	79	~	弥生…竪穴住居跡2 古墳…竪穴建物跡2		~
94	~ ~	65	~	弥生…竪穴住居跡1		~
95	~ ~	59	~	弥生…竪穴住居跡1		~
96	~ ~	71	~	弥生…竪穴住居跡4、掘立柱建物跡2		~
97	~ ~	75	~	弥生…柱穴		~
98	~ ~	24	~	弥生…柱穴、南部は段丘切り落し		~
99	~ ~	29	~	弥生…柱穴、南部は段丘切り落し		~
100	~ ~	12	~	古墳…掘立柱建物跡1 (第92調査区のものと同)		~
101	~ ~	30	~	弥生…竪穴住居跡1、掘立柱建物跡1 (第92調査区のものと同) 古墳…竪穴住居跡1	弥生…石包丁1、土師1	~
102	~ ~	9	~			
103	吉野ケ里近境地区 VIII区	16	2	弥生…溝 (環壕?) 路1		
104	~ ~	18	~	弥生…溝 (環壕?) 路1		
105	~ ~	15	~	弥生…溝 (環壕?) 路1		
106	~ ~	50	~	弥生…溝 (環壕?) 路1、柱穴		
107	~ ~	7	~	弥生…溝 (環壕?) 路1	弥生…石包丁3、石製防護柵1	
108	田手川東 (二本松地区)	44	~			
109	~ (一本松地区)	131	~			
110	~ (~)	36	~			
111	~ (杉畠地区)	66	~	弥生…溝跡2		外環壕の可能性あり
112	~ (二本松地区)	80	~			
113	~ (~)	23	~			
114	~ (~)	30	~			
115	~ (~)	34	~			
116	~ (杉畠地区)	16	~	溝路1		
117	吉野ケ里近境地区 VIII区	68	~	弥生…小穴		
118	~ ~	25	~			
119	~ ~	23	~	弥生…溝路1、柱穴、小穴		段丘裾部
120	吉野ケ里近境地区 VII区	52	~	中世…溝路2、井戸跡1、土壌1		~
121	~ ~	82	~	中世?…溝路2、小穴	弥生…磨製石劍切った、土師1	~
122	~ ~	38	~	溝路1、土壌路、枝	弥生…一枚入組括瓦石器、木製鋸齿	
123	田手川東 (二本松地区)	20	~			段丘裾部
124	~ (~)	80	~		弥生…石劍1 平安…石器1	外環壕の可能性あり
125	~ (~)	30	~			
126	~ (~)	96	~			
127	~ (~)	56	~			
128	~ (~)	74	~			

調査番号	地区名	調査面積 (m ²)	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考
129	~ (+)	34	~			
130	~ (-)	66	~			
131	吉野+里丘陵地区 VIII区	103	~	発生一小穴多數 (逆茂木状杭群)		
132	吉野+里丘陵地区 VII区	337	~	発生一層板岩、土壤層3、土壤2、暫穴状跡、発生鉄器類		
133	田手二本里木地区 VIII区	179	~	発生一小穴多數		逆茂木状杭群
134	~ ~	30	~	発生一小穴多數		逆茂木状杭群
135	~ ~	179	~	発生一小穴多數		逆茂木状杭群
136	田手二本里木地区 VIII区	8	~	中世一溝跡	発生一枚石鏡	
137	~ ~	6	~		近世一網目	
138	~ ~	3	~	中世一溝跡		
139	~ ~	5	~		発生一枚石鏡	
140	吉野+里丘陵地区 VIII区	6	~	中世一溝跡		
141	~ ~	9	~			
142	田手二本里木地区 III区	54	~	発生一溝跡、土壤2 (内は暫穴状跡の可能性あり)	発生一枚石鏡	
143	田手二本里木地区 III区	6	~	発生一溝跡		
144	田手二本里木地区 III区	7	~	発生一溝跡、土壤1		
145	~ ~	9	~	発生一溝跡、小穴		
146	~ ~	2	~	発生一溝跡1、小穴		
147	~ ~	35	~	土壤1	発生一枚石鏡、中世一枚銅鏡 (刀子鏡) 鎌丘状遺跡 (南端丘頂) 上	
148	~ ~	41	~	発生一枚穴状跡跡1、土壤2	発生一枚石鏡1、石鏡1、石鏡	
149	~ ~	53	~	発生一枚穴状跡跡1、土壤層 (暫穴?) 1、土壤2、溝跡	発生一枚石鏡1、扁平片石石鏡1、土壤1	
150	~ ~	47	~	発生一枚穴状跡跡1、中世一土壤1	発生一枚瓦状陶文土器片2	
151	~ ~	23	~	溝跡1、土壤1		
152	~ ~	144	~	発生一枚瓦状陶文土器跡1、中世一溝跡2	発生一枚石鏡、石鏡織錦章 (瓦器品) 1	
153	~ ~	19	~		発生一枚瓦状土器多數、石器2、石鏡1、 鐵劍石劍、ガラス小瓶1、土壤1	
154	田手二本里木地区 III区	133	~	発生一溝跡1、土壤4 中世一溝跡1、井戸跡1	発生一枚瓦状陶文土器、石鏡、刀子鏡、環状石鏡、石鏡1、石鏡2、石鏡3、 鐵劍石劍、鐵劍1、鐵劍2、刀子、石鏡	青銅器鉢造陶器遺跡
155	田手川東 (二本里地区)	60	~	発生一河川带		
156	~ (-)	30	~	中世一枚井戸跡1		
157	~ (-)	15	~	発生一河川带		
158	園田町東 (一本里地区)	32	~		発生一枚石鏡1	
159	田手川東 (二本里地区)	161	~	発生一層板岩4、土壤層3、土壤2、溝跡		JR長崎本線・園田町東
160	~ (II層地区)	5	~			
161	~ (-)	6	~			
162	~ (-)	5	~			
163	~ (-)	5	~			
164	~ (-)	4	~			
165	~ (-)	5	~			
166	~ (-)	5	~			
167	田手二本里木地区 III区	20	~	溝跡1、土壤1		
168	~ ~	13	~	溝跡1		

調査区番号	地区名	調査面積 (m ²)	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考
169	吉野+里丘陵地区 VIII区	577	3	發生一墳墓群18、土塁2、石垣跡1、井戸跡1、土塁跡20	發生一小切跡1、井戸1、人骨片	
170	" VIII区	30	"	中世一溝跡1		吉野+里区公民館敷地
171	" VIII区	289	"	發生一墳墓群1 中世一溝跡1	中世?一鉄矛1	
172	" "	146	"			
173	" "	33	"	發生一小穴多數(逆茂木状状跡)		
174	" "	21	"	發生一小穴多數(逆茂木状状跡)		
175	" "	20	"		中世-鉄刀子(廻形)1	
176	" "	4	"			
177	" "	6	"			
178	吉野+里丘陵地区 VII区	4,320	4 5	發生一墳墓群、土塁羣、石垣跡、墳穴状跡、墓主社建物跡、土塁 古墳一型穴状跡、古墳 平安一中世-土塁羣、土塁、石垣(墓は第30調査区の縦にまとめて記入)	發生一鉄劍(櫛板の頭部品)	北内郭跡北半部、 南半部の一部
179	" "	1,950	4	發生一墳墓群14。(平安元年調査時の7を含む)	發生一部形跡1、中世形跡1、青銅器 把頭1、石器把頭1	北丘基柵調査 (全面)
180	東背蔵村辛上地区	69	"	發生1-小穴多		東背蔵村辛上、H27地盤
181	吉野+里丘陵地区 VI区	8,680	4 5	發生一墳穴状跡3以上(墳穴状跡2時刻不明のものも含めて75)、 墓主社建物跡25以上、便用窓34、土塁跡12、馬足石痕跡1、便用 土塁1、石垣1、井戸跡4件、貯水池1、土塁 平安一中世-土塁羣、土塁、石垣 平安一中世-土塁羣、土塁跡10件以上、土塁、溝跡、道幅10m	發生一鉄矛(矛・槍・ヤリガンナ-刀子-刀 盾-鐵劍-矛-中世形跡1、ガラ ス小刀-紀元後1器 平安-中世-鉄刀子1件、刀宿 平安-中世-馬足石痕跡1	北内郭跡 (内宮は継続した南北部 の第178調査区も含む)
182	" "	1,886	5	發生一前庭跡以上、便用窓22以上、墓主社建物跡以上、墓主社建物 跡3 平安-土塁羣1	人骨片	北埴丘系南の豐根原群
183	" "	810	"		中世後手から後期後手の土器群	北境庄着東の大豊根原土塁
184	" "	1,173	"	發生一墳墓群10、土塁羣1、馬足石痕跡1	鐵矛1、石器と青銅器文化(便用窓1)、人骨片	北境庄着北東方の豐根原群
185	吉野+里丘陵地区 VII区	517	6	發生一墳墓4、墳穴状跡6、墓主社建物跡1、貯水池1、便用窓1、 土塁跡2 中世一溝跡1、土塁羣1	發生一石臼10、石器1、石器と青銅器 4、石器石器(内宮は2つ丸)、便 用窓6件、人骨と青銅器1件、井戸1、 馬足石痕跡1件、石器1、鐵石1、 土器1、石器石器1件	
186	" "	413	"	發生一墳・溝跡2、墳穴状跡10以上、墓主社建物跡1件、貯水池1 中世一溝跡1、土塁羣1	發生一石臼12、石器1、便用窓2件、 土器2	
187	" "	978	"	發生一溝跡4、墳穴状跡6、墓主社建物跡1件、貯水池 中世一溝跡1	發生一石臼17、石器4、便用窓10、石器1 便用窓6件、馬足石痕跡1件、井戸1、 馬足石痕跡1件、土塁跡1、土器4	
188	" "	572	"	發生一各(人工)溝1、石垣1、墓主社建物跡1、土塁 中世一墳主社建物跡(2×4間、東北)	發生一石製劍身1	
189	" "	174	"	中世一墳主社建物跡(2×4間)	發生一石器1、便用石器1、石器石器1、 鐵石1、鐵石1、ガラス小刀1	
190	" "	41	"	發生一溝跡1		
191	" "	179	"	發生一溝跡1、貯水池1、墓主社建物跡、便用窓2 中世一溝跡1	發生一石臼11、鐵ヤリガンナ1、石器石器1	
192	" "	46	"	發生一溝跡1、中世一溝跡1、土塁	發生一石臼11、石器1、便用窓1、 鐵石1、土器3	
193	" "	56	"	發生一石塁1	發生一石臼1、土器1	
194	" "	267	6 7	中世-近世一溝跡1、墓主社建物跡、鐵石1、井戸跡1	發生一石臼10、土塁跡2件、土器2 平安-溝跡1、土器1	
195	吉野+里丘陵地区 III区	12	6 7			
196	" "	78	6 7	發生一外溝跡1、便用窓1、土塁	發生一鐵製石斧1	
197	" "	42	6 7			
198	" "	28	7	發生一前庭跡1		
199	" "	17	"			
200	" "	29	"	發生一溝跡1、墳穴状跡1		

調査区番号	地区名	調査面積 (m ²)	調査年度	主な遺構	主な遺物	備考
201	" "	115	7	発生一壇形		
202	" "	233	"	発生一土塁形	発生一ガラス小玉3	
203	" VI区	80	"	発生一溝跡、土塁形、竪穴住居跡 古墳一竪穴住居跡		
204	" "	98	"	発生一溝跡、竪穴住居跡 古墳一竪穴住居跡		
205	" "	123	"			
206	" "	32	"	発生一壇形1、土塁形1		
207	" "	43	"			
208	" "	81	"			
209	" "	84	"		発生一壇形石跡、磨製石器、石器13	
210	" "	46	"	発生一壇形2 古墳一土塁1 中古一溝跡1	発生一壇形石跡1	
211	" "	161	"	発生一壇形(外縁) 斜1、壇形(外縁) 直人口跡、壇形		外埋出人口跡
			"	古墳一竪穴住居跡2		
212	" "	35	"			
213	" VII区	273	"	発生一壇形(中縁) 斜1、竪穴住居跡		北内部路
214	" VII区	13	"	発生一外壇形 斜1、中古一溝跡1		
215	" VII区	171	"	発生一壇形(中縁) 斜1、竪穴住居跡1		
216	" VII区	17	"			
217	" "	7	"	発生一竪穴住居跡1		
218	" "	9	"	発生一溝跡1、竪穴住居跡1		
219	" VII区	15	"	発生一壇形(中縁) 斜1		
220	田手一本里木地区 I区	852	"	発生一壇形2 中古一竪穴住居跡1、井戸跡1、溝跡2、土塁2、壇形1	発生一石器12、石器破片1、骨器1	中世寺院妙法寺跡
221	田手二本里木地区 II区	452	"	発生一壇形(外縁) 斜1、壇形(外縁) 直人口跡2、竪穴住居跡2、若葉 丸柱1柱上、壇形2、柱穴・小穴跡多數 中古一井戸5	1. 石器1、石器2、土塁2、壇形1	外埋出人口跡
222	田手一本里木地区 III区	263	"	発生一壇形(外縁) 斜1 中古一溝跡・土塁2		
223	" "	331	"	発生一竪穴住居跡1 中古一溝跡1		
224	田手二本里木地区 III区	23	"	発生一壇形3		
225	" "	21	"	発生一溝跡1		
226	" III区	18	"	発生一溝跡2		

発生一壇形、白陶、削刃、瓦、陶器、漆器、
鏡1枚、鏡2枚、石器1件(破片)、臼1個
発生一壇形、瓦(テラコッタ)、瓦1枚
・鏡1枚
発生一壇形1、柱 中古一溝跡1

と考えられる部分（田手一本黒木地区Ⅰ区）と段丘南端西の段丘裾の水田部（田手一本黒木地区Ⅱ区）の調査を実施した。

北堀丘墓周辺では、墳丘墓の南西に位置する外環境の出入り口（陸橋）部が確認され、墳丘墓の北方には弥生時代中期前半の竪穴住居跡群や古墳時代（6世紀）の竪穴住居跡群が、西や北西方には一般の斐棺墓群が分布していることが判明した。北内郭跡周辺では、中壇の北東側の塚の南東への延長線の確認などをおこなったが、この部分で中壇に突出部が存在し、その内側に掘立柱建物跡が存在することが明らかになった。妙法寺跡推定地では区画溝や掘立柱建物跡群、井戸跡などを発掘し、国産・輸入の陶磁器などを得た。南部の外環境の出入り口部の調査では特殊な構造の出入り口跡を確認し、周辺からは弥生時代前期の竪穴住居跡や平安時代の井戸跡群を確認した。段丘南端西の水田部では、歓状の高まりと溝状遺構が交互に南北方向に設けられた中世の水田状遺構を確認した。この遺構の直下に木器などの植物性の遺物を多数包含する弥生時代の層が存在し、一部トレンチ調査を実施して土層の確認をおこなった際に、大型の柱や鼠返しなどが出土した。なおこの地区的調査は8年度に本格的に実施した。

以下、平成2年度以降に実施した調査の概要を、範囲確認調査、北堀丘墓、北内郭跡、妙法寺跡、その他の調査に分けて述べることにする。

2. 調査の成果

①環境集落の範囲確認調査

平成元年度の調査によって、後期の環境集落の西側の範囲はほぼ確認できたものの、東側については不明のままであったため、平成2年度には環境集落の東の範囲を確定するトレンチ調査をおこなった。

②田手川東岸の県道吉田・鶴線周辺（第109・110・112～115・123～130調査区）

調査時は水田として利用されていたところで、耕作土の下部には細かい粒子の砂層が堆積し地表下3.0～3.5mあたりで砂礫層となる。湧水がひどく調査は深さ約4mまでとしたが、何ら遺構は確認されず、砂層や砂礫層から摩滅した弥生時代から中世にかけての土器・陶磁器片が出土した。一帯は田手川の氾濫によって遺構が破壊されたか、旧河道であったものと考えられた。

③田手川東岸南部（第108・111・116・155～157・159～166調査区）

吉野ケ里段丘南部が田手川の東へ張り出した部分の北および東の水田部であるが、第111調査区では段丘に近い部分で弥生時代の溝跡を確認したが、西方田手川西岸の第103～107・122調査区で確認された溝跡と連続する可能性があり、あるいは環境集落の東を画する外環境とも考えられた。その他の調査区でも耕作土下部は砂層となっており遺構は確認できなかったが、JR線周辺の第155・157調査区では粗砂層が確認され完形にちかい弥生土器群が出土するなど、田手川の旧河道に近い部分であり、吉野ケ里道路南部の東の境界と考えられた。なお、国道34号南の第159調査区では弥生時代中期の斐棺墓などが確認され、道路の南東の境界と考えられた。

④田手川西岸の南内郭跡南東地区（第103～107・117～122・131・133～141・173・174調査区）

田手川そばの第103～107調査区では幅約12mの東西方向の溝状の遺構が確認され、第121・122調査区では東側で急な落ち込みが確認され、落ち込みの下端から東約9.5mの位置で、杭で補強された幅4～5mの土壙状の遺構（残存高0.6m）を検出した。外環境の延長部分とも考えられる。この地形の落ち込みの斜面にあたる第131・

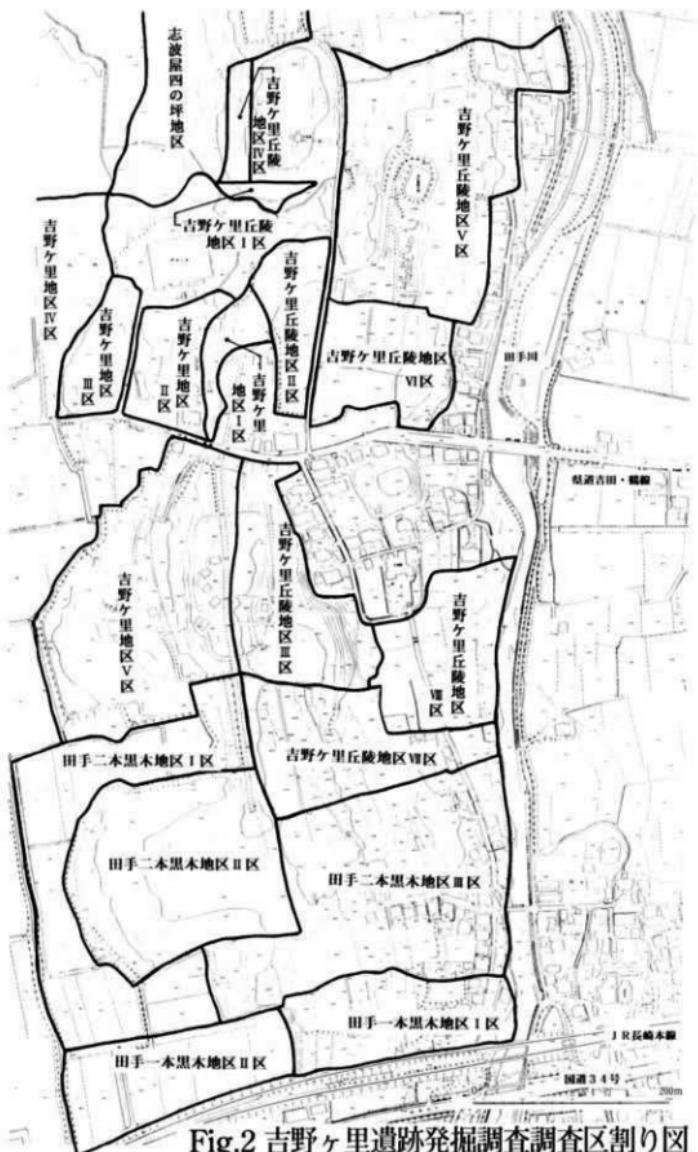


Fig.2 吉野ヶ里遺跡発掘調査調査区割り図



Fig.3 吉野ヶ里遺跡発掘調査調査区位置図

133・134・173・174・119調査区では斜めに穿たれた小穴群が多数発掘されたが、防禦用の逆茂木状の杭群と考えられた。

④段丘南端部（第142・144～146・158・167・168調査区）

JR線と国道34号の間の平成2年度の三田川町教育委員会による調査では、段丘南西裾部が確認され、弥生時代中期と考えられる掘立柱建物跡と考えられる柱穴群が確認された。このため国道南に第158調査区を設けて調査したが、弥生時代から中世の遺物を多数含んだ湿地の包含層が広がっていることが判明した。また、JR線すぐ北の第142・144～146・167・168調査区でも、外環境の延長と考えられる溝跡は確認できなかったため、環境集落の南端はJR線と国道の間付近、一部国道南まで延びると考えられた。なお、道路南西JR線すぐ北の第222調査区の平成8年度の調査で、幅4～5mの外環境の延長部分（出入口の陸橋あり）が発掘され、当初の推定線より西へ拡がることが判明した。

以上のことから環境集落の範囲は、平成元年度までの調査で明らかになった西側に加え、南ではJR長崎本線と国道の間付近（一部国道南まで）から現在の田手川の位置で北方へ谷状に入り込み、段丘東端（第159調査区付近）、さらには北方の段丘東裾部を含む範囲と考えられる。県道以北では環境跡らしい遺構は全く確認できなかつたが、現在の田手川の路線内側（西岸）あたりまでの範囲と考えられる。田手川西岸の南内郭跡南東地区で確認された溝跡は外環境の可能性があり、南内郭跡西方の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群の分布範囲約2.2haを加えた吉野ヶ里遺跡環境集落の範囲は約40haと推定された。しかし、現在の田手川の路線は段丘南部で時期は不明であるが段丘を開削したことは明らかで、推定される弥生時代の河道は第155～157調査区が示すように現在の田手集落が存在する田手川東岸の段丘を大きく開いたものと考えられる。また、南内郭跡南東の谷部に旧河道が存在しなかつたことは平成元年度の調査で明らかになっており、これまでに段丘東側で明確に外環境と確認できる遺構が検出されていない現状を踏まえると、あるいは旧田手川によって環境集落の東が画されていた可能性も考えられる。その場合の面積は約44.5haと考えられる。

（2）その他の調査

平成3年度以降は未発掘地域の内容解明に重点を絞って調査を実施した。後に述べる北埴丘墓と北内郭跡、妙法寺跡を除く各地区の主な調査概要は以下のとおりである。

①青銅器鋳造関連遺構（田手二本黒木地区Ⅲ区、平成2年度調査）

平成元年度の確認調査で、段丘の南端近く（田手二本黒木地区Ⅰ区）に設定した第7調査区から国内出土銅矛としては最古式の細形銅矛の型を彫り込んだ鉄型が出土し、また、その北端から北西約8mの位置から北方向に設定した第11調査区の南端から大型の土壙の一部が検出され、弥生時代中期初頭から前半の土器とともに銅塊や焼土塊・炭化物などが出土したので、平成2年度に一帯の表土を除去し、第154調査区を設けて的確な確認調査を実施した。

この遺構（第154調査区SK04土壙）は、第154調査区内では幅約6m、長さ約8mの長さで、深さは約1.2m～1.4mであり、南へわずかに傾斜している。土壙の北、東、西側の法面は楔形状に傾斜しており、東側には地山を階段状に掘り込んだ部分があった。土壙の床面には、貼り床らしい赤褐色土粘土塊の混じった黄褐色粘質土が20cm～40cmの厚さ堆積していた。遺構の北端近くには径約60cmの柱穴があり、この土壙に上屋などの上部構造

が存在していた可能性もある。

土壤内の埋土からは弥生時代中期初頭から前半にかけての弥生土器とともに多数の遺物が出土した。銅劍・銅矛の鉄型片、青銅（錫分が多いものも含まれる）片、鉛津、炉壁と考えられる焼土片、炭化木、灰などの鉄造関連遺物の他に、鉄造鉄斧の破片を最利用した盤や青銅製素環頭をもつ鐵製刀子、翡翠の管玉や碧玉製の管玉・ガラス製の小玉、壺形土器の中に入った状態のイノシシ類の焼骨などがある。遺物の概要については、先の概要報告書（佐賀県教育委員会「古野ケ里（神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書）」1992年3月）に記しているので省く。

この土壤において跡跡本体の確認はできなかったが、土壤床面の特殊な貼り床の状況や炉の破片と考えられる焼土塊、多数の焼土塊、炭化木、灰の出土などから、この土壤が青銅器鉄造に直接関係する遺構である可能性がきわめて高いと言える。この土壤から出土した遺物や、第7調査区出土の細形銅矛鉄型片や、仮称南埴丘墓に設けた第147調査区で埴丘盛土を掘削した中世の溝跡付近で出土した銅矛の内型（中子）などは、ほぼ同時期の鉄造関連遺物であり、将来広範囲の発掘調査によって一帯の状況を明らかにする必要がある。

②南埴丘墓（田手一本黒木地区Ⅰ区、平成2年度調査）

平成元年度の確認調査で、上記の第7調査区に並行して東約5mの位置に設定した第8調査区のトレンチ壁面に平成元年3月の調査で7基の斐棺墓が発掘され銅劍5本やガラス製管玉79個などが出土した北埴丘墓の盛り土と同様な構築技法で盛ったと考えられる土層を確認した、この調査区の東に接して南北約40数m、東西約30mの高まりとなっている畠地が存在するので、この丘の性格を把握するために平成2年度に確認調査を実施した。

調査は埴丘状の丘のほぼ中央を起点としたトレンチを十字形に設定し、基盤となっているローム層まで掘り下げた。盛土の状態や、盛土に掘り込まれた遺構、さらには基盤に掘り込まれた遺構などの検出、およびその年代を調査することにした。

調査の結果、トレンチで確認できた盛土の遺存範囲は東西約45m、南北48m以上であり、盛土は最も堆積している部分で2.8mの厚さであった。盛土の方法は、北埴丘墓と同様、基盤となっている黄褐色系のローム層と当時の表土と考えられる黒色系の土を堆積させ版築様（夯土）に小山を幾つも築きながら全体を高めるものと考えられる。

盛り土に掘り込まれた遺構は、中世のものと考えられる溝（塙）と考えられるもの以外には、中心から北へ向かって設定した第149調査区の中央や北で検出した大型の土壤墓状の遺構のみであった。この土壤墓状の遺構は、長さ2.57m、幅0.98m、深さ0.9mの東西方向の土壤で、縦状に編んだ植物が敷かれた状態で出土した。弥生時代のものと考えられる。

盛土内から出土した土器の大半は弥生時代中期初頭から中期前半のものと考えられる。北の第149調査区の南端と南の第150調査区の中央からそれぞれ1基と2基の平面円形の豊穴住居跡の一部と考えられる弥生時代中期初頭から前半にかけての遺構が検出され、また、西の第151調査区の東端からも中期初頭のものと考えられる貯蔵穴跡が検出されているが、特に第149調査区の遺構は埋土の堆積状況から一挙に埋め戻されたものと考えられる。第150調査区の遺構の柱穴跡からは朝鮮半島系の粘土帶土器や牛角把手などが出土している。

これらのことから、この埴丘状の丘は、北埴丘墓と同様、弥生時代中期初頭から前半までの豊穴住居などを一挙に埋め立て、中期前半の内には築造されていたものとみられる。盛土に切り込まれた遺構のうち弥生時代のものと考えられるものは先の土壤墓状遺構のみであり、斐棺墓など明確に埴墓と言える遺構は未検出であり、近い

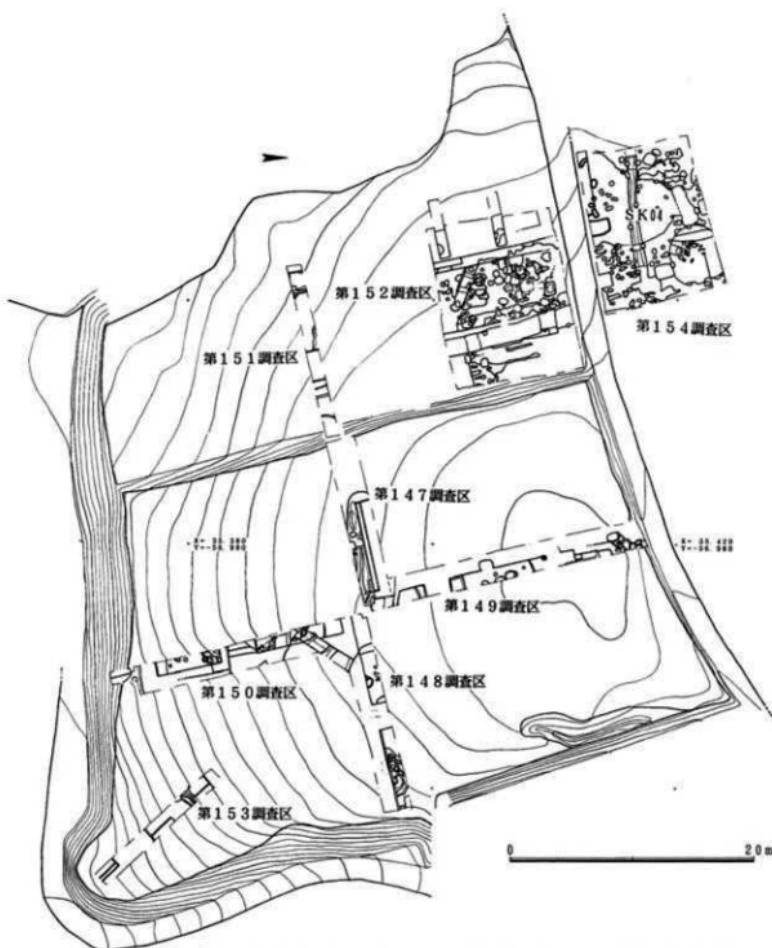


Fig.4 吉野ヶ里遺跡南墳丘墓・青銅器鑄造関連遺構実測図

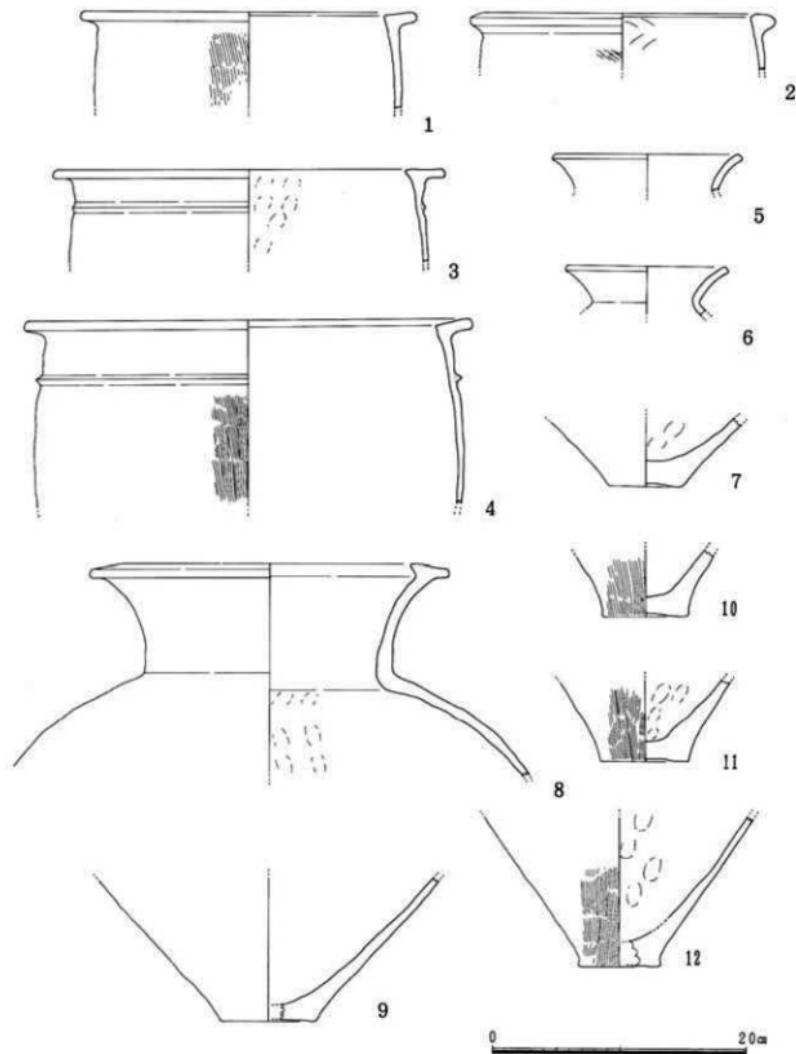


Fig.5 吉野ヶ里遺跡青銅器鑄造関連遺構出土弥生土器実測図

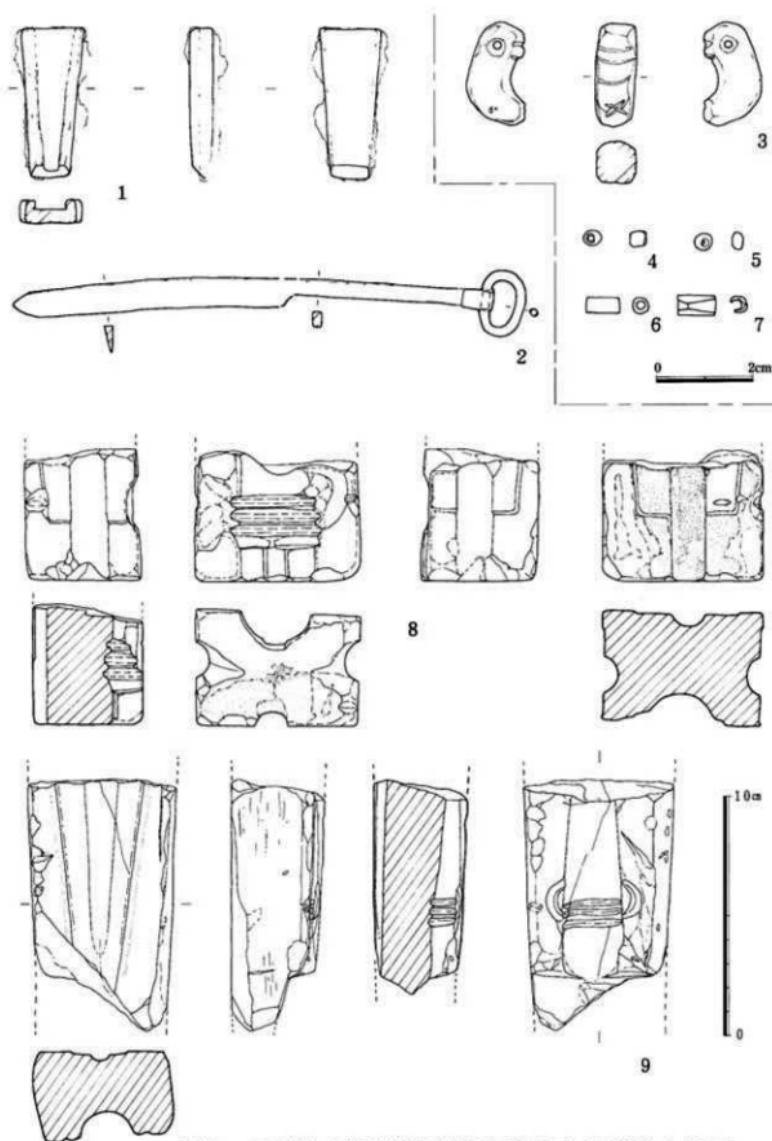


Fig.6 吉野ヶ里遺跡青銅器鋳造関連遺構出土遺物実測図

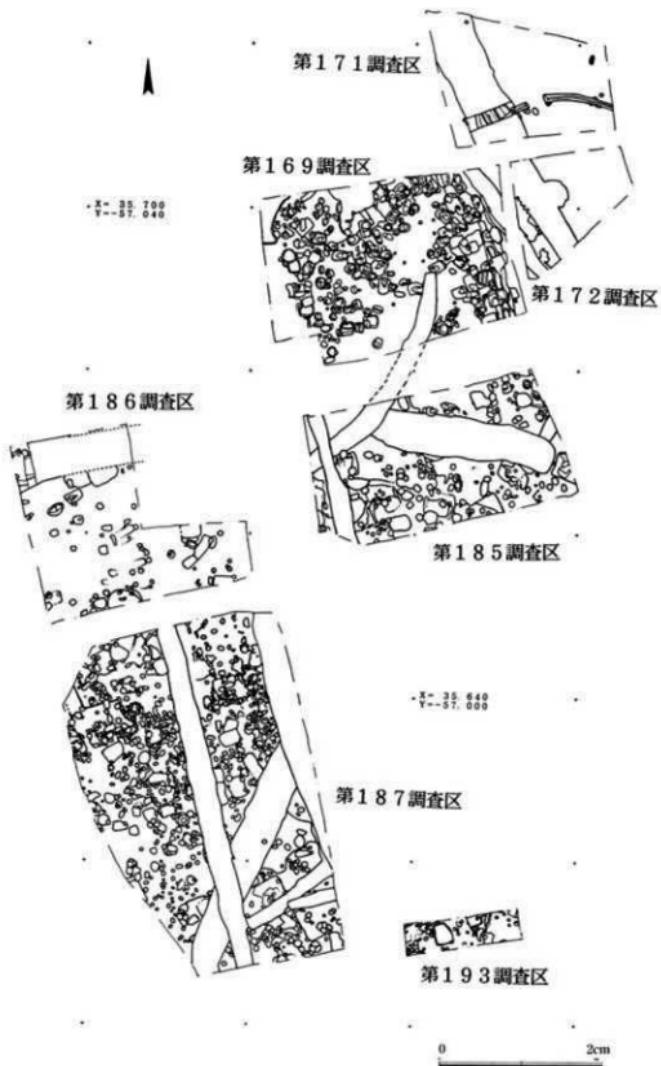


Fig.7 吉野ヶ里遺跡南内郭南方の調査区遺構分布図

将来再調査を実施して、この盛土された丘の全体規模や構造、この丘に伴う遺構などを明らかにするとともに、墳墓であるのかどうかについて確認する必要がある。

③南内郭跡南方・南東方（吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ・Ⅴ区、平成3・6年度調査）

平成3年度は、現在仮整備し公開している南内郭の南に接する地区的段丘尾根上の状況を知るために調査を実施した。吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区の第169調査区（約580m²）では弥生時代の斐棺墓118（103）基、土塚墓2基、塙・溝跡5条、土塚約20基などを発掘した。

斐棺墓は弥生時代前半期の金海式期に出現（全体の約18%）し、中期初頭の城ノ越式期と中期前半の汲田式期に増加（どちらも約37%）し、中期中頃の須賀式期の確実なものは1基のみであった。成人用と小児用の比率は成人用63%、小児用37%である。なお、斐棺墓については墓壇と棺内の埋土を完全に除去したものはなく、斐棺の口縁部の破片などを取り上げたに過ぎない。土塚墓は2基確認したが、うち1基には棺材の板の痕跡が残っており、木棺墓の可能性が大きい。墳墓に伴う副葬品などは出土しなかったが、斐棺内から少量の人骨片が出土した。

弥生時代後期のS D塙跡は、幅1.3m～2.3mで断面は逆台形となっている。調査区の南端東寄りの位置から北へ約10m区間検出したが、北端で途切れている。出入り口などの施設と考えられるが、調査区内では北側の塙跡は確認できなかった。内部からは後期後半を中心とした弥生土器群とともに、小形彷製鏡1点や鉄器1点が出土した。

また、第169調査区の東および北東に設けた第171調査区では弥生時代前期の溝跡（第171調査区のS D01）や中世の溝跡（第171調査区のS D02）などが確認された。弥生時代前期の溝跡は、一帯は後世の削平がひどく遺存状態が悪いが、幅0.6m～1.0mで、径約13mの平面円形に近づいているようであり、この弧の北部の西よりには幅2.2mの掘り残しの出入り口部が存在する。断面形態はコ状に壁が立ち上がっているが、おそらく断面V字形の塙の最下部の直に掘られた部分だと考えられる。この溝跡の南および東への延長線は削平がひどく確認できず、この溝跡が昭和63年度に約150m区間発掘し、平成元年度にその延長線の行方を調査した田手二本黒木地区の段丘尾根を回んで掘削された弥生時代前期の環境の北への延長部分に当たるものか、単独に平面円形に掘削されたものかは不明であった。

平成6年度は、先の第169調査区の南および東、南東一帯（吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区）の確認調査を実施し、弥生時代から中世にかけての遺構を多数確認した。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区の第190・191・192調査区で、田手二本黒木地区の段丘尾根を回んで掘削された弥生時代前期環塙跡の東側塙の北への延長線（S D1957）が確認された。第191調査区の環塙跡周辺では弥生時代中期初頭から前半にかけての27基の斐棺墓群が検出されたが、ほとんどの斐棺が環塙跡に切り込んで営まれていたり、墓壇が環塙の肩と一致しているなど既に埋没していた環塙の存在は意識していたものと考えられる。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区と田手二本黒木地区Ⅰ区付近に存在する段丘くびれ部（第185・186調査区）では、段丘を南北に分断するような幅4m前後、深さ2.5m以上の断面逆台形の弥生時代中期の大規模な塙跡（S D1801）を検出した。第185調査区の南西隅では、この塙跡の掘り残して設けた出入り口跡が確認されたが、幅は1.5m前後と狭い。この塙跡とは別に第187調査区で確認された断面逆台形の中頃の塙跡（S D1836）も幅4m前後と大規模であるが、遺存していた深さは約1.5mであった。

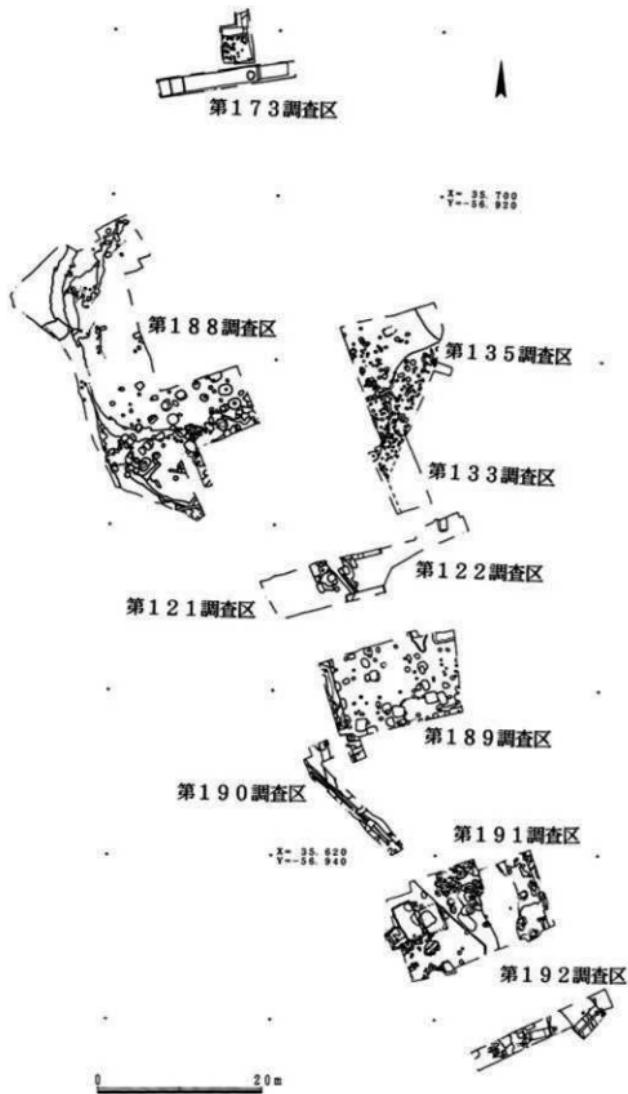


Fig.8 吉野ヶ里遺跡南内郭南東方の調査区遺構分布図

確認された前期から後期にかけての溝跡や環境跡に伴う陸橋による出入り口跡は、特にこの周辺に集中しており、段丘くびれ部に東西から入り込んでいる谷が集落中心部へ至る主要な通路であったものと考えられる。この中期の跡の南方ではこれまでに中期の大きな墓地は確認されておらず、北方には近接して吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区第169調査区の前期から中期にかけての斎棺墓地、その北には吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区の弥生時代中期の斎棺墓地、さらに北方には大規模な斎棺墓地が営まれており、この環境は中期段階において居住区と墓域とを区画する機能をもっていたものと考えられる。

第185・186・187調査区では、幅約3m、深さ約1mの断面逆台形の溝跡を含む弥生時代後期の溝・塹跡を数条確認したが、将来広域的な調査を実施し、設けられた意味や内容などを明らかにする必要がある。一帯からは中期から後期にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡を数基確認したが、特に後期の遺構は他の地域に比べると数・密度はともに少ない。積極的な土地利用がおこなわれていなかったのか、遺構として残りにくい施設が存在したのか、また、広場として利用されたのかは、今後の周辺の広域的な調査によって判明するものと考えられる。また、東側くびれ部に設けた第188調査区では、中世の遺構群の下部で弥生時代中期に埋没した幅23m以上で東方へ開く谷の跡を確認した。周辺の調査結果を考え合わせると人為的な谷とも考えられる。

一帯では弥生時代以降のものとして中世の塹跡や掘立柱建物跡などを確認したが、この周辺は東妙寺や妙法寺、石塔院などの中世以来の3寺院や、戦国時代以降の城郭などが展開した場所であり、これらに関連する遺構であることは間違いない。

④北墳丘墓周辺（吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区、平成5・7年度調査）

平成5年度は、4年度実施の北墳丘墓の再調査を受けて、墳丘墓の南と北東に位置する斎棺墓を主体とする弥生時代墓地および墳丘墓東に存在する大型土壙の調査を実施した。この区域は昭和63年度の神埼工業団地計画に伴う発掘調査によって表土のみを除去し、斎棺墓の分布状況と時期、大型土壙の存在の確認のみにとどめていた。

墳丘墓南（第182調査区）では、1,886m²の調査区内で、弥生時代の斎棺墓227基、祭祀土壙10数基、掘立柱建物跡3基などを確認した。なお、斎棺墓については墓壙と棺内の埋土を完全に除去したものは少なく、斎棺の口縁部の破片などを取り上げたに過ぎない。斎棺墓群は南北方向に帶状に分布しており、中央部に1.2m前後の遺状の空白地が存在する。弥生時代前中期の金海式期に出現し、中期中頃の須次式期まで存続している。各時期の数の比率は、発掘の際の観察によると、金海式期が15%、城ノ越式期24%、汲田式期39%、須次式期22%となっており、北墳丘墓の埋葬終了時期とほぼ同時に埋葬を終了している。成人用と小児用の比率については成人用約91%、小児用約9%と、小児用の占める割合が極めて小さい。この空間が墓地として利用され始めた金海式期の斎棺墓群は幾つかのグループをなして特に中部から南部にかけて分布しているが、汲田式期になると先の通路状の空白地の両側に沿って斎棺が分布している。須次式期になると、この空白地と角度を違えるものや列から離れるものが多くなる。斎棺内からは数体分の人骨が出土したのみで、副葬品など目立った遺物は出土しなかった。

墳丘墓北東（第184調査区）では、北区（422m²）と南区（751m²）を合わせて、斎棺墓130基、土壙墓1基、箱式石棺墓1基、祭祀土壙1基などを確認した。なお、斎棺墓については墓壙と棺内の埋土を完全には除去しておらず、棺内から遺物を出土した斎棺数基以外は、斎棺口縁部の破片などを取り上げたに過ぎない。北区と南区の北部と南部は、後世の畠開墾による削平がひどく、元来の斎棺墓分布は不明であるが、南区中部では斎棺墓群が約30mの平面円形に分布していた可能性がつよい。このような斎棺墓の円形配置は、工業団地計画に伴う発掘調査でも数箇所で確認されており、墳丘墓に葬られたような特別な身分をもつ集团ではない一般的な身分の集

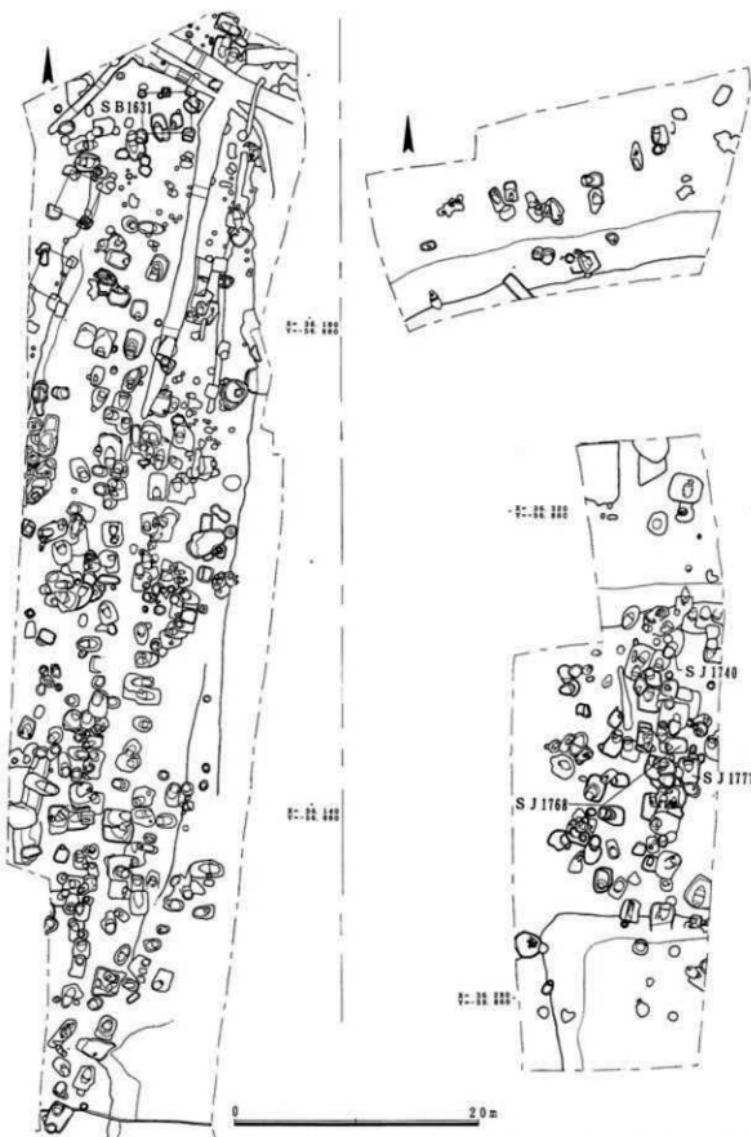


Fig.9 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓南と北東の弥生時代墓地遺構分布図

団の中にも、集団墓地の中で特別に区画された墓域をもつものが存在したことを示している。

北墳丘墓北東の両調査区では、斐棺墓は弥生時代前半期の金海式期から城ノ越式期にかけての時期に出現し、大方中期中頃の須玖式期まで存続している。各時期の数の比率は、発掘の際の観察によると、金海式期・城ノ越式期5%に満たず、波田式期40%、須玖式期25%、中期後半の立岩式期と後期初頭の桜馬場式期がそれぞれ1基(1%未満)となっており、2基を除いて北墳丘墓の埋葬終了時期とほぼ同時期に埋葬を終了している。なお、成人用と小児用の比率は成人用71%、小児用29%である。

この円形墓域のほぼ中央に位置すると考えられる隣合う2基の斐棺墓(S J 1768・S J 1777)の棺内から人骨とともに多数の布片が出土した。S J 1768斐棺墓は中期前半の波田式期の斐棺を用いた成人墓で、下腹に収まつた人骨人骨の胸の位置から腰の位置にかけて多数の破片が出土した。うち腹部から腰付近で縫い合わされた大きな布片を発見した。S J 1777斐棺墓は中期初頭の城ノ越式期の斐棺を用いた成人墓で、傾斜角度がつよいため人骨とともに布片も下腹下部へずれ落ちていた。

この布片は京都工芸織維大学の布目順郎名誉教授の分析によって綿布であることが判明したが、縫い目をもつ布片の発見は重要である。S J 1768斐棺墓の2点はいずれも縫い目を境にして経糸と緯糸の方向が逆(直交)になっており、明らかに2枚の布を縫って繋げたものである。細かく観察すると、緯糸はほつれ易いため先端を三つ折りしてかがり、他方の布の先端付近の経糸と縫合しているようである。身頃と袖の縫合部分である可能性がある。なお、S J 1777斐棺墓も小片ではあるが縫い目のある綿片が出土している。

他の出土品としては、人骨や、磨製石剣の切っ先片と打製石器などがある。中期のS J 1740斐棺墓は棺内に入骨は遺存していないものの、磨製石剣の切っ先片1点と打製石器2点が棺底から出土しており、元来被葬者の体内に刺さっていたものと推定される。同地区のS J 1716斐棺墓内からも打製石器1点が出土した。

墳丘墓東に存在する大型土壙の調査は、遺構が存在する範囲の表土をすべて除去し、さらにトレンチを設けて全体の規模や形態、時期などについて調査した。調査の結果、この土壙の規模は南北約53m、最大東西幅約13mで、深さは2m以上遺存していた。この土壙の東西方向に8本のトレンチを設けて、深さや埋土・遺物の堆積状況を調査した。人為的に埋められた様子ではなく、大量の土器などを含んで自然に堆積したものとみられた。

土器は弥生時代中期中頃以降の祭祀用のものを含み、後期後半の時期のものまでを含んでいる。北墳丘墓造以前は表面を覆っていた黒色(暗褐色)表土の下層に、この土壙の壁で確認される褐色系・黄色系・黄白色系などのローム層が堆積していたものと考えられる。北墳丘墓は前に報告したとおり、黒色(暗褐色)土や褐色系・黄色系・黄白色系などのローム層を積み上げて築造されているが、周辺でこの掘り上げられた土は確認されないので、この土壙掘削の主目的はおそらく墳丘盛土用の土の採掘ではなかったかと考えられる。北墳丘墓の北を巡る外環塙周辺にも、外環塙掘削以前の東西約25m、南北約16mの平面椭円形の大型土壙を確認しているが、この土壙も盛土用の土の採掘跡であった可能性が高い。

平成7年度は、北墳丘墓の北方から西方にかけての確認調査を実施した。北墳丘墓が存在する段丘尾根の北斜面に設けた第206調査区では弥生時代後期初頭の斐棺墓1基と土壙墓1基が、その北方の段丘斜面から裾部に設けた第203・204調査区では弥生時代中期前半の竪穴住居跡15基と古墳時代(6世紀)の竪穴住居跡1基を検出した。また、墳丘墓南西の第211調査区では弥生時代後期の外環塙の出入り口部や、中期後半から後期初頭にかけての斐棺墓4基、古墳時代(6世紀)の竪穴住居跡2基などを、第210調査区では中期後半から後期初頭にかけての斐棺墓2基を検出した。

第211調査区の外環塙跡の調査では、環塙跡の規模が最大幅は5.7mで、深さは1.85m遺存していた。出入り口

と考えられる幅約6.5mの陸橋部を確認した。この陸橋部は、吉野ヶ里地区V区の南内郭と西方の高床倉庫と考えられる掘立柱建物群とを結ぶ外環壕の陸橋部と同様、環壕を断面V字形に掘削した後、底の部分に木製樋管を設置して埋め戻し、通路としたらしいことを、環壕跡埋土下層の土層から判断した。この陸橋を東に渡ると、東進したのち北へ屈曲し墳丘墓の南正面へ通じる底が平坦な道路状の溝へと通じる。

⑤南部外環壕出入口周辺(田手二本黒木地区Ⅱ区第221調査区、平成7年度調査)

昭和63年度の工業団地計画に伴う発掘調査で路線が確認されていた外環の出入り口跡の詳細な構造を知るために、第221調査区を設けて調査を実施した。その結果、弥生時代後期の外環壕2条とその間の掘り残しの出入り口(陸橋)部、弥生時代前期の竪穴住居跡2基と貯蔵穴跡5基、平安時代の井戸跡3基、主に弥生時代のものと考えられる柱穴群や小穴群などが確認された。

外環壕出入り口部は、幅約7.0mの掘り残しの陸橋で、北塹の南端を西側へ、南塹の南端を東側へずらし、さらに環壕の内側の平坦面を環壕側へ突出させた極めて特殊な構造となっていた。調査区内での環壕の規模は幅4m前後で、断面形態はV字形を基本としているが南部にいくに従って底面が平坦に近くなっている。平成7年度にこの調査区の南端から南東約40mと60mの位置に設けた田手二本黒木地区Ⅲ区の第224・225調査区で、この外環壕の南への延長部分を確認したが、断面形は底広く平坦な逆台形となっていることが判明し、段丘階部から低地の平坦部付近の地形変換地点付近で、断面形態に変化が生じていることを確認した。弥生時代前期後半の竪穴住居跡2基(SH268・SH276)はどちらも平面円形で、復元径はそれぞれ4.3mと推定5.4mの規模であるが、双方とも全城調査を実施していない。SH268竪穴住居跡の内部には中央に炉状の穴とその両側に小穴、その周囲を主柱穴が平面円形に巡るが本数は不明である。また、壁に沿って位置にも浅い穴が巡っているが、半円の範囲で7個存在する。SH276竪穴住居跡も周囲の壁に沿って穴をもつ同様な携帯である。

また、平安時代の井戸跡群を確認したことは、吉野ヶ里地区V区の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡群の集中地区内で昭和61年度の調査などで確認された平安時代の井戸跡群とともに、一帯の広範囲に平安時代の居住区が存在していたことを示した。

出入り口跡南北の外環壕の埋土中には後期前半から後半にかけての多数の弥生土器が存在していたが、出入り口部付近では壺形土器の完全に近いものが多数を占めていた。出入り口と深い関係をもって供献された可能性がある。また、これら土器群とともに青銅製鏡が出土した。弥生時代のものとしては珍しい柳葉形に近い形態である。茎の一部が欠損している。現存長2.90cm、現存最大幅1.35cm、厚さ0.48cm、重さ2.0gである。

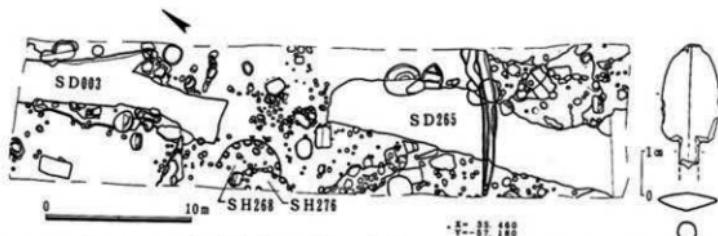


Fig.10 吉野ヶ里遺跡南部の外環壕出入口遺構分布図・銅鏡実測図

2. 北墳丘墓

吉野ケ里丘陵地区V区の北寄りの段丘上に存在するS T1001墳丘墓は、平成元年度と平成4年度の2回調査を実施した。平成元年度は7基の甕棺墓を発掘し、把頭飾付き有柄銅劍をはじめとする細形銅劍5点、青銅製把頭飾1点、ガラス製管玉79点、網布片、被葬者2人の人骨や鐵の破片などが出土した。また、この時の調査で、墳丘は南北40m~45m、東西30m弱の平面隅丸長方形か長方形の四隅を切り落としたような形態で、工法的には幾種類かの土を版築状に盛り上げたことが判明し、高さも本来4.5m以上の大規模なものであったと推測した。

(1)造構

平成4年度は、この墳丘墓の全容解明と将来の整備のための資料を得るために調査を実施した。調査の結果、新たに7基の甕棺墓が発掘され、棺内より3点の銅劍と青銅製把頭飾1点、人骨片が出土した。さらに、墳丘頂部の南北28m、東西18mの範囲は、中世の城郭造営により削り取られているらしいことと、昭和29・30年前後の畠地開墾などによって削平を受けていることが明らかになった。しかし、墳丘の規模は、墳丘盛土が残存している範囲や、墳丘上部の平坦面の埋置された甕棺墓の位置・残存状況から甕棺墓が分布している南北27m、東西15mの残存墳丘上の平面長方形の範囲がほぼ墳丘上部の平坦面と考えられる。また、盛土が存在する範囲が南北37.5m、東西25.5mの平面長方形の部分であるので、元来の墳丘規模はかなり大きかったと考えられる。

墳丘の遺存状態がよかつた大阪府加美遺跡の墳丘法面の傾斜角度などを参考にして、長辺側（南北）の法面を約35°、短辺側（東西）の法面を約30°と仮定してこの北墳丘墓の規模を復元すれば、南北約46m、東西約27mということになる。墳丘の元来の高さについては、S J1005甕棺墓やS J1009甕棺墓のように辛うじて甕棺が遺存する程度まで削平を受けていたので、甕棺墓一般の甕棺が埋置されている深さ2m前後を、盛土が残存している高さ約2.5mに加え、最低約4.5mと推定している。

①甕棺墓の分布

平成元年の調査結果と削平状況などから、墳丘墓内には14基以上の甕棺墓が存在したことになる。甕棺は、汲田式と須玖式（弥生時代中期前半から後半）のものである。甕棺の器体の大半は昭和の開墾によって上半部（上甕）を破壊されたものが多く、内部にまで開墾時の土が入り込んだものが多い。

墳丘墓内ではもっと古い汲田式期のS J1006甕棺墓を取り囲むように順次埋葬が行われているが、基本的には、長方形と考えられる墳丘の平面形の長軸あるいは短軸方向に埋置されている。最古のS J1006甕棺墓と同様、南北方向に埋置された甕棺墓が古く、東西方向に埋置された甕棺墓が新しいといった傾向が窺える。新しい須玖式期の甕棺墓の埋葬の順序にも規制があったらしく、概ね南から逆時計回りで埋葬が行われている。把頭飾付き有柄銅劍を出土したS J1002甕棺墓が、須玖式期のものの中では二番目に新しい形態の甕棺を用いており、その北側に位置するS J1050甕棺墓に用いられた甕棺が最も新しい形態のものである。この甕棺墓の南側に存在する空地が、次に埋葬が行われるべき位置であった可能性も考えられる。

②甕棺墓

墳丘盛土内で確認された14基の甕棺墓の墓域は、すべて上部から掘りこまれていることが確認された。

14基の甕棺墓はいずれも甕と甕をあわせた大型棺であるが、上部の削平のため上甕はほとんど壊され、残りが悪い。時期的には中央部に位置するS J1006甕棺墓が最も古く、中期前半の汲田式期のものと考えられ、

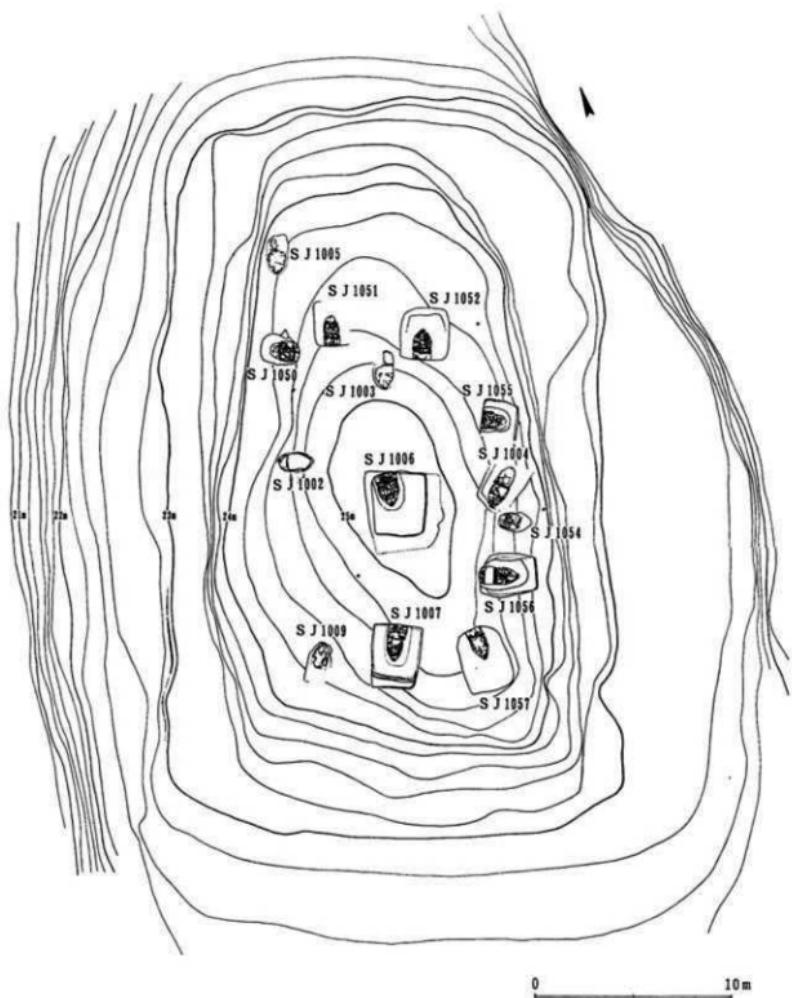


Fig.11 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓甕棺墓分布図

次いでその北側に S J 1050 瓢棺墓が、次いで須恵式期の甕棺墓が周辺に埋置され、最後に S J 1005・1002・1050・1057 瓢棺墓が埋置されたものと考えられる。

これら14基の内8基から副葬品などの遺物を出土した。棺内から副葬品などの遺物が出土しなかった他の6基の甕棺墓は、昭和の開墾によって棺内まで破壊されたものがほとんどであり、これらの甕棺墓が元来銅劍などが副葬されていたか否かは不明である。ただし、S J 1052 瓢棺墓は、比較的遺存状態がよかつたにもかかわらず、青銅器などの出土はなかった。

③各甕棺墓の概要

S J 1002 瓢棺墓

埴丘墓西側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上甕のほとんどが破壊され下甕の一部も破壊と土圧等での崩落を受けている。墓壙は一次墓壙は消失しており $1.80\text{m} \times 0.95\text{m}$ 、深さ 0.68m の平面梢円形に近い二次墓壙のみが残存していた。傾斜角は約 20° 、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して直交する。下甕中央部内面は大量の水銀朱で覆われていた。

下甕のほぼ中央の棺底付近から切っ先を北に向けた細形有柄銅劍1点と、主に下甕上位から組み合わさった状態のガラス製管玉79点が出土した。

S J 1003 瓢棺墓

埴丘墓北側に位置する成人用複式棺である。墓壙は二次墓壙の一部が深さ 0.81m 残存しているのみである。下甕の一部のみに残存している。上甕はほとんどが破壊され、下甕の一部も破壊と土圧等での破壊を受けている。また、接合部には粘土が残存していた。傾斜角 10° 、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して平行である。

S J 1004 瓢棺墓

埴丘墓中央に位置するS J 1006 瓢棺墓の東側に隣接する成人用複式棺である。墓壙は二次墓壙のみが 0.70m 残存しているのみである。上甕は3分の1が破壊され下甕の一部も破壊と土圧等で破壊を受けている。傾斜角 5° 、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して斜めとなっている。

S J 1005 瓢棺墓

埴丘墓北西側に位置する成人用複式棺である。破壊がひどく、 $2.00\text{m} \times 1.18\text{m}$ の二次墓壙が深さ 0.28m 残存していたのみである。上甕の一部と下甕の棺内部に水銀朱が残っている。上甕と下甕の接合部には大量の粘土が用いられたらしく、上甕胴部上部から下甕口縁部にかけて幅広く残っていた。傾斜角 10° 、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して平行である。

細形銅劍1点が下甕の底部寄りの西側の部分から、切っ先を口縁部側（北）に向けた状況で出土した。

S J 1006 瓢棺墓

埴丘墓中央部に位置する成人用複式棺である。墓壙は $4.12\text{m} \times 3.74\text{m}$ 、深さ 1.75m の平面長方形に近い形態で、北西に横穴が掘り込まれている。この横穴には水平に埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。傾斜角、 0° （水平）で、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して平行である。

細形銅劍 1 点が甕棺下甕の中央のやや脇（西）に寄った部分から、切っ先を南西方向に向けて出土した。切っ先からおよそ 5 分の 2 の部分で 2 折している。先端のごく一部と刃部の多）の部分を小さく欠損している。また、上甕と下甕の接合部には大量の粘土が使用されている。棺内からヒトの歯が出土した。

S J 1007甕棺墓

埴丘墓南側に位置する成人用複式棺である。墓壙は $3.37\text{m} \times 2.49\text{m}$ 、深さ 1.68m の平面長方形に近い形態で、北側中央部に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。傾斜角 8° 、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して平行である。

細形銅劍 1 点が甕棺下甕のほぼ中央脇（北西）に寄った部分から、切っ先部を底部方向（北東）に向か、青銅製把頭飾 1 点と共に出土した。切っ先を欠失しており、残存する部分も先端からおよそ 4 分の 1 の部分で 2 折している。剣方部の刃部の片側と、先端付近の刃部の一部をわずかに欠損している。

S J 1009甕棺墓

埴丘墓南西側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上甕部は削平を受けほとんど残っておらず、下甕も 5 分の 4 が破壊を受けており、 $2.13\text{m} \times 1.18\text{m}$ の二次墓壙が深さ 0.19m 残存していたのみである。主軸方向は埴丘の南北主軸に対して平行である。

細形銅劍 1 点が下甕の中央口縁部寄りの部分から切っ先を底部方向（北東）に向けて出土したが、切っ先部先端を欠損している。

S J 1050甕棺墓

埴丘墓西北側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上甕の 5 分の 4 が破壊を受けている。東側中央部に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。接合には大量の粘土が使用されていた。調査時の墓壙は $1.98\text{m} \times 1.56\text{m}$ の平面楕円形に近い形態で、棺の形態と合わせて掘られている。傾斜角 15° 、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して直行する。

S J 1051甕棺墓

埴丘墓西北側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上甕の 2 分の 1 が破壊されている。南側中央部に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。調査時の墓壙は $2.31\text{m} \times 1.71\text{m}$ 、深さ 0.85m の平面長方形に近い形態で東側は破壊を受けている。棺内より、少量の骨片が出土した。傾斜角 20° 、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して平行である。

S J 1052甕棺墓

埴丘墓北東側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上甕の 2 分の 1 が破壊され、下甕の一部も破壊を受けている。調査時の墓壙は $2.68\text{m} \times 2.52\text{m}$ で、深さ 1.38m の平面隅丸正方形に近い形態で、南側中央部に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された甕棺は甕と甕の接合式のものである。接合面には大量的粘土が使用されている。傾斜角 27° 、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して平行である。

棺内からは少量の人骨片が出土した。

S J 1054妻棺墓

埴丘墓東側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上妻がほとんど破壊され下妻の一部も破壊を受けている。墓壙は二次墓壙が一部残存していたのみである。埋置された妻棺は妻と妻の接合式のものである。傾斜角15°、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して直交する。

下妻中央部のやや北寄りの位置から、切っ先を口縁（東）側に向けた細形銅劍1点が出土した。

S J 1055妻棺墓

埴丘墓北東側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は上妻の4分の3が破壊され、下妻の2分の1も破壊を受けている。墓壙は1.92m×1.88mの平面隅丸正方形に近い形態で、西側に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された妻棺は妻と妻の接合式のものである。傾斜角38°、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して直交する。

S J 1056妻棺墓

埴丘墓南東側に位置する成人用複式棺である。墓壙と上部の削平は東側が一部受け上妻の3分の2、下妻の一部が土圧等で崩壊しているが、上下妻ともほとんど完全に復元できる。墓壙は2.96m×2.22m、深さ1.18mの平面隅円形に近い形態で、西側に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された妻棺は妻と妻の接合式のものである。接合面には大量の粘土が使用されていた。傾斜角5°、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して直交する。

下妻ほぼ中央部から切っ先を口縁（東南）に向けた細形銅劍1点が出土した。さらに、棺内より少量の人骨片が出土した。

S J 1057妻棺墓

埴丘墓南東側に位置する成人用複式棺である。墓壙の削平が著しい影響は少ないようであるが、土圧等で上下妻とも崩壊しているが、上下妻ともほとんど完形に復元できる。墓壙は3.33m×2.49mの平面隅円形に近い形態で、西側に斜め下方に横穴を掘り込み棺を埋置している。埋置された妻棺は妻と妻の接合式のものである。接合面には大量の粘土が使用されていた。傾斜角6°、主軸方向は埴丘の南北主軸に対して平行である。

下妻中央部から切っ先を口縁（南）に向けた細形銅劍1点が、上妻中央西脇から青銅製把頭飾1点が出土した。細形銅劍と把頭飾が離れて（71cm間隔）出土したが、その原因は不明である。

また、S J 1006妻棺墓からは人の骨が、S J 1007妻棺墓からは頭骨片と上肢骨片が出土した。長崎大学医学部の松下孝幸助教授（現 山口県豊北町立土井ヶ浜ミュージアム館長）の現地における観察によると、いずれも壮年の男性であるらしい。他にも、S J 1050・1051・1052・1057妻棺墓など4基の妻棺墓棺内から人骨片が出土した。

埴丘墓から出土した14基の妻棺墓は、すべての妻棺に黒色塗料が塗布されており、7基の妻棺墓の妻棺の内部に水銀朱と考えられる赤色顔料が確認された。また、これらの妻棺墓に使用された妻棺は法量が大きいものが多いが、特にS J 1050妻棺墓の下妻は、器高139cm、口外径101.8cmと超特大であり、他にも器高120.0cm、口外径80cmを超えるものが11基あり、他の法量を復元できる妻棺も1m以上のものばかりである。合わせて妻棺をなす上下の妻棺の器種は、蓋として用いるものに鉢形土器を用いる例が中期前半から中頃以降増加するが、これら埴

丘墓の斐棺群に限ってすべてほぼ同形の斐形土器を用いている。これらのことから、墳丘墓の被葬者のために特別読みの斐棺が製作されたものと考えられる。

(2) 遺物

S T1001墳丘墓の盛土内に埋置された斐棺墓はこれまで14基であり、いずれも2個の大型斐形土器を用いた成人用のものである。器体の形態は砲弾形または裁頭卵形である。個体数としては28個である。

なお、前報告（佐賀県教育委員会「吉野ケ里（神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書）」1992年3月）では平成元年に調査を実施した7基の斐棺墓（S J 1002・1003・1004・1005・1006・1007・1009斐棺墓）の12個の斐棺（S J 1005・1009斐棺の上斐を除く）について、現地での計測結果や取り上げた破片をもとに報告していたが、平成4年度の再調査ですべての取り上げ、可能なものについては復元を施した（ほぼ全体が復元できた固体数は10基の15個）。復元品の実測や復元できなかった破片の計測・観察に基づきすべてのものについて概要を報告する。なお、全報告では、S J 1002斐棺墓の斐棺の記述に際し、上斐と下斐を逆にしていたので今回訂正する。

① 斐棺

S J 1002斐棺墓

上斐 口縁部から胴部にかけての49.1cmが残存。口縁部は外に低く傾斜する断面T字形口縁をなし、内側を打ち欠いている。口縁部下に断面コ字形突帯が1条巡る。復元口外径78.6cm、復元口内径61.2cmである。須次式期（新段階）。

下斐 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は断面T字形で、外に低く傾斜する。口縁下に断面三角形突帯が1条、胴部には断面三角形突帯が2条巡る。器高119.6cm、最大胴径84.4cm、口外径82.6cm、口内径65.4cm、底径16.0cmである。須次式期（新段階）。

S J 1003斐棺墓

上斐 口縁部から胴部にかけての70.3cmが残存。口縁部は厚く、内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりみられない。胴部はやや丸みをもつ。口縁下に断面三角突帯が1条、胴部には断面三角突帯が2条巡る。復元口外径83.0cm、復元口内径66.5cmである。須次式期。

下斐 口縁部から胴部にかけての一部を欠損していたが、ほとんど完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に低く傾斜する。胴部はやや丸みをもつ。口縁下に断面M字形突帯が1条、胴部には断面三角形突帯が2条巡る。器高115.3cm、最大胴径88.4cm、口外径83.2cm、口内径66.0cm、底径14.6cmである。須次式期。

S J 1004斐棺墓

上斐 口縁部から胴部にかけての63.0cmが残存。口縁部は厚く、内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりみられない。胴部はやや丸みをもつ。口縁下に突帯はない。胴部に断面三角形突帯が2条巡る。復元口外径72.0cm、復元口内径55.0cmである。須次式期（古段階）。

下斐 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部も内外に発達し断面T字形をな

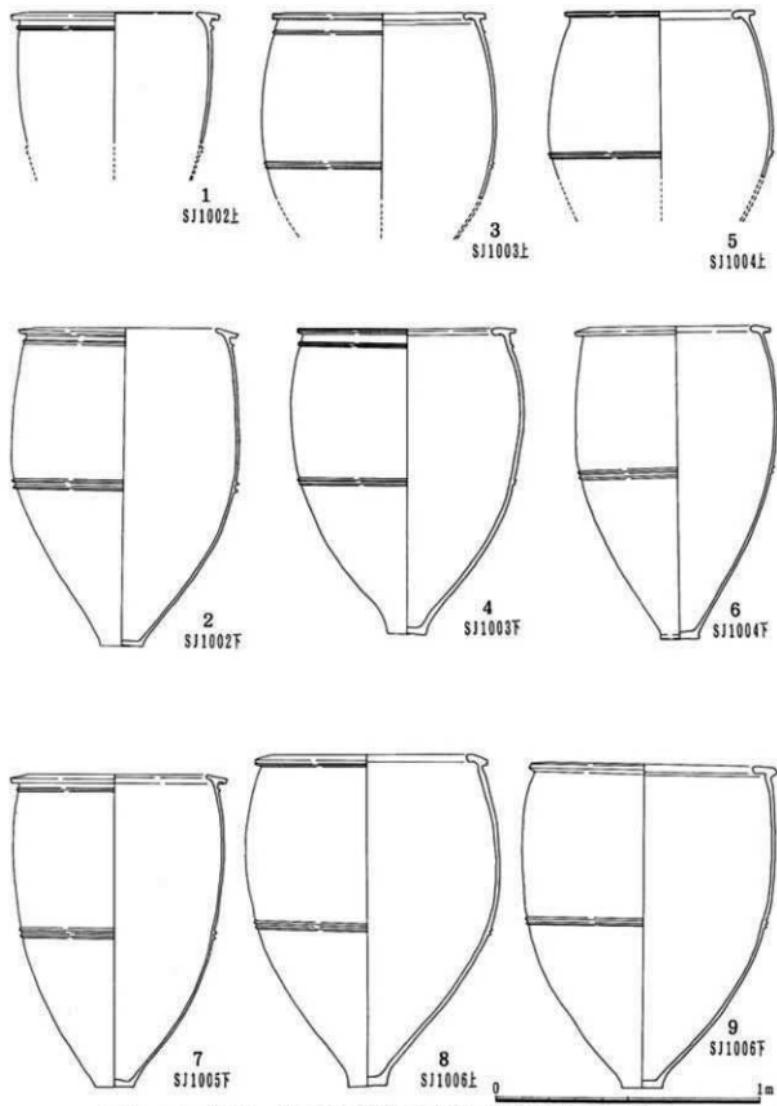


Fig.12 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓出土甕棺実測図(1)

し、外に低く傾斜する。口縁部下はややすばり突帯はない。胴部には断面三角形突帯が2条巡る。器高117.9cm、最大胴径77.9cm、口外径74.5cm、口内径59.0cm、底径14.5cmである。須次式期（古段階）。

S J 1005壺棺墓

下壺 口縁部から胴部にかけての一部を欠損していたが、全体規模が分かる程度には復元することができた。口縁部は外側にに発達した断面T字形で、下方に垂れ下がった形状をなす。口縁下には突帯なく、胴部に断面三角形突帯が2条巡る。器高117.8cm、復元口外径81.8cm、復元口内径66.0cm、底径14.4cmである。新段階の須次式期。

S J 1006壺棺墓

上壺 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりない。胴部は径が大きく丸味をもつ。口縁下には突帯ではなく、胴部に断面三角形突帯が2条巡る。器高125.2cm、最大胴径は95.6cm、口外径87.4cm、口内径71.6cm、最大胴径95.6cm、底径14.6cmである。汲出式期。

下壺 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりない。口縁上面は上壺が傾斜しているのに対し水平となっている。胴部は径が大きく丸味をもつ。口縁下には突帯ではなく、胴部に断面三角形突帯が2条巡る。器高121.6cm、最大胴径は98.3cm、口外径94.5cm、口内径75.4cm、底径15.5cmである。汲出式期。

S J 1007壺棺墓

上壺 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。口縁下には突帯なく、胴部に断面三角形突帯が2条巡る。器高118.4cm、最大胴径78.8cm、口外径75.4cm、口内径59.0cm、底径13.8cmである。須次式期（古段階）。

下壺 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部も内外に発達した断面T字形をなし、外に低く傾斜する。胴部は丸味をもつ。口縁下に断面M字形突帯が1条、胴部には断面三角形突帯が2条巡る。器高120.0cm、最大胴径93.9cm、口外径86.0cm、口内径67.6cm、底径15.4cmである。須次式期（古段階）。

S J 1009壺棺墓

上壺 発掘の段階で、ほとんどのが遺存しておらず、幸うじて口縁部の一部が下壺の口縁部に付着して出土した。断面T字形をなす成人用壺棺の口縁部で、おそらく下壺と同規模の大型壺棺だったものと推定される。

下壺 口縁部から胴部にかけての69.2cmが残存。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に低く傾斜する。口縁下には断面コ字形突帯、胴部には断面コ字形突帯が2条巡る。復元口外径77.6cm、復元口内径58.0cmである。須次式期。

S J 1050壺棺墓

上壺 口縁部から胴部にかけての44.8cmが残存。口縁部は断面T字形をなし、外に低く傾斜する。口縁下に断面コ字形の突帯が2条巡る。復元口外径93.7cm、復元口内径73.4cmである。残存した部分から判断すると、下壺と同様非常に大型の壺棺と考えられる。須次式期（新段階）。

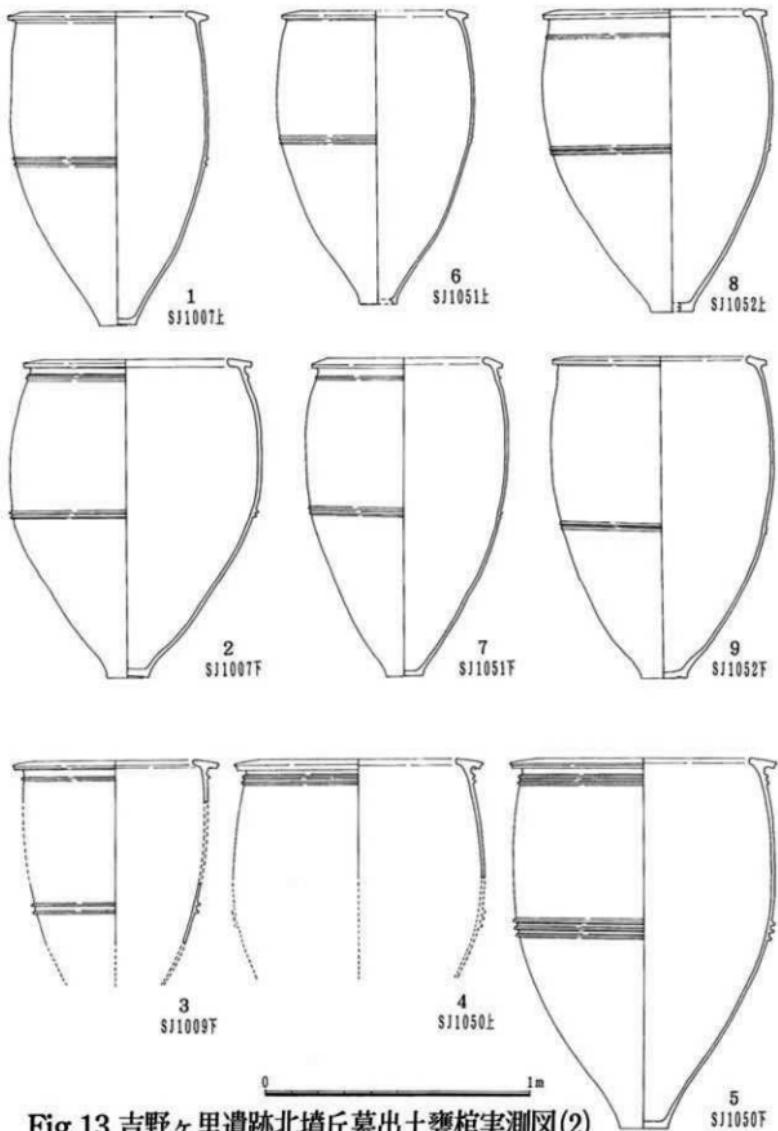


Fig.13 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓出土甕棺実測図(2)

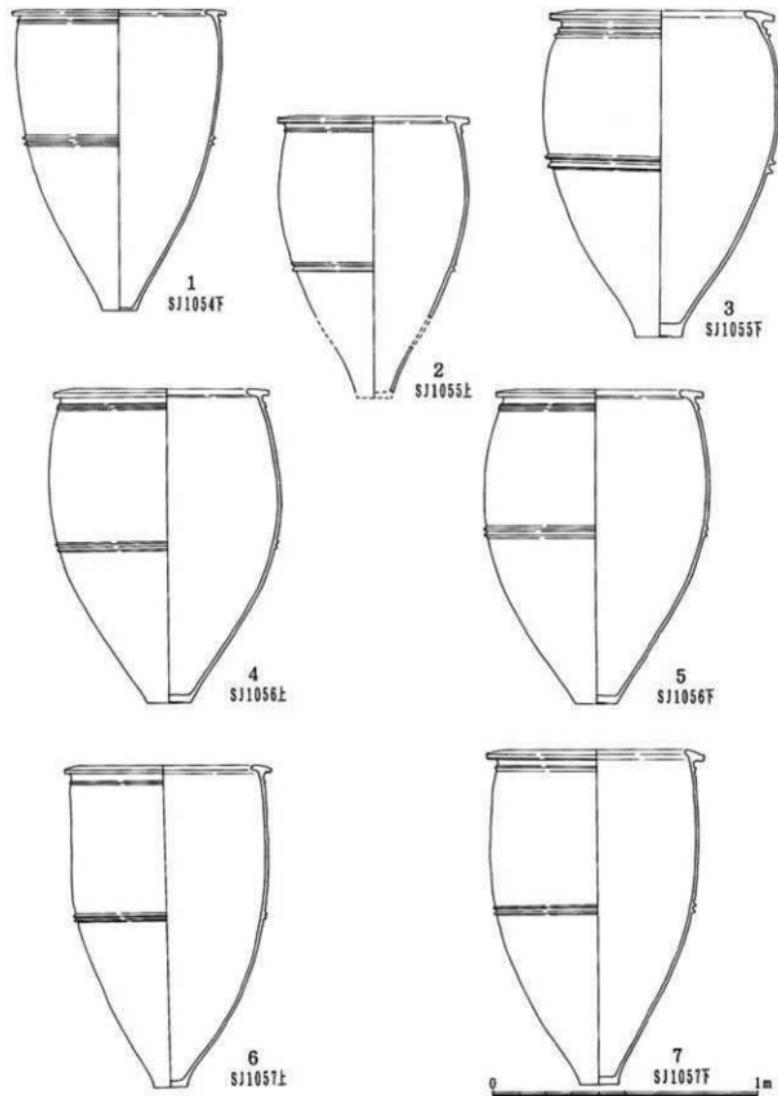


Fig.14 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓出土甕棺実測図(3)

下甕 口縁部から胴部の上部まで的一部分を欠くが、ほぼ完全に復元することができた。口縁部は断面T字形をなし、外に少し傾斜する。胴部はやや丸味をもつ。口縁下に断面コ字形の突帯が2条巡る。胴部中位に断面コ字形の突帯が3条巡る。器高139.0cm、最大胴径99.3cm、復元口外径101.8cm、底径18.5cmである。北墳丘墓内の甕棺では最も器高の高いものであり、容積も最大のものと考えられる。須次式期（新段階）。

S J 1051甕棺墓

上甕 破片が不足し、全体の復元是不可能であった。口縁部は内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりみられず、外に少し傾斜する。口縁部下には突帯ではなく胴部中央部に断面三角突帯が2条巡る。復元器高110.6cm、復元口外径70.8cm、復元口内径54.8cm、底径14.0cmである。須次式期（古段階）。

下甕 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内側に大きく張り出し、外側への発達はあまりなく外に少し傾斜する。口縁部下には1条の断面三角突帯が1条、胴部中央部に断面三角突帯が2条巡る。器高120.2cm、最大胴径77.4cm、口外径72.4cm、口内径57.6cm、底径13.6cmである。須次式期（古段階）。

S J 1052甕棺墓

上甕 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし。胴部はやや丸みをもつ。口縁部下には断面三角形突帯が1条、胴部中央部に断面三角形突帯が2条巡る。復元器高114.3cm、最大胴径87.6cm、口外径86.7cm、底径15.0cmである。須次式期（古段階）。

下甕 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。胴部はやや丸みをもつ。口縁部下には突帯ではなく、胴部中位下部に断面三角形突帯が2条巡る。復元器高121.3cm、最大胴径86.6cm、口外径81.8cm、口内径66.4cm、底径17.6cmである。須次式期（古段階）。

S J 1054甕棺墓

下甕 口縁部から胴部にかけての一部を欠損していたが、全体規模が分かる程度には復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。口縁部下には断面三角形突帯が1条、胴部中央部に先端が丸い大きな断面三角形突帯が2条巡る。器高113.7cm、復元口外径81.5cm、復元口内径66.0cm、底径13.4cmである。須次式期。

S J 1055甕棺墓

上甕 口縁部から胴部にかけての大半の部分を欠損していたが、全体規模が分かる程度には復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。口縁部下には断面三角形突帯が1条、胴部に先端が丸い大きな断面三角形突帯が2条巡る。復元器高106.8cm、復元口外径72.4cm、復元口内径55.0cmである。須次式期。

下甕 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。胴部はやや丸みをもつ。口縁部下には1条の断面三角突帯が2条、胴部中央部に断面コ字形突帯が2条巡る。器高123.3cm、最大胴径90.5cm、口外径84.4cm、口内径62.0cm、底径17.8cmである。須

玖式期。

S J 1056壺棺墓

上蓋 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。胴部はやや丸みをもつ。口縁部下には断面M字形突帯が1条、胴部中位下部に断面三角突帯が2条巡る。器高 117.4cm、最大胴径88.0cm、口外径86.0cm、口内径66.0cm、底径16.5cmである。須玖式期。

下蓋 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。胴部はやや丸みをもつ。口縁部下には1条の断面M字形突帯が1条、胴部中央部に断面三角形突帯が2条巡る。器高 126.2cm、最大胴径89.8cm、口外径78.0cm、口内径63.6cm、底径15.1cmである。須玖式期。

S J 1057壺棺墓

上蓋 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は内外に発達した断面T字形をなし、外に少し傾斜する。口縁部下には断面三角形突帯が1条、胴部中位下部に断面三角突帯が2条巡る。器高 121.6cm、最大胴径74.4cm、口外径78.4cm、口内径63.2cm、底径13.0cmである。須玖式期。

下蓋 ほとんどの部分が残存しており、完全に復元することができた。口縁部は厚みをもち、特に外側に発達した断面T字形をなし、外に傾斜する。口縁部下には1条の断面三角形突帯が1条、胴部中央部に断面三角形突帯が2条巡る。器高 126.4cm、最大胴径78.5cm、口外径82.2cm、口内径66.8cm、底径14.6cmである。須玖式期。

②銅劍

細形銅劍5（S T 1001埴丘墓 S J 1054壺棺墓）

切っ先部刃部のごく一部と、刃部の一部が欠損しているが、その部分以外はほとんど完形を保っている。刃部の一部には錯化のために黄色を帯びた薄い緑色となっており、他の部分は暗緑色となっている。刃部の研ぎ出しあは切っ先から剣方下端まで施されている。全体的には、剣方部から切っ先にかけてやや先細りとなっている。長さ29.1cm、剣方下端部3.65cm（最大幅）、剣方先端部3.2cm、茎の厚さ1.2cmである。重量は264g。

細形銅劍6（S T 1001埴丘墓 S J 1056壺棺墓）

切っ先部をわずかに欠失し、刃部周縁にごくわずかな欠損があるが、ほとんど完形を保っている。剣身下端約3分の1が錯化のためやや黄色を帯びたごく薄い緑色となっており、他の部分は青みがかった緑色となっている。刃部の研ぎ出しあは切っ先から剣方下端の部分まで施されている。また、剣身中央やや先端部に布片の痕跡と剣方から茎の間に朱が一部認められる。残存長29.9cm、剣方下端部（最大幅）3.9cm、剣方先端部3.2cm、茎の厚さ1.1cmである。重量は242gである。

中細形銅劍（S T 1001埴丘墓 S J 1057壺棺墓）

切っ先の一部が破損しているが、その他の部分に関しては欠損はごく一部である。全体に暗緑色の錯が認められる。また両面の一部に朱の痕跡が、片面には剣方から剣と茎の部分にかけて布片の痕跡が認められる。刃部の研

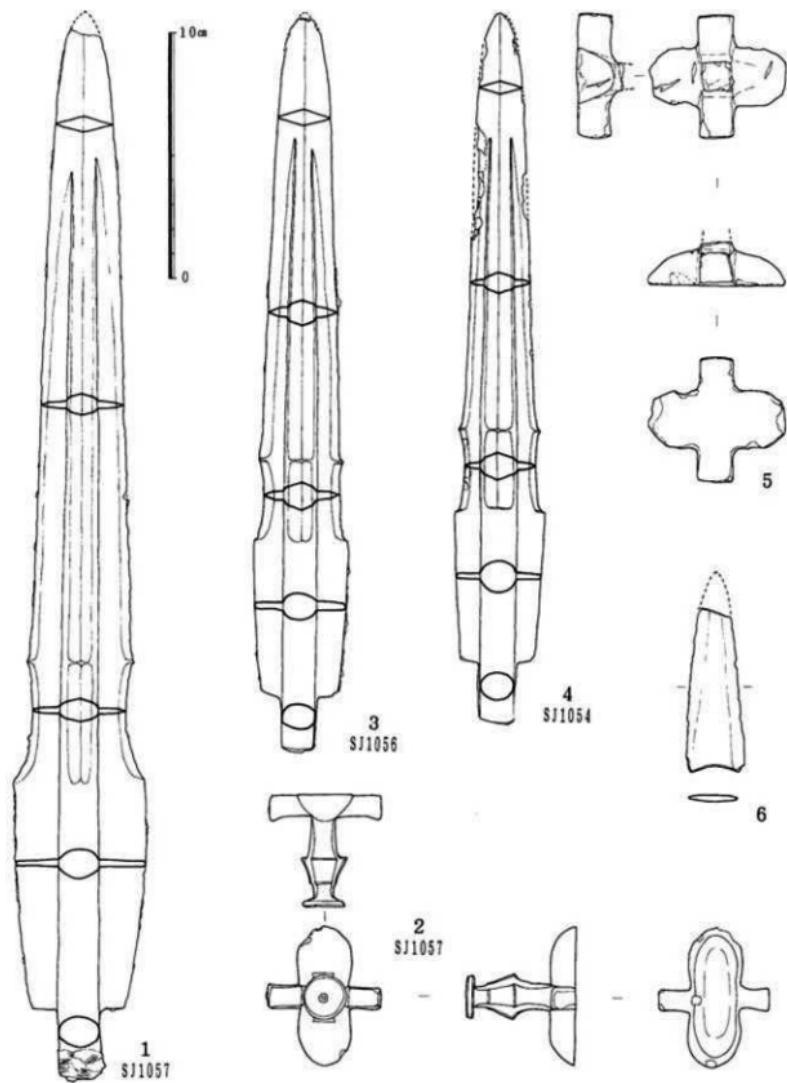


Fig.15 吉野ヶ里遺跡北墳丘墓出土遺物実測図

ぎ出しは切っ先から刃方下端まで施されている。残存長43.0cm、刃方先端幅4.3cm、刃方下端部で5.4cm（最大幅）、関部で4.7cm、茎の厚さ1.3cmである。重量は460gである。

③他の遺物

青銅製把頭飾

十字形のもので、中彫れの方柱には四方に切り込みがあり、その先端には円盤がつく。ごく一部に欠損があるのみである。S J 1007号甕棺墓出土の把頭飾に比べ大型であるが形態的に酷似する。やや明るい黄褐色味がつよい緑色となっている。長さ4.35cm、方柱部の径1.85cm、十字部分の長さ5.7cm×4.7cmである。重量は85.1gである。

磨製石鎌・石製把頭飾

昭和の開墾によって削り取られた埴丘盛土の堆積層内から、弥生時代中期の甕棺片や前期から中期前葉の生活用土器に混じって、磨製石鎌や石製把頭飾などが出土している。磨製石鎌は細形銅劍を副葬していたS J 1005甕棺墓の西側で多数の甕棺片とともに出土したので、この甕棺墓の副葬品あるいは遺体に残存していたものと考えられるが、把頭飾は、周囲あるいは埴丘の下に中期初頭から前葉にかけての竪穴式住居跡も存在するため、必ずしも埴墓の副葬品とは断定できない。

吉野ヶ里丘陵地区V区のS T 1001埴丘墓の調査の結果、埴丘の規模、盛り方の解明や新たに発掘された7基の甕棺墓を含む14基の甕棺墓の調査により甕棺副葬品について新たな問題も提起された。

埴丘の規模は、盛土が存在する範囲が南北27m、東西25.5mの平面長方形の部分で確認された。しかし、中世および昭和の削平から考えると、それ以上の規模であったことは確かである。そこで、埴丘墓の周辺の構造の状況から考えると埴丘の西から北にかけて外堀が巡っており、東側には弥生時代中期から後期にかけての祭祀専用土器を含む大量の土器を出土した大型の土壙があり、さらに南側には埴丘墓前面に至る墓道と考えられる溝状構が存在する。この範囲で考えると埴丘の最大規模は、南北60m、東西45m程と考えられる。

埴丘の盛り方は、断面観察によると全体を断面蒲鉾状の盛土で周囲を囲み、その内部に小山を築いて、水平に埋め、さらに小山を築いて水平に盛っているようである。これまでに、埴丘内から発掘した甕棺はすべて遺存している埴丘の上から墓壙が掘り込まれており、また位置的にも個々の盛土の小山と個々の甕棺は無関係に存在しているということなどから、埴丘が完成した後に埋葬がおこなわれたものと考えられる。盛土に用いられた土は、当時の表土らしい黒色系の土、あるいは褐色・白色・灰色・黄色などのローム土である。それらの土は、埴丘墓東側にある大型の土壙、当時深さ3m以上と考えられ、規模も南北50m、東西30m弱あるのでかなりの土量がここから採取することができると考えられる。また、埴丘墓の北を巡る外環塹周辺にも、外環塹削削以前の東西約25m、南北約16mの平面橢円形の大型土壙を確認しているが、この土壙も盛土用の土の採掘跡であった可能性が高い。当時の表土から下層の各種ローム土が、埴丘盛土の種類と対応していることから十分可能性がある。

埴丘墓の甕棺については、甕と甕を合わせた大型棺であり、配置を見ると、甕棺の方向は大方、平面長方形の埴丘の主軸方向（南北）と平行なものと、直交するものとに分かれている。一般墓地においても、汲田式期・須次式期の甕棺墓の埋葬方向は、基本的には地形の等高線と平行の甕棺墓は古く、直交するものが新しいという傾向があるが、この埴丘墓においても同様である。

埋置された斐棺の時期は、その形態により、汲田式期、古段階の須次式期、須次式期、新段階の須次式期と大きく4つに分けることができる。汲田式期の斐棺は、中心部に位置するS J 1006斐棺墓が最も古く、最初に埋置される。須次式期の古段階の斐棺はS J 1006斐棺墓の北側にS J 1052斐棺墓が埋置される。須次式期の斐棺は9基あるが、主軸方向（南北方向）に埋置されるのは、S J 1006斐棺墓の北側のS J 1003・1051斐棺墓、南側にS J 1009・1007斐棺墓が埋葬された。墳丘墓の北側と南側に埋置される。

主軸方向に直交（東西）して埋置されるのは、S J 1006号斐棺墓東側のS J 1056・1054・S J 1004・S J 1055斐棺墓である。須次式期の新段階斐棺は、墳丘墓南東部と北西部にS J 1002・1057・1005・1050斐棺墓などが埋置される。なお墳丘墓内で最後に埋置された斐棺はS J 1050斐棺墓とみられる。

墳丘墓のすべての斐棺は、内外面には黒色の顔料が付着しているが、これは分析の結果、炭素と鑑定された。吉野ヶ里遺跡では、この黒塗りの斐棺は、副葬品をもつ斐棺墓など特殊なものを除いて一般の墓地からは希にしか発見されない。内部には水銀朱が残っており、その量は点として残っていたり、面として大量に残っていたり様々であった。

これらの斐棺墓に伴って銅劍が8点出土している。以前この墳丘墓付近から細形銅劍1点が発見されていて計9本銅劍が出土したことになる。調査で出土した8点の内7点が細形銅劍で、形態や法量は様々であるが、そのうち1本は、S J 1002斐棺墓から出土したのは把頭飾付き有柄銅劍である。S J 1057斐棺墓から出土した銅劍は中細形銅劍で、他の細形銅劍を出土したと同じ須次式期の斐棺である。これにも、大型の把頭飾が付いている。佐賀県鳥栖市の袖比本村遺跡で、斐棺墓群からさらに古い汲田式期の斐棺から細形銅劍3点と中細形銅劍が4点が出土しており、細形から中細形へ単純に形態が変化していくのではなく、かなり早い段階で2つの形態に分化したことが窺えられる。なお、出土した銅劍のうち、S J 1007斐棺墓の細形銅劍とS J 1057斐棺墓の中細形銅劍の切っ先は欠損していた。

また、墳丘を破壊した土の中から磨製石錐と石製把頭飾がそれぞれ1点出土した。磨製石錐は墳丘北西部に位置するS J 1005斐棺墓のすぐ脇で、S J 1005斐棺墓の破片とともに出土したもので、もともとこの斐棺内にあった可能性がある。ただ副葬品であったか、射込まれたのかは不明である。

墳丘墓の時期は、墳丘に設けたトレーニングの墳丘中央部に平面円形の豊穴住居の壁が検出された。おそらく直径10mを越える非常に大型の住居跡が墳丘墓の下に存在する。その、南一帯にも2・3基の平面円形の豊穴住居が検出されている。これらは、弥生時代前期末から中期初頭のもので、それらを一挙に埋め込んで墳丘が造られている。この豊穴住居は自然に埋没したのではなく單一の土層で一挙に埋め、その上に盛土を行っていたことから墳丘の築造と、この区域の豊穴住居に住んでいた人々との関係が深く感じられる。

墳丘の盛土からは中期前半までの土器片しか出土せず、出土した斐棺の時期からみて茶道時期は中期前半と考えられる。墳丘墓への埋葬が終わる時期については、最も新しい斐棺を用いているのがS J 1050斐棺墓で、中期中頃の内でもっとも新しい形態を備えている。その後の時期の斐棺片は、墳丘墓内からも墳丘を壊した土からも出土していない。

墳丘墓には、14名の死者が葬られていたことになる。彼らの多くは、身分を示すと考えられる銅劍や管玉をもっており、弥生時代中期の吉野ヶ里集落の歴代の首長と考えられる。しかし、この墳丘墓は、現在確認された斐棺の時期幅からみて、せいぜい100年に満たない期間しか営まれなかつたものと考えられる。このことは、首長としての身分をもつ期間がかなり短かったことを示しているのかも知れない。

Tab. 2 北墳丘墓内斎棺墓一覧表

斎棺番号	時 期	墳丘 主 軸 方 向 と 斎棺主軸(傾斜角度)	出 上 遺 物	備 考
1002	中期中頃(新)	直交(20°)	把頭飾付き有柄細形銅劍1・ガラス製管玉79・布(絹・大麻)片(銅劍に付着)	黒塗り、朱あり
1003	中期中頃	平行(10°)	石器1[棺内埋土中、この斎棺に伴うかどうか不明]	黒塗り
1004	中期中頃(古)	斜め(5°)		黒塗り、朱あり
1005	中期中頃(新)	平行(10°)	細形銅劍1	黒塗り、朱あり
1006	中期前半	平行(0°)	細形銅劍1・箋	黒塗り、朱あり
1007	中期中頃(古)	平行(8°)	細形銅劍1・青銅製把頭飾1・人骨片	黒塗り
1009	中期中頃	平行(3°)	細形銅劍1	黒塗り、朱あり
1050	中期中頃(新)	直交(15°)	人骨片	黒塗り
1051	中期中頃(古)	平行(20°)	人骨片	黒塗り
1052	中期中頃(古)	平行(27°)	人骨片	黒塗り
1054	中期中頃	直交(15°)	細形銅劍1	黒塗り、朱あり
1055	中期中頃	直交(38°)		黒塗り
1056	中期中頃	直交(5°)	細形銅劍1	黒塗り
1057	中期中頃(新)	平行(6°)	中細形銅劍1・青銅製把頭飾1・人骨片(毛髪?)	黒塗り

3. 北内郭跡

平成4年度及び5年度に吉野ヶ里丘陵地区VI区(178・181調査区)として調査を行ったところ、弥生時代後期の2重の環濠で囲まれた区画跡を検出したため、以前より知られていた環濠区画跡を「南内郭跡」と呼び、新たに発見した区画跡を「北内郭」と呼ぶこととした。なお、この調査区の西部には斎棺墓を主体とする墳墓跡群も存在するが、ここでは環濠内及び周辺の集落跡についてのみ報告する。

北内郭跡は吉野ヶ里段丘の南先端から北約800m、標高約22m～23mの段丘上に存在する。この場所は、段丘東側裾部には田手川が南流し、南側には田手川に開く谷が存在する。さらに、西側から北側にかけて細く谷があり、一見すると独立段丘状をなす。また、約120m北方には埴丘墓が存在しており、現況では最も高所となっているが埴丘墓の基底が23mであることと北内郭跡が削平されている事を考え合わせると、少なくとも弥生時代においては周辺地形で最も高所に位置していたと考えられる。なお、南内郭跡は南西約150mに位置する。

これまでの調査結果より、北接する地区(吉野ヶ里丘陵地区VI区182調査区)には前期末から中期中頃の斎棺墓群(約250基)、西接する地区(吉野ヶ里丘陵地区II区)には中期前半から後期前半の斎棺墓を主体とする墓地群(約260基)が存在する。



Fig.16 吉野ヶ里遺跡北内郭跡遺構分布図

発掘調査は神埼工業団地造成時に文化財緑地用地として除外されていた部分約8,950m²について実施し、弥生時代から中世にかけての集落跡や墓地跡を検出している。弥生時代のものでは竪穴住居跡、掘立柱建物跡、環濠跡及び溝跡、土壙、柵跡等を検出している。古墳時代のものでは竪穴住居跡3基以上、土壙、小規模な古墳と考えられる石室の痕跡や周溝、平安時代では木棺墓10基以上、中世では塙跡等を検出し、平安時代から中世の土壙墓・木棺墓から鹿角装刀子や青磁碗などを発掘した。

しかし、いずれもみかん園の造成を中心とする開墾や採土のために遺構の残存状況は悪い。さらに、この区域が平成2年度及び3年度に史跡及び特別史跡に指定され恒久的に保存されることが決定したため、調査においても遺構の完全発掘を行わず部分的な試掘により遺構を把握することとした。そのため、詳細な点において不明な部分が多くある。

以下、弥生時代の主要な遺構と遺物について記すが、遺構では集落の主要な構成要素である竪穴住居跡や掘立柱建物跡、環濠・塙跡などについて、遺物では弥生土器と鉄器・青銅器について概要を記す。

(1) 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡75基、掘立柱建物跡25基以上、環濠・塙跡4条、柵列、土壙等を検出した。なお、墓地関連の遺構としては甕棺墓34基、土壙墓12基、箱式石棺墓2基、祭祀土壙1基などを検出し、中期後半のS J 1204甕棺墓の合せ口部の粘土目張り中から鉄剣を発見した。

竪穴住居跡については、調査区全域で確認されており、希薄な時期があるものの前期から後期終末までのものがほぼ継続して存在する。これらは円形基調のものと方形基調のものに大別でき、前期から中期前半では両者が混在し、それ以後は後者のみになる。また、その配置関係より後期初頭までは地形的制約が優先し、後期中頃、少なくとも後期後半には人為的制約が優先し、後期終末以後はまた地理的制約が優先しているものと考えられる。掘立柱建物跡については塙跡に関連した棟方向を示したり、突出部内に伴うなど、極めて塙との関連が深い。現在、詳細な整理がなされておらず時期等に付いては述べられないが、このことより後期後半～終末期にかけてのものと推定される。また、その規模は、1間×1間、1間×2間のものが大半を占めるが、環濠内部には3間×3間の大型のものも存在する。

塙跡については後期中頃のものを1条検出している。断面は逆台形を成し、突出部を中心に約50m区間を検出したが、両端は削平されており、塙跡の走行は不明である。突出部の形状より南側が集落内部と考えられるが、同時期の遺構が希薄であるため決め手には至らない。また、後期後半では2重（外塙を入れると3重となる）の塙跡を検出した。内側を巡る塙跡（以下内塙跡とする）は南西部を頂点とするA字形をなし北東部及び南東部に半円形の突出部、北東部に方形の突出部を有する。また外側を巡る塙跡（以下外塙跡とする）は内塙と一定の間隔をもって巡り半円形の突出部は有しないが、北東部に同様の方形突出部を有している。この中塙跡は改修により、元東西に向かって伸びていたものを内塙に沿わせたり、東側にゆるやかな半円形突出部を増設している。

柵列については、まず、入り口部分で検出している。中塙及び内塙の切れ間をつなぐ一列と鍵形に曲がる一列を確認している。これらの2本に挟まれた部分が通路となる。また、2列間の最狭部は約1.1mとなっており、目隠し及び容易に進入できないようにするための施設と考えられる。ほかにも柵列と考えられる遺構は存在しているが、まだ十分な検討ができていない。

土壙については大半のものが中期前半の貯蔵庫と考えられる。形態は方形のものが中心であり、調査区北半に点在する。本調査区でも中期前半と考えられる竪穴住居跡を確認しており、これらに伴うものと考えられる。

①豎穴住居跡

本調査区では前期から古墳時代初頭の豎穴住居跡75基を検出しているが、上記のとおり完掘していないため、規模や時期等に不明な点が数多く存在する。また、調査した住居跡の一部についても、後世の削平がひどく、不明な点が多い。これらのうち出土遺物より時期の特定が可能なものを中心に述べたい。

前期のものと考えられるものはS H1164豎穴住居跡である。平面形態は方形であり、屋内中央部にか状ビットが存在する。

中期前半代のものは、平面形態が円形、楕円形と隅丸長方形のものが14基存在している。円形のものは径4.38m～6.20mであり、柱穴は中央部に2個と周辺に数個巡ると考えられる。このうちS H1178豎穴住居跡内には作業台と考えられる石が遺存していた。また、S H1179豎穴住居跡は小穴群より豎穴住居跡と考えられるものであり、その規模は径8m以上となる。S H1157豎穴住居跡は平面形態は楕円形であり、柱穴は2個で中央にか状ビットをもつ。さらに南半分では小溝が壁際に巡る。一方、隅丸長方形のものは長辺4.46m～6.50m、短辺3.14m～4.50mである。S H1168豎穴住居跡には壁際に小溝が巡る。これら中期前半の建物群の配置において明確な規則性は認められないが、調査区北側や西側のほぼ同時期の斐棺墓群とは一定の間隔をもっている。

中期後半のものは2基検出している。いずれも遺存状況が悪く詳細は不明である。

後期前半のものは14基を検出している。その平面形態は長方形であり、長辺は2.92m～6.04m、短辺3.54m～5.54mで2本柱と考えられる。内部施設としては一部に壁際の小溝跡が認められる程度である。また、その配置においては調査区中央南北に存在している。ここで造構の残存状況より当時の地形復元を試みると、豎穴住居は尾根筋に沿って、その東側を利用していると考えられ、尾根を境に斐棺墓群には入り込んでおらず、居住域と墓域の区別が明確に認められる。

後期中頃のものは5基を検出している。平面形態は長方形と考えられる。このうちS H1115・S H1107・S H1272豎穴住居跡は切り合うか、極めて近接する位置にあることより建て替えの可能性も考えられる。また、これらは調査区の縁辺部に存在しており、調査区中央部の削平具合から勘案すると、住居跡の存在を否定しがたいが、調査区中央部を空間としていた可能性が考えられる。

後期後半のものは3基検出しており形態や屋内施設を知るものはS H1186豎穴住居跡である。柱穴は2個で中央部にか状ビットをもつ。壁際には小溝が巡る。後期中頃のもの同様、時期を知ることのできる住居跡は3基と少ないが、空間の意識は続いていると考えられる。

終末期のものは10基を検出している。平面形態や屋内施設を知るものはS H1106・S H1113・S H1176・S H1143・S H1153豎穴住居跡がある。S H1106・S H1143・S H1153豎穴住居跡は長方形プランで2本柱であり、S H1113・S H1176住居跡は長方形プラン4本柱と考えられる。一連のものと考えられる吉野ケ里丘陵II区（北内郭西側に隣接する）においても長方形の4本柱建物が存在する。屋内施設においてはS H1106・S H1176・S H1143・S H1153・S H1307豎穴住居跡にはベット状造構が伴う。これらには削り出しのみのものと、削り出しと張り付けの併用があり、S H1106・S H1307豎穴住居跡は前者に、S H1143・S H1153・S H1176豎穴住居跡は後者にあたる。また、小溝においてもS H1106・S H1143・S H1153豎穴住居跡のようにベットの内側を巡るものと、S H1146・S H1176・S H1277豎穴住居跡のように壁際を巡るものがある。またS H1153・S H1176豎穴住居跡には壁際土壤が付随する。か跡についてはS H1153豎穴住居跡においてか跡と考えられる方形に巡る小溝が存在する。この時期の豎穴住居の配置状況は大半のもの（S H1106、S H1113以外）が後述する環壕跡を切るか隣接する位置にあり、同時併存は考えがたい。

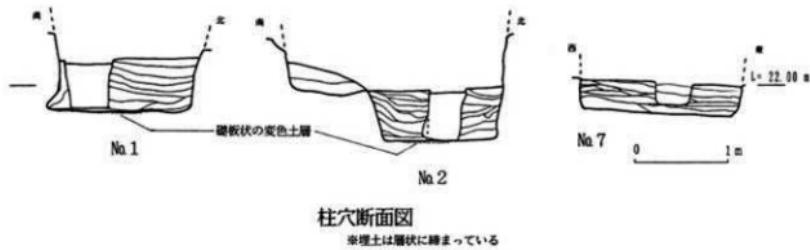
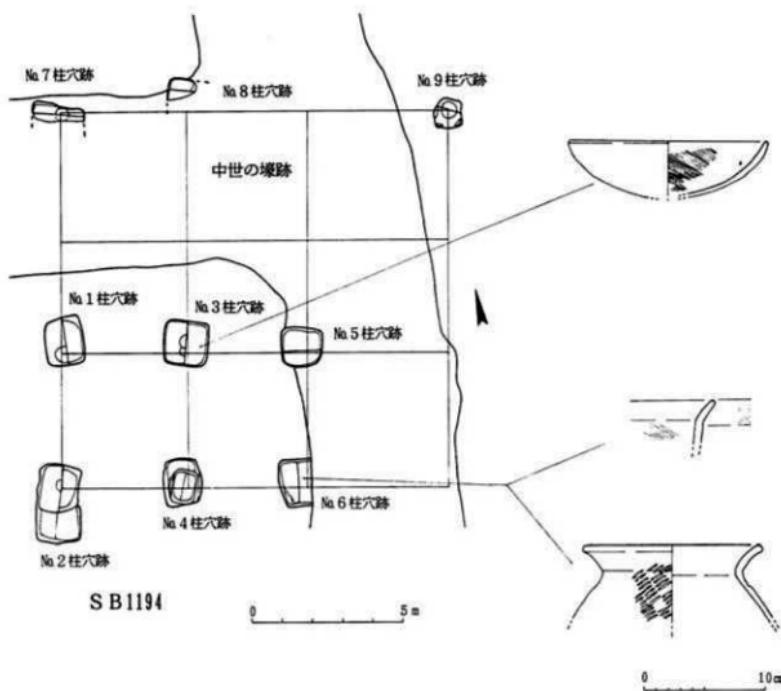


Fig.17 吉野ヶ里遺跡大型堀立柱建物跡・柱穴出土土器実測図

以上、平面形態や屋内施設について時期別に見てみると、前期は長方形、中期前半には円形・隅丸長方形・梢円形である。円形のものは中央に軸跡と2個の柱穴、その周囲に数本の柱穴をもつ。中期後半から終末には長方形となる。基本的には2本柱のものと考えられるが終末には4本柱のものも出現する。また、後期後半以後のものにはベット状造構を作うものがある。

一方、配置状況について同一丘陵上に存在し隣接する吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区及び吉野里丘陵地区Ⅴ区での状況を考え合わせると、中期前半で墓域と集落の区別が大まかに確定し、以後居住城としての意識は継続する。その配置においては不規則であり、地形的な要因が感じられる。しかし、後期中頃、少なくとも後期後半には居住城の縁辺部に配置され、中央に空間を設けると考えられる。この空間との時間的差異は明確ではないが、環濠が營まれる。終末期以後は規則性は認められない。

②掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は25基を検出した。規模の分かるものでは1間×1間のもの8基、1間×2間のもの12基、3間×3間のもの1基である。

また、出土遺物や方向性よりほぼ環濠に伴う時期のものと考えられ、その配置状況では環濠内には10基、環濠外には13基、切り合うもの2基を検出している。環濠外ものは調査区北西部に集中している。

環濠内のものについては、まず内境の北側の半円形および方形の突出部それぞれに物見櫓と考えられる1間×2間の掘立柱建物跡（S B1104、S B1105）を検出した。S B1104掘立柱建物跡は半円形突出部の内側で塹方向に平行して存在しており、梁行3.40m、桁行4.5mとなる。調査は完掘しておらず、柱痕等は不明である。S B1105掘立柱建物跡は塹方向に対して棟方を若干違えて存在する。梁行3.10m、桁行4.1mとなる。柱穴底面の痕跡より、横木が据えられていたと考えられる。また痕跡より柱の径は0.22m～0.30mと考えられる。

また、S B1104掘立柱建物跡は中世の塹跡による削平のため柱穴は9基しか検出しえなかったが、その配置より3間×3間の掘立柱建物跡と考えられ、梁行は12.3m、桁行は12.7mとなる。柱穴の規模は残存状況の良好なもので、長軸で2.6m、短軸で1.4m、深さ1.17mである。柱穴の一部には階段状に掘り込まれたものが認められ、これらは最深部を中央部に向けて掘削している。柱穴の一部の埋土には柱痕が認められるが、その径は0.40m～0.55mである。また、埋土は版築様に層状に積み重なっている。

S D1101塹跡（SD1163塹跡）の北東の突出部内にS B2070掘立柱建物跡が存在する。S B2070掘立柱建物跡は1間×3間で棟方向を塹に対して平行に向ける。柱穴は棟方向と垂直方向であり、階段状もしくゆるやかな傾斜をもって最深部が内側に来るよう掘削されている。また、底面の痕跡より横木を据え柱を立てていたと考えられ、柱の径は0.24m～0.30mと推定される。

環濠外のものについては、11棟が調査区の北西に位置する。1間×1間、1間×2間であり、その棟方向はS D1101塹跡に対し、平行もしくは直行している。このことや出土遺物を考え合わせると、S D1101塹跡とほぼ同時期のものと考えられる。また、その切り合いにより敷度の立て替えを行っている事が分かる。

ここで、吉野ヶ里遺跡全体でみると、掘立柱建物群は南内郭西方（吉野ヶ里地区Ⅴ区西部）に集中しており、これらは全体に係わる倉庫群と考えられるのに対して、本調査区環濠外のものはこの環濠のみに付属する施設と考えられる。このことは本集落の性格や特徴を知るうえで重要である。

一方、構造的に見てみると、柱穴内の底面に横木の痕跡及び柱痕が認められるものが多数ある。横木を配する手法は佐賀平野の低湿地遺跡でしばしば認められるが、丘陵上にある本遺跡でも認められることは興味深い。また、

S B1194掘立柱建物跡には横木は認められず、礎板状の木材の痕跡らしい土層があったが、そもそも横木や礎板は沈下防止のための設備と考えられ、径が50cm程度であれば、これらがなくても柱下面自体がその役割を果たすのかもしれない。

環境内の掘立柱建物跡群の柱穴跡から出土した遺物は大半が小破片であり、まだ詳細な検討をおこなっていないため、建物跡の細かな時期等については不明確である。しかし、堆に規制された配置状況を取る点から考えると、ほぼ環境と建物群は併存していたものと考えられ、堆内に竪穴住居跡が極めて少ない点より、これら掘立柱建物が北内郭主体となる区域であったと考えられる。

③環境・堆跡

北内郭では堆跡を4条検出している。このうちS D1101環境跡は切合いや土層断面により掘直しが認められる（新段階がS D1163、古段階がS D1162）。

S D1102堆跡は後期後半から終末期のものと考えられる。南西部を頂点とする平面A字形に遡り、北東部及び南東部に半円形の突出部、北東部に方形の突出部を有する。これらの内側には、それぞれS B1104・S B1105掘立柱建物跡が認められる。さらに、南東部においても現在は烟の開墾により削平を受けているが、環境の屈曲部を検出しており北東部同様の方形の突出部が設けられていたものと考えられる。つまり、南西から北東に中軸線をとると左右対称となる。また、A字形頂部付近には掘り残しによる陸橋部を設けている。幅2.0m～2.5mで断面形状は逆台形であり、その土層観察より外側に土壘があったものと考えられる。

S D1101堆跡は当初、1条と考えられたためS D1101堆跡としたが、調査区の拡張による切り合い部分の確認や土層観察により掘直しが認められたため、重複部分をS D1101に、未重複部分については古段階（後期後半）の堆跡をS D1162、新段階（後期後半～終末）の堆跡をS D1163堆跡とした。

S D1162堆跡は東側より、S D1102堆跡と約15mの一定距離を保ち北東部に方形の突出部をもち、西側に続く（S D1101堆跡）。西側よりS D1102堆跡との一定間隔は失われ南西の調査区外に延びる（213・215調査区で確認）。幅約2mであるが、A字形底部においては土層観察より幅約3.5mとなる。

一方、S D1163堆跡は北側ではS D1162堆跡と重複し、西側では南に延び、S D1102堆跡との一定間隔を保ちA字形に遡る。S D1102と同様の半円形の突出部はもたない。この造構配置より、少なくともS D1102堆跡とS D1163堆跡は同時併存と考えられる。また、再掘削時には、A字形底部に緩やかな弧を描く半円形の突出部を設けている。内部にはS B2070掘立柱建物が認められた。幅約2mである。いずれも断面形状は逆台形であり、土層観察より外側に土壘があったと考えられる。また、S D1163堆跡についてはA字形の頂部よりやや東よりに出入口を設けるが、S D1102堆跡の陸橋部とはずれる位置にある。このS D1102堆跡とS D1163堆跡の入口間に小穴列が存在しており、柵列によって鍵形に導かれる通路と考えられる。なお、最狭部は約1.1mとなる。

S D1122堆跡は調査区中央部に位置しており、幅約2mで、断面は逆台形をなし、突出部を中心に約50m区間を検出したが、両端は削平されており、堆跡の走行は不明である。突出部の形状より南側が集落内部と考えられ、堆跡の時期は後期中頃から後半にかけてと考えられる。また、埋土の状況から判断すると、人為的に埋め戻している可能性がある。突出部東側より中広形銅戈が出土していることを考え合わせると、S D1101（S D1162）及びS D1102堆を掘削する際にS D1122堆は埋め戻され、銅戈は地鎮具として埋納されたと考えられる。

Tab. 3 吉野ヶ里道路北内郭跡周辺空穴住居跡一覧表

(単位:m)

遺構番号	形態	規模		標方向	屋内施設				主な出土 遺物	切り合い	時期
		長さ×幅×深さ	床面積		柱穴	燃焼施設	ベッド溝	その他			
SH1103	方形	5.78×4.82×0.21	27.860	N-48.5°-E	1 (1)	不明	無	有		SD1102より古	終末期-古墳初期
SH1106	長方形	(4.98)×(3.80)×0.18		N-63.5°-E	1 (1)	焼土	有	有			發生後期終末期
SH1107	長方形	5.60×(3.70)×0.09		N-52.0°-E	不明	がく跡	無	無		SD1127より古	發生後期前半-中期
SH1108	長方形	6.04×4.28×0.07	28.851	N-28.5°-W	不明	不明	無	無		SD1101より古	發生後期前半(古)
SH1109	長方形	5.13×(3.68)×0.11		N-49.0°-E	不明	不明	無			SD1110より古	發生後期前半(古)
SH1110	長方形	(3.40)×-×0.14		N-78.5°-E	不明	不明	不明	無		SD1109より古	發生後期前半(古)
SH1111	長方形	5.60×(3.60)×0.07		N-23.0°-E	2	がく跡ビット	不明	有		SD1127より古	古墳初期
SH1112	長方形	5.88×(2.90)×0.09		N-51.0°-E	不明	不明	不明			SD1101より古	發生後期前半
SH1113	長方形	7.04×5.40×-	38.016	N-43.0°-E	1 (3)	不明	無		鉄鏃・ 鉄斧	SD1122より古	發生後期終末期
SH1114	円形	{±5.30}			4 ?	不明	無	燒面			發生中期前半
SH1115	長方形	4.20×3.49×0.09	14.658	N-57.5°-E	1+ (1)	がく跡ビット	無				發生後期前半-中期
SH1116	長方形?	2.92×(2.69)×0.08		N-33.0°-W				燒面		SD1101より古	發生後期前半(古)
SH1120	長方形	6.04×4.48×0.17	27.659	N-53.5°-E	1+ (1)	不明	無			SD1122より古	發生後期前半
SH1121	楕円形?	3.76×(2.55)×0.17			不明	不明	不明	燒土		SD1122より古 SH1123 より古 SH1120 より古	發生中期前半 發生中期前半 發生中期前半
SH1123	長方形	4.78×3.54×0.06	16.921	N-76.0°-E	1+ (1)	炭化面	無	燒面	鉄鏃	SD1122 より古 SH1121 より古	發生後期前半
SH1141	長方形	5.30×3.42×0.21	18.126	N-38.0°-E	(2)	不明	無				發生後期後半
SH1143	長方形	6.50×4.90×0.16	31.850	N-57.0°-E	1+ (1)	がく跡ビット	有			SH1144と切り合	發生後期終末期
SH1144	長方形	8.32×5.40×0.10	44.928	N-82.5°-E	2	不明	有			SH1144と切り合	古墳初期
SH1145	長方形	(4.22)×3.44×0.10		N-48.5°-W	不明	燒土	不明			SH1146より古	發生後期終末期
SH1146	(方形)	5.47×4.96×0.03	27.131	N-53.0°-W	不明	不明	不明			SH1145より古 SH1146より古	發生後期終末期 發生後期終末期
SH1147	(方形)	4.56×2.91×0.26	13.270	N-33.5°-E	不明	不明	不明	燒面		SH1145より古	發生後期終末期
SH1148	不明	(1.02)×-×0.25			不明	不明	不明			SH1147より古	
SH1149	(方形)	(6.96)×(1.7)×0.07			不明	不明	不明	燒面		SH1146より古	
SH1153	長方形	9.50×6.78×0.31	64.410	N-32.0°-E	2	方形か?	有			SD1162より古	發生後期終末期
SH1156	長方形	3.00×(2.70)×-		N-41.5°-E	4 ?	燒土(?)	不明				
SH1157	長方形	6.50×4.38×0.19	28.145	N-48.0°-E	2	がく跡ビット	無				發生中期前半
SH1158	不明	(2.54)×-×-		N-32.5°-E	不明	不明	不明				發生中期前半
SH1164	長方形	(5.00)×(4.40)×-		N-47.0°-W		燒土	不明				發生前半?
SH1165	不明	(3.38)×-×-				不明	不明			SD1163より古	
SH1166	長方形	(4.40)×3.14×0.04		N-52.0°-W		不明	不明				發生中期前半
SH1167	長方形	(4.52)×3.20×0.02		N-72.0°-E	不明	燒土	不明				
SH1168	方形	4.46×4.36×-	19.446	N-43.5°-E	不明	不明	不明				發生中期前半
SH1169	不明			N-56.0°-E					未発掘		
SH1174	長方形	4.34×2.98×0.22	12.933	N-61.0°-W	不明	不明	不明				發生後期終末期?
SH1176	長方形	8.12×(7.36)×0.29			2+ (2)	不明	有			SD1163より古	發生後期終末期
SH1177	円形	{±5.64}			7 ?	がく跡ビット	無			SD1163より古	發生中期前半
											SH1176より古

造構番号	形態	規 模		棟方向	屋 内 施 設				主な出土 遺 物	切り合い	時 期
		長さ×幅×深さ	床面積		柱 穴	燃焼施設	ベッド溝	その他			
SH1178	円 形	坪6.20			6	が状ビット	無	無			發生中期前半
SH1179	円 形	坪(8.00)				が状ビット	無	無			發生中期前半
SH1180	長方形	4.70×3.76×0.12	17.672	N-62.5°-E	1+(1)	不明	無	無			發生後期前半
SH1184	長方形	(4.58)×(3.35)×-		N-38.5°-E	不明	不明	不明		鉛錠・瓦鑿		
SH1186	長方形	6.80×5.16×0.09	35.088	N-75.5°-W	2	が状ビット	不明	有			發生後期後半
SH1193	(方形)	(4.16)×-×-		N-32.5°-W	不明	不明	不明		未発掘		發生後期前半～中期
SH1195	(方形)	(2.4)×(1.40)×-			不明	不明	不明				
SH1196	(方形)	(6.22)×(1.34)×-		N-49.0°-W	1+(1)	不明					發生中期後半
SH1197	(方形)	(4.60)×(4.30)×-		N-44.0°-W	不明	不明	不明				發生後期前半
SH1199	長方形	(6.28)×(1.44)×-		N-51.0°-E	不明	不明	不明				發生後期前半～後半
SH1200	(方形)	(3.90)×-×0.09			不明	不明	有	有			
SH1226	(円形)				不明	不明	不明				
SH1260	(方形)	4.72×(1.30)×-			不明	不明	不明		SD1317より古		
SH1261	長方形	4.58×3.35×-		N-41.0°-E	不明	不明	有		SD1317より古		
SH1262	(方形)	3.65×(2.28)×-		N-78.0°-W	不明	不明	不明	有			
SH1263	(方形)	4.18×(1.64)×-		N-50.0°-W	不明	不明	不明		SD1262より古 SD1102より古		
SH1265	不 明			N-57.0°-E	不明	不明	不明				發生中期
SH1266	不 明	3.90×-×-			不明	不明	不明		SD1102より古		發生中期
SH1267	(方形)	6.00×(2.88)×-		N-55.5°-W	不明	不明	不明	有			
SH1269	長方形	(5.38)×(5.00)×-		N-33.5°-W	2	焼土	不明				發生後期前半
SH1272	(方形)	(2.28)×-×-		N-59.0°-E	不明	不明	有		SH1107より古		發生後期前半～中期
SH1273	(方形)	(2.30)×(2.25)×1.10		N-71.0°-E	不明	不明	不明	有			發生後期後半～終末期
SH1277	(方形)	(3.90)×(1.20)×1.10		N-5.0°-E	不明	焼土	不明	有	SH1103より古		發生後期終末期
SH1278	椭円形	4.40×-×-		N-76.5°-W	不明	不明	無	無	SH1111より古		發生中期前半
SH1282	(方形)	(5.46)×5.12×-		N-33.0°-W	不明	不明	無	鉛錠	SD1102より新		發生後期前半
SH1290	不 用	-×-×0.20		N-23.0°-E	不明	不明	不明	無			發生後期前半
SH1291	(方形)	(3.40)×-×0.22			不明	不明	不明		鉛錠?		發生中期後半～後期後半
SH1292	円 形	坪4.38								SH1113より古	發生中期前半
SH1301					不明						發生後期前半～中期
SH1302	長方形	5.36×4.20×0.15	22.512	N-83.0°-E	不明	不明	有	有鉛錠			古墳回廊
SH1303	(円形)	坪5.20			不明	不明	不明	無	SH1206より古		發生中期前半(古)
SH1304	(方形)	-×5.54×-		N-80.0°-E	不明	焼土	不明				發生後期前半
SH1305	(方形)	-×4.10×-		N-65.5°-E					未発掘	SH1206より古	
SH1306	(方形)	(4.24)×4.48×-		N-47.5°-E					未発掘	SH1205より新 SH1203より新	發生中期後半
SH1307	(方形)	-×4.20×-		N-46.5°-W	不明	不明	有	無			發生後期終末期
SH1308	(方形)	5.10×4.50×-		N-63.0°-E	不明	不明	不明		未発掘	SD1101より古	發生中期前半
SH1309	(円形)	(4.92)×-×-		N-60.0°-W	不明	不明	有?			SD1102より古	發生中期前半
SH1313	(方形)	6.10×5.80×-		N-46.0°-W					未発掘		
SH1879	(方形)	(4.76)×-×-		N-87.0°-W	1+(1)	不明	有				

Tab. 4 吉野ヶ里道路北内郭跡周辺掘立柱建物跡一覧表

(単位:m)

造構番号	規 模		柱 行		梁 行		棟 方 向	柱 穴			備 考
	間 数	建物面積 (m ²)	全長	柱間	全長	柱間		平面形態	平 面	規 模	
SB1104	1×2	15.300	3.40		4.50	2.25	N-38.0°-E	方形	0.84×0.84~0.80×0.64	0.100~0.120	
SB1105	1×2	12.710	3.10		4.10	2.05	N-75.5°-E	方形	0.56×0.64~0.56×1.12	0.060~0.280	柱直径 (0.22~0.30)
SB1126	1×2	18.993	4.10		4.63	2.18	N-6.5°-W	方形	0.56×0.92~0.80×1.16	0.180~0.270	柱直径 (0.13~0.31)
SB1129	1× (1)		2.88			1.80	N-39.0°-W	方形	0.84×1.46~0.90×1.54	0.460~0.600	
SB1130	1×2	14.654	3.44		4.26	2.13	N-36.0°-W	方形	0.70×0.78~0.74×1.38	0.330~0.540	柱直径 (0.09~0.11)
SB1131	1×1	6.096	2.40		2.54	2.54	N-41.0°-E	方形 円形	0.58×0.64~0.84×0.92	0.190~0.320	柱直径 (0.24)
SB1132	1×1	11.776	3.20		3.68	3.68	N-44.3°-W	方形	0.80×0.84~0.84×0.84	0.430~0.530	
SB1133	1× (1)		3.64			3.00	N-43.5°-E	方形	0.60×0.64~0.70×0.72	0.240~0.430	
SB1134	1×1	7.276	2.58		2.82	2.82	N-0.5°-W	方形	0.52×0.52~0.58×0.64	0.280~0.360	
SB1135	1×1	6.760	2.60		2.60	2.60	N-44.0°-W	方形	0.76×0.80~0.88×1.20	未発見	
SB1136	1×2	14.592	3.20		4.56	2.28	N-29.0°-W	方形	0.78×1.02~1.10×1.36	0.180~0.420	
SB1137	1×2	16.800	3.36		5.00	2.50	N-66.0°-W	方形	0.88×1.00~1.20×1.30	0.590~0.890	柱直径 (0.20~0.26)
SB1138	1×2	15.645	3.50		4.47	2.235	N-51.5°-W	方形	0.70×0.80~0.85×0.85	0.120~0.515	柱直径 (0.12)
SB1150	1×1	13.901	3.62		3.84	3.84	N-52.0°-W	方形	0.76×0.94~0.92×1.15	0.130~0.440	
SB1161	1×1	8.112	2.40		3.38	3.38	N-54.5°-W	方形	0.65×0.82~0.88×0.92	0.150~0.280	柱直径 (0.22~0.23)
SB1172	×2				4.78	2.39	N-37.5°-E	方形	0.78×0.78~0.84×1.22	0.370~0.740	柱直径 (0.22)
SB1194	3×3	156.210	12.30	4.10	12.70	4.233	N-79.0°-W	方形	1.05×1.12~1.57×2.30	0.070~0.810	柱直径 (0.40~0.55)
SB1310	1×2	21.996	3.90		5.64	2.82	N-51.0°-W	方形	0.90×0.98~1.00×1.34	0.400~0.470	柱直径 (0.28)
SB1311	1×1	13.280	3.32		4.00	4.00	N-47.0°-W	方形	0.66×0.70~0.96×0.98	0.150~0.340	柱直径 (0.10~0.24)
SB1312	1×2	11.165	2.90		3.85	1.925	N-5.5°-W	方形	0.66×0.88~0.83×1.02	0.080~0.250	柱直径 (0.14~0.25)
SB1314	1×2	18.150	3.30		5.50	2.75	N-63.5°-E	方形	0.84×0.88~1.28×1.28	0.120~0.290	柱直径 (0.20~0.24)
SB2067	1×2	19.584	3.46		5.66	2.83	N-15.0°-E	方形	0.76×0.90~0.84×1.02	0.335~0.425	柱直径 (0.14~0.30)
SB2068	1×1	8.112	2.60		3.12	3.12	N-34.5°-W	方形	0.68×0.84~0.80×0.84	0.095~0.240	
SB2069	1× (3)		3.46	(7.44) (2.48)	N-50.7°-E	方形 円形	0.53×0.58~0.94×1.00		0.195~0.380	柱直径 (0.21~0.30)	
SB2070	1×2	29.250	4.50		6.50	3.25	N-33.0°-W	方形 円形	0.96×1.20~0.82×1.52	0.300~0.465	柱直径 (0.24~0.30)

④その他の遺構

その他の遺構には柵列と穴倉がある。

まず、柵列は北内郭の入り口周辺、つまりSD1163塙跡とSD1102塙跡の切れ間をつなぐ位置より検出した。前述したように、SD1163塙跡とSD1102塙跡はそれぞれ掘り残しによる陸橋部が存在する。これらをつなぐ様な2条の柵列及びSD1102塙跡内部に2条を検出した。

西側の柵列（S A1181柵列跡）は直線で、東側の柵列（S A1182柵列跡）は鍵形に曲がって塙をつなぐ様に配置されていた。また、2条ともSD1102塙跡には接続しておらず1mほどの空間を持つが、塙の上層観察より、外側に土壘の存在を推定でき、そのためと考えられる。

S D1181柵列跡については12古個の柱穴で構成されており、その径は40cm~80cmである。SD1163の陸橋部西端から西へ約5mの位置からSD1102塙跡の陸橋部西端へほぼ直線的に延びる。全長約8.5mで、柱穴間の長さは一定していない。また、SD1182柵列跡については12個の柱穴を検出しており、その径は40cm~110cmである。柱穴の形状はすり鉢状をなす。SD1163塙跡の陸橋部東端よりSD1102塙跡に向かって垂直に約4.5m延び、西側にむかってほぼ直角に折れ曲がる。さらに、約5.3m西に延びた後、再びSD1102塙跡に向かって直角に折れ曲がり約4.5m延びる。

これらの2条の柵列は環境及び土壘と相まって、SD1102環境内部に容易に進入できないようにする施設と考えられる。また、これらの柱穴より土器等の明確な遺物は検出しえなかつたが、このことよりSD1163塙跡と同時期、つまり後期後半から終末期と考えておきたい。なお、この2条の柵列の最狭部中央に柱穴を検出している。これについても土器等の出土遺物は検出しえなかつたが、柵列の柱穴同様すり鉢状の形状を呈しており、扉等の施設に伴うものと推定される。

また、さらに、SD1102塙跡の内側においても2条の柵列跡を検出している。SD1102塙跡の陸橋部西端より北へ約3m延び西南に向かって鋭角に折れ曲がり、約3m延びる。13個の柱穴で構成されており、柱穴の径は約30cm前後である。さらにその西側にも南北に約4.5m延びる柵列跡を検出した。4個の柱穴で構成されており、柱穴の径は40cm前後である。これらについても、並びが雑然としていたり、柱穴が小さいなど、上記の2条の柵列とは様相が異なるが、同様に内部への容易な進入を拒むための施設と考えたい。

以上、これらの遺構についてみてみると、内部への進入に対して厳重な警戒が成されていたことが知れる。北内郭同様に内塙で囲まれている南内郭についてはこれほどの施設は整備しておらず、北内郭の性格を知るうえでの重要な資料となる。

一方、穴倉については調査区北半部で検出したが、前述したように十分な調査がなされておらず、詳細については不明である。本調査区にも、中期前半代の竪穴住居跡が多数存在することより、これらに伴うものであると推定される。

②弥生時代の遺物

弥生時代の遺物としては、多数の土器のほか、鉄器や青銅器などがある。

①土器

北内郭跡からは竪穴住居跡等の削平はひどいものの、塙跡を中心に大量の土器が出土している。また、後期を中心的に時期的には前期末より継続する場所であり、今後本地域を考えるうえで重要と思われるが、整理途中であり、紙数の関係上一部についてかい抜んで報告したい。

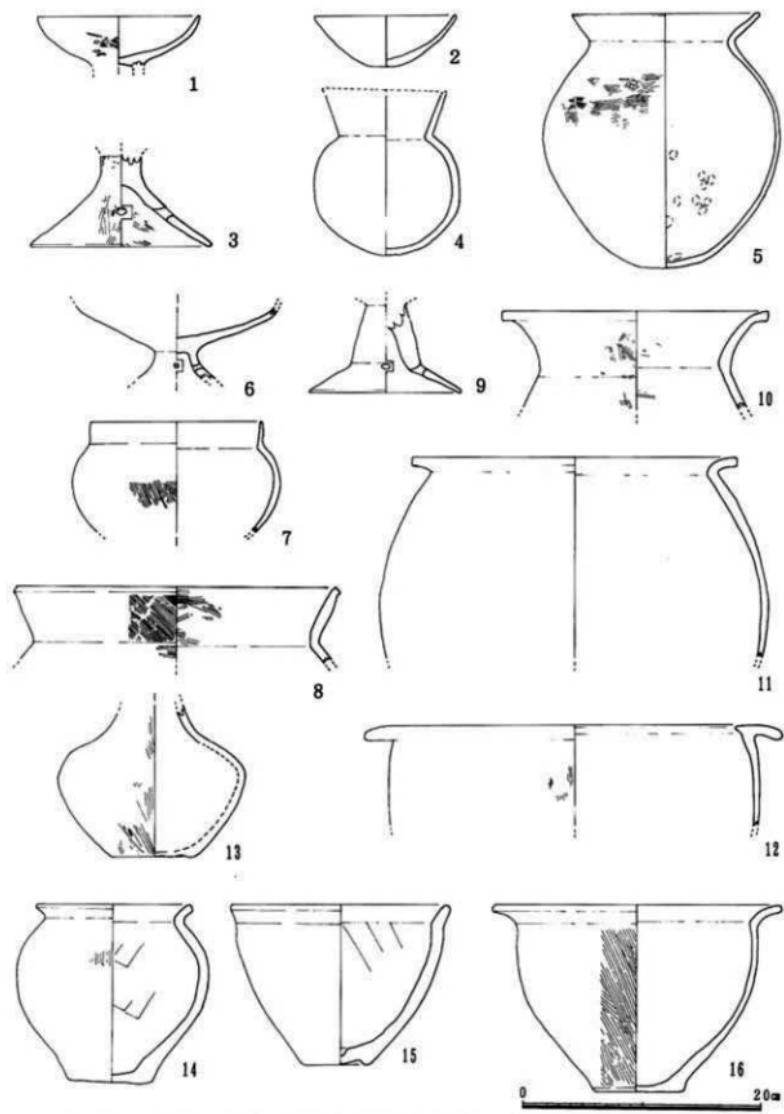


Fig.18 吉野ヶ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(1)

(1-5-SH1103 6-8-SH1106 9-10-SH1111 11-12-SH1116 13-16-SH1123)

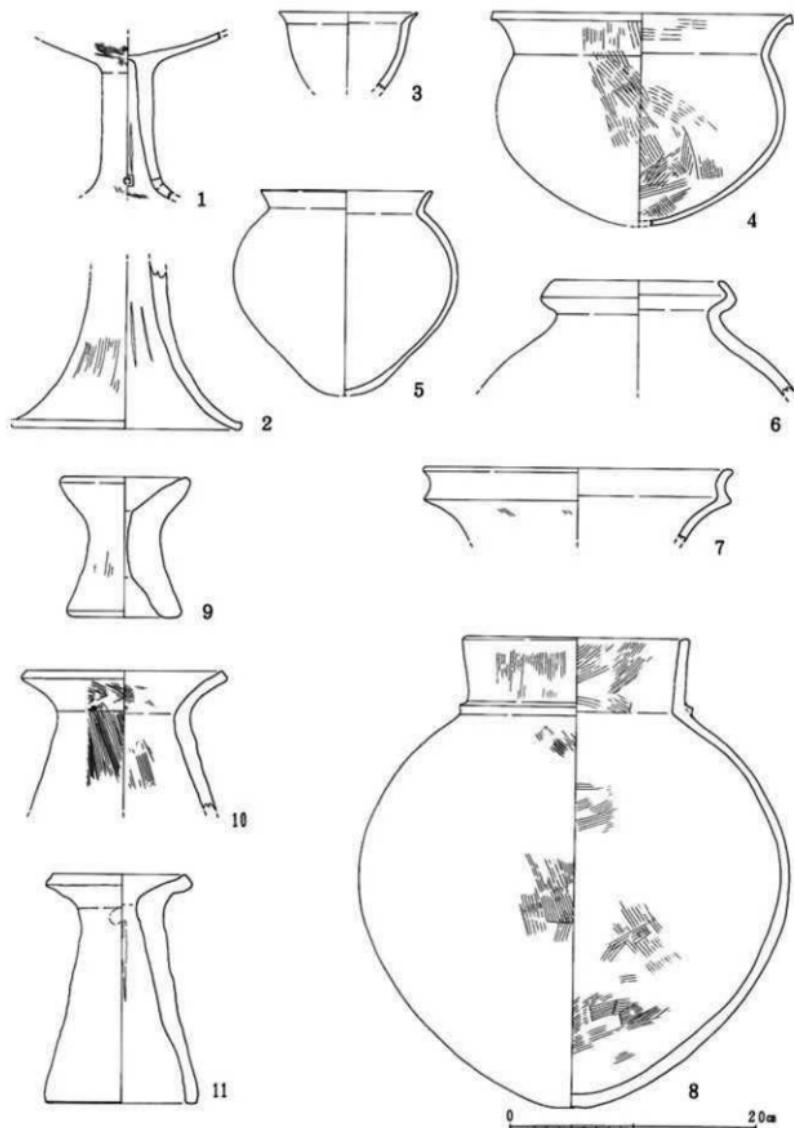


Fig.19 吉野ヶ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(2)

(SH1113)

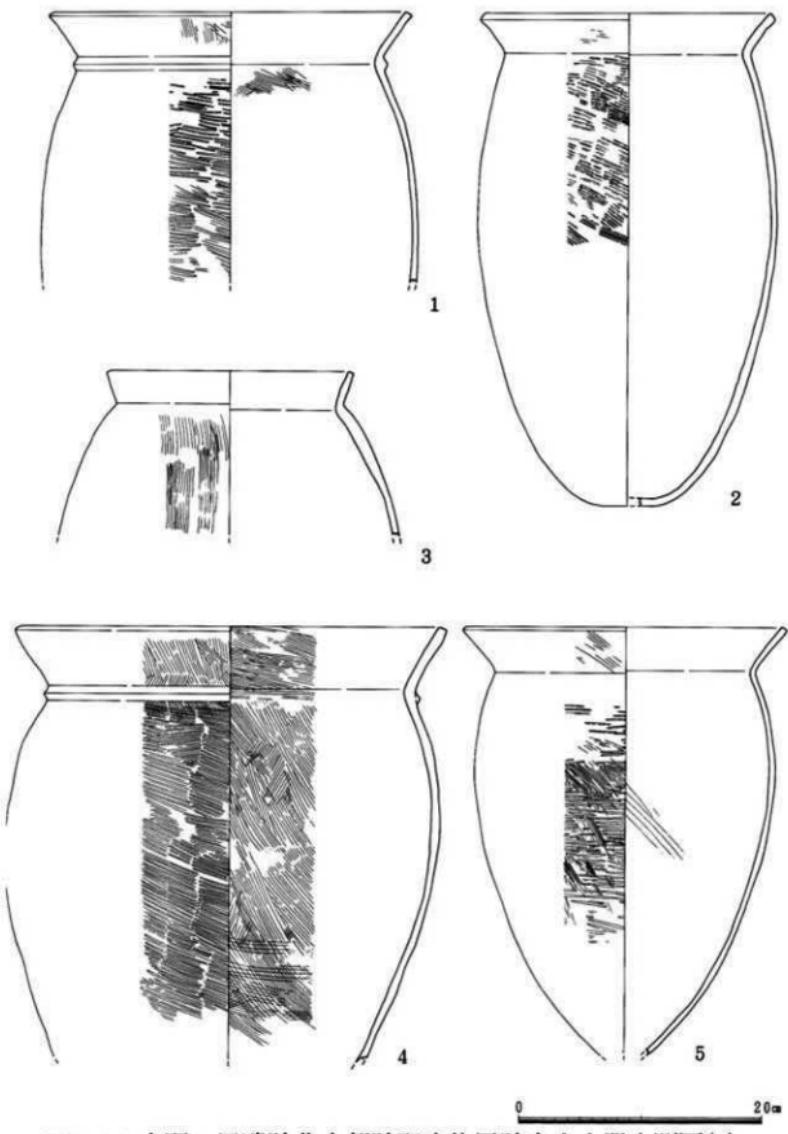


Fig.20 吉野ヶ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(3)
(SH1113)

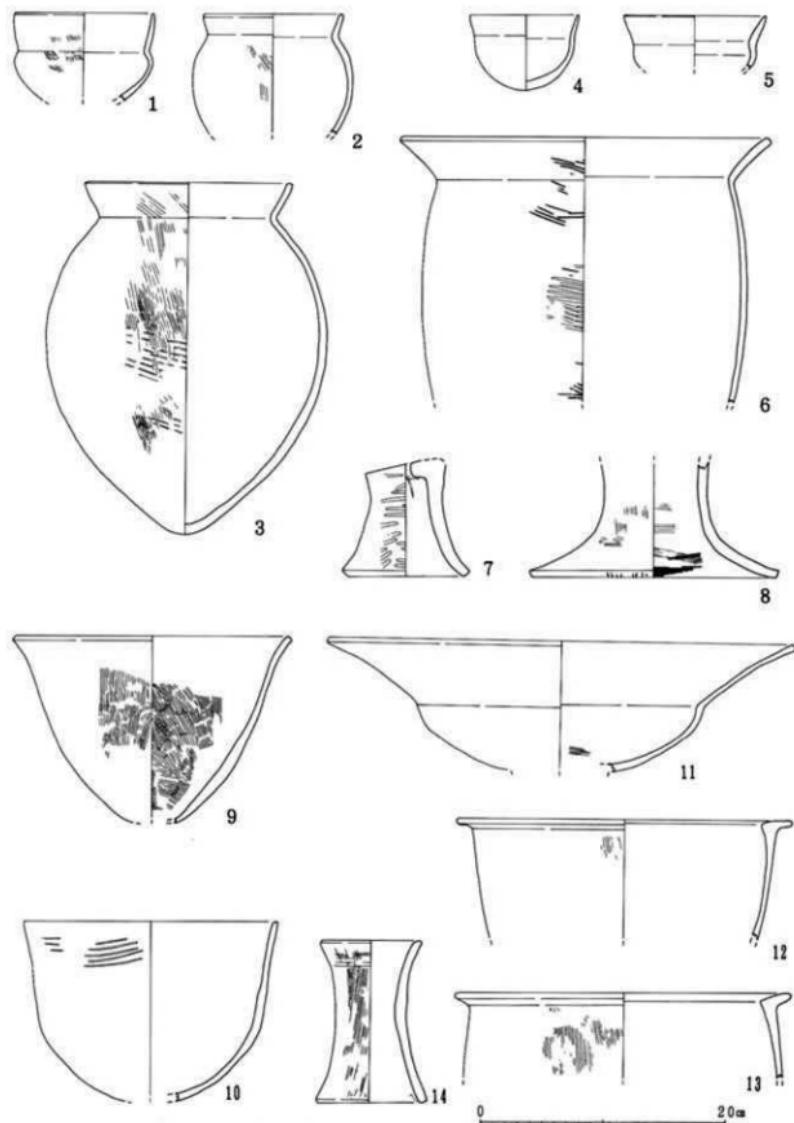


Fig.21 吉野ヶ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(4)

(1~3・SH1143 4~6・SH1145 9・11・SH1146 12・14・SH1157)

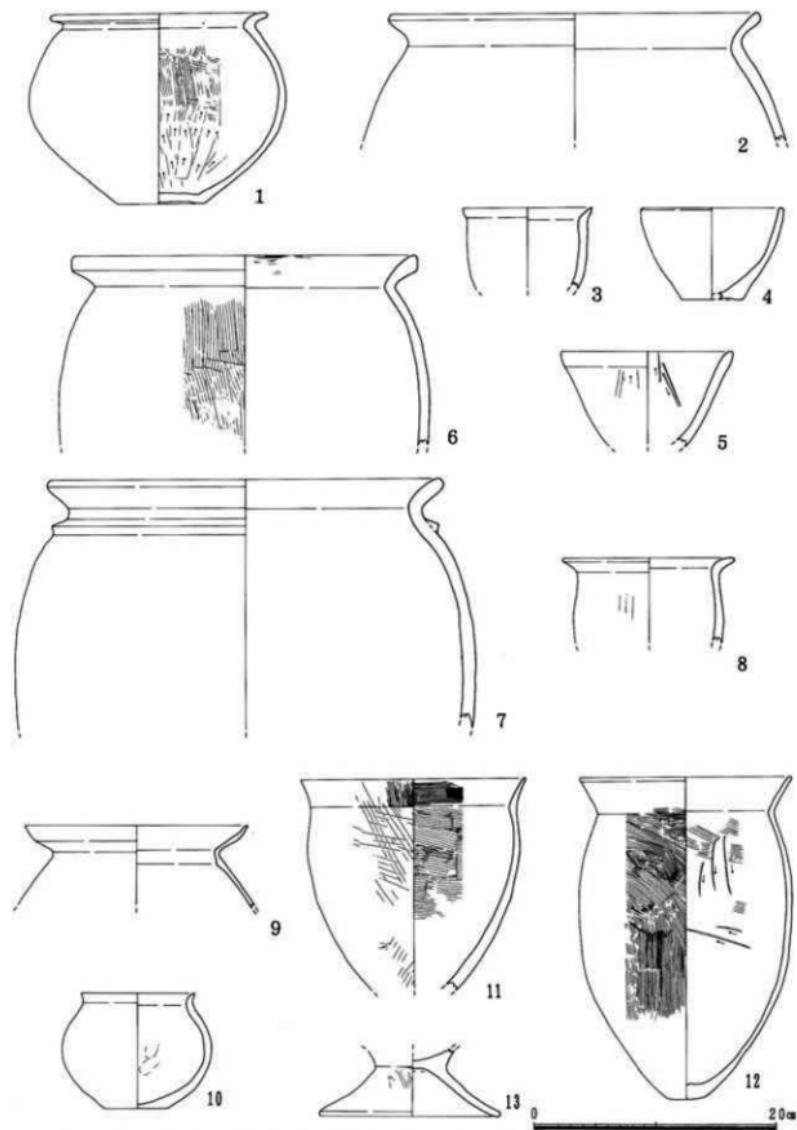


Fig.22 吉野ヶ里遺跡北内郭跡竪穴住居跡出土土器実測図(5)

(1---S H1178 2---5---S H1272 6---8---S H1290 9---S H1302 10---S H1304 11---13---S H1307)

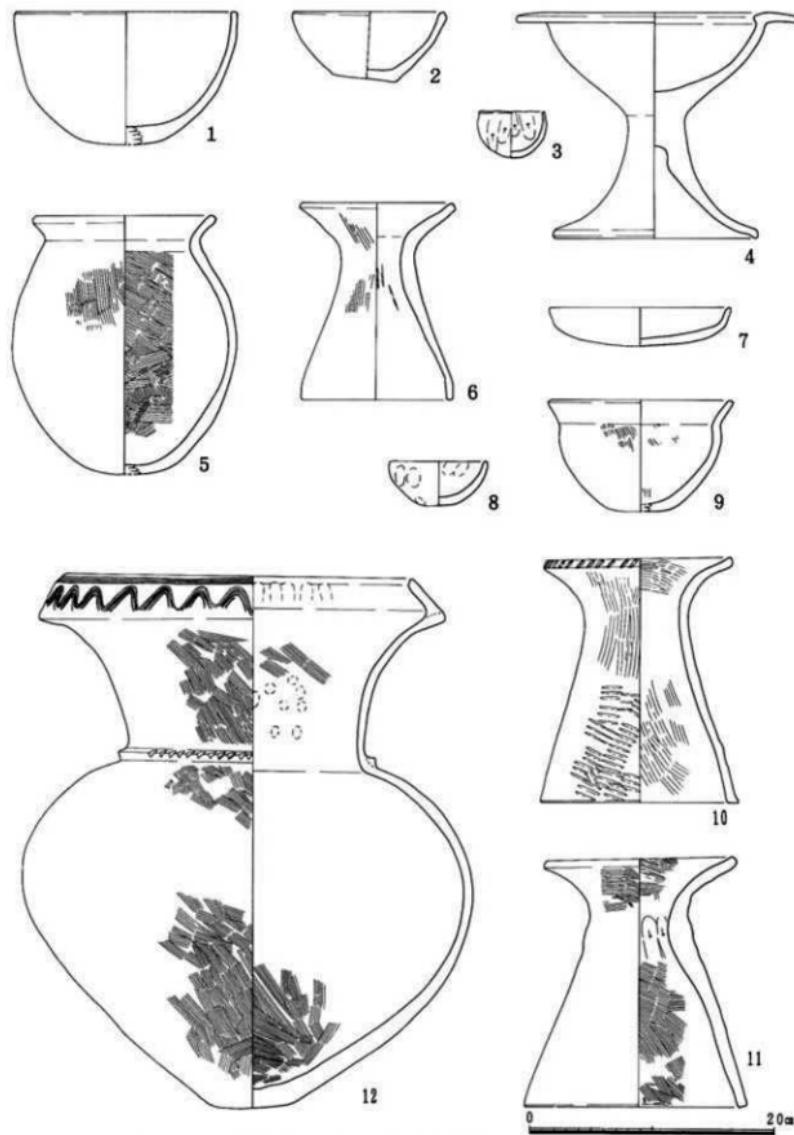


Fig.23 吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(1)

(1~6-- S D1122 7~10-- S D1163 11·12-- S D1162)

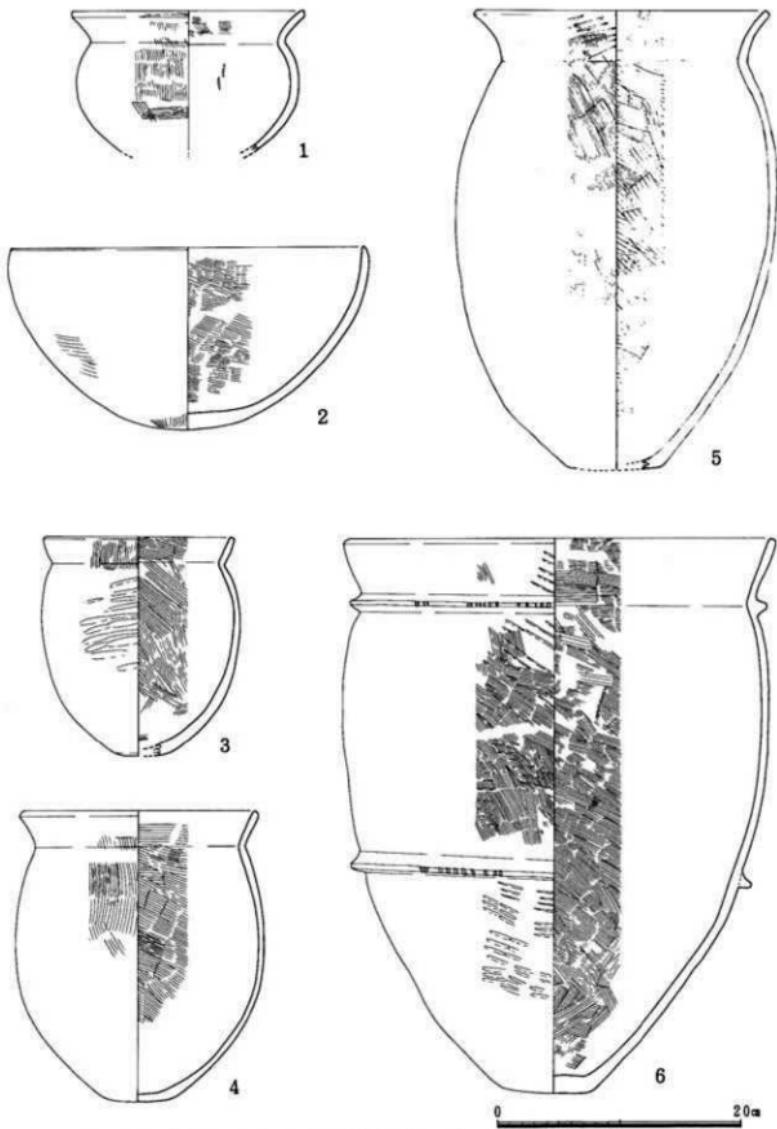


Fig.24 吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(2)

(SD1162)

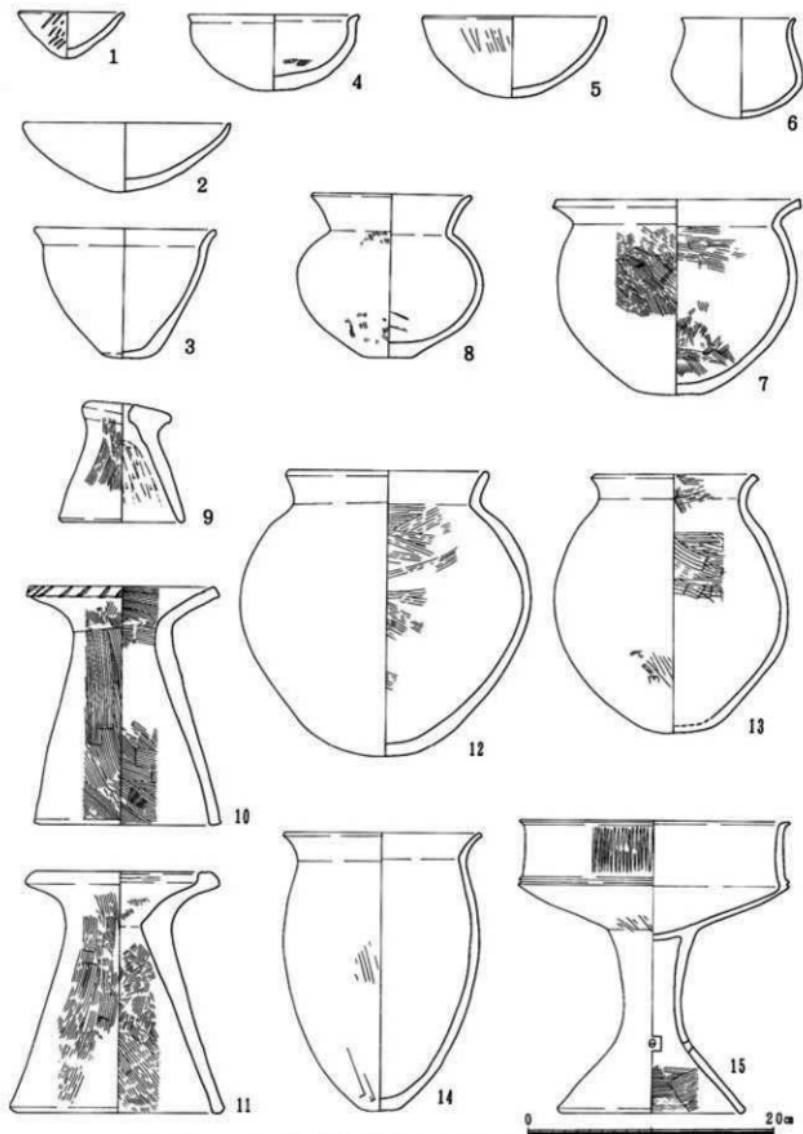


Fig.25 吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(3)

(SD1102)

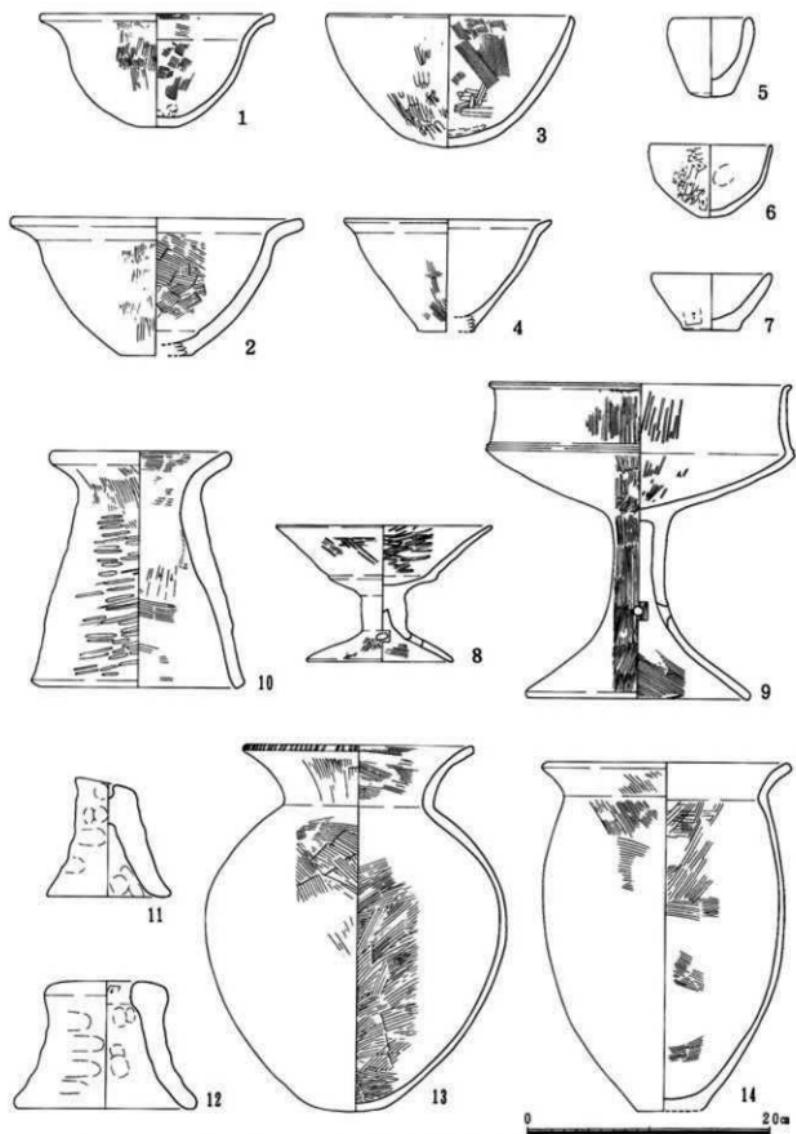


Fig.26 吉野ヶ里遺跡北内郭跡環壕跡出土土器実測図(4)

(SD1101)

なお、弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器については、北内郭跡の変遷を考える場合に細かな時期細分が必要と考えられるので、その時期決定については蒲原宏行氏論文(佐賀県立博物館調査研究書台16集「古墳時代初頭前後の土器編年」1991)の佐賀平野を中心とした古墳時代初頭前後の土器編年を使用した。

豊穴住居跡出土土器 (Fig.18~22)

S H1103豊穴住居跡からは甕、壺、高坏、鉢が出土している (Fig.18)。5は甕であり、外面ハケ目調整で丸底を呈する。1・3の高坏は畿内系の低脚杯であり、脚柱部から裾部にはなだらかに移行する。古墳時代の初頭(タケ里式期)のものと考えられる。

S H1106豊穴住居跡からは甕、壺、高坏が出土している (Fig.18)。6は高坏であり、口縁部及び脚部を欠損する。低脚杯と考えられる。7は口縁部が短く直立する直口壺である。8は甕であり、口縁部から頸部にかけて残存する。外面ともハケ目調整を施す。後期終末期(憩座2式)と考えられる。

S H1111豊穴住居跡からは壺、高坏が出土している (Fig.18)。9は畿内系の高坏であり、杯部は欠損する。やや、内湾ぎみに聞く短い脚柱部を持つ。10は広口壺であり、口頸部が大きく外反し、なで肩となる。古墳時代初頭(タケ里式期)のものと考えられる。

S H1116豊穴住居跡からは甕、壺が出土している (Fig.18)。11は短頸壺であり、底部を欠損する。12は甕であり、いわゆる「T」字状口縁部を持つ。口縁端部は垂れ下がる。中期後半のものと考えられる。

S H1123豊穴住居跡からは壺、鉢が出土している (Fig.18)。14は壺であり、口縁部が外反気味に短く開き、底部は平底となる。後期前半と考えられる。

S H1113豊穴住居跡からは甕、壺、高坏、器台が出土している (Fig.19・20)。2 (Fig.20) は在地系の甕であり、凸レンズ底をなす。外面上半に横位のタタキを施す。7 (Fig.19) は二重口縁壺であり、口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部はゆるやかに外反する。8は直口壺であり、口縁部はやや外傾するものの直立ぎみに立ち上がる。胴部最大径は中位にあり、底部は丸底となる。また、頸部には凸帯が巡る。後期終末期(憩座1~憩座2)と考えられる。

S H1145豊穴住居跡からは甕、壺、鉢が出土している (Fig.21)。1は鉢であり、口縁部は直立気味に長く伸び、肩の張った福球形を成す。3は甕であり、横方向のタタキを残し底部は尖り気味の丸底を呈する。後期終末期(憩座2式)と考えられる。

S H1146豊穴住居跡からは鉢、高坏が出土している (Fig.21)。11は高坏であり、坏部のみ残存する。坏上半部は外反し、坏下半部は内湾する。後期終末期(憩座2式)と考えられる。

S H1157豊穴住居跡からは甕、器台が出土している (Fig.21)。12、13は甕であり、口縁部は逆L字形を成す。中期前半と考えられる。

S H1178豊穴住居跡内小穴からは壺が出土している (Fig.22)。1は短頸壺である。中期前半である。S H1272豊穴住居跡からは甕、壺、鉢が出土している (Fig.22)。2は広口壺であり、口外縁部は短く開く。3は甕である。後期前半と考えられる。

S H1290豊穴住居跡からは甕が出土している (Fig.22)。6は甕であり、口縁はくびれが強く、口縁端部に向かって厚くなる。外面及び口縁部内面にハケ目調整を施す。7も甕であり、頸基部のくびれが強く、凸帯をもつ。

後期前半と考えられる。

S H1302堅穴住居跡からは甕が出土している(Fig.22)。胴部以下が欠損する。口縁部は外傾内湾し、肩はなで肩となる。畿内系の精製甕と考えられる。古墳時代初頭と考えられる。

S H1304堅穴住居跡からは甕が出土している(Fig.22)。10は短頸壺である。後期前半である。

S H1307堅穴住居跡からは甕が出土している(Fig.22)。11・12は甕であり底部は尖り気味であり丸底である。後期終末期(憩座2式)と考えられる。

環壕・塹跡出土土器 (Fig.23~26)

S D1122塹跡では鉢、壺、高坏が出土している(Fig.23・24)。後期前半~後期後半と考えている。

S D1163塹跡では鉢、器台が出土している。

S D1162塹跡では甕、壺、鉢、器台が出土している(Fig.23)。12は二重口縁壺である。口縁は内傾し、外面には柳描波状文及び沈線を施す。底部は凸レンズ状を成す。6(Fig.24)は甕である。5は口縁部は外湾し、端部は面取りを行っている。底部は平底である。6は口縁部が直線的に立ち上がり、最大径は肩部にある。底部は凸レンズ状である。頭部及び胴部には凸帶を巡らし、端面にはキザミを施す。外面上半はタタキをハケによって消している。後期後半と考えられる。

S D1102塹跡からは甕、壺、鉢、器台、高坏が出土している(Fig.25)。15は高坏であり、壺上半部が直立し、端部は外方向に屈曲する。外面には縱方向の暗文を施す。7は壺であり、口縁部は外湾気味に大きく開く。底部は凸レンズ状を成す。内外面ともハケ目調整を施した。8は壺であり、口縁部は長く、大きく開く。底部は平底を成す。後期終末期(憩座式)と考えられる。

S D1101塹跡からは甕、壺、鉢、器台、高坏、支脚が出土している(Fig.26)。8は畿内系と考えられる高坏である。口縁部は直線的に延びる。壺柱部はやや内湾気味に短く延び、脚部に至る。9は高坏であり、口縁部が直線的に立ち上がり、端部は外方向に屈曲する壺下半部と直立する口縁部の接合部外面には凹線を巡らしている。外面はヘラミガキを施している。13は広口壺である。胴部最大径はやや上位にあり、底部は凹レンズ状を成す。口縁部にはキザミを施す。11、12は支脚である。11は受部が傾斜し、12は受部が水平に近く中空である。14は甕である。後期後半~終末期(憩座2式)と考えられる。

②他の遺物

土器以外の遺物としては、青銅器、鉄器、石器がある。これらは現在整理中であり、整理の終わった鉄器の一部と青銅器についてのみ報告したい。

鉄器では工具類、農具類、武器類が出土している(Fig.28)。

工具類では盤、斂、鉄斧等が出土している。まず、盤と考えられるものは5~8の4点出土している。5~7は鍛造品、8は鋤削用盤である。7はS H1184堅穴住居跡からの出土であり、それ以外は検出時の出土である。5は刃部が湾曲しており、使用による破損と考えられる。また、突合せは重なる。全長約12.4cmで、刃部幅は1.1cmとなっている。6は基部に叩かれたような痕跡が見られたので、盤の可能性も考えられる。全長10.4cm、刃部幅0.8cmとなる。7は全長10.4cm、基部幅7cmであり、刃部まではほぼ同様の盤である。

8は以前青銅器鍛造関連遺構(田手一本黒木地区I区 第154調査区 SK04土壤)から出土したもの同様、鋤削用盤の側辺を利用したものである。全長8.9cm、基部幅2.8cm、刃部幅1.4cmである。

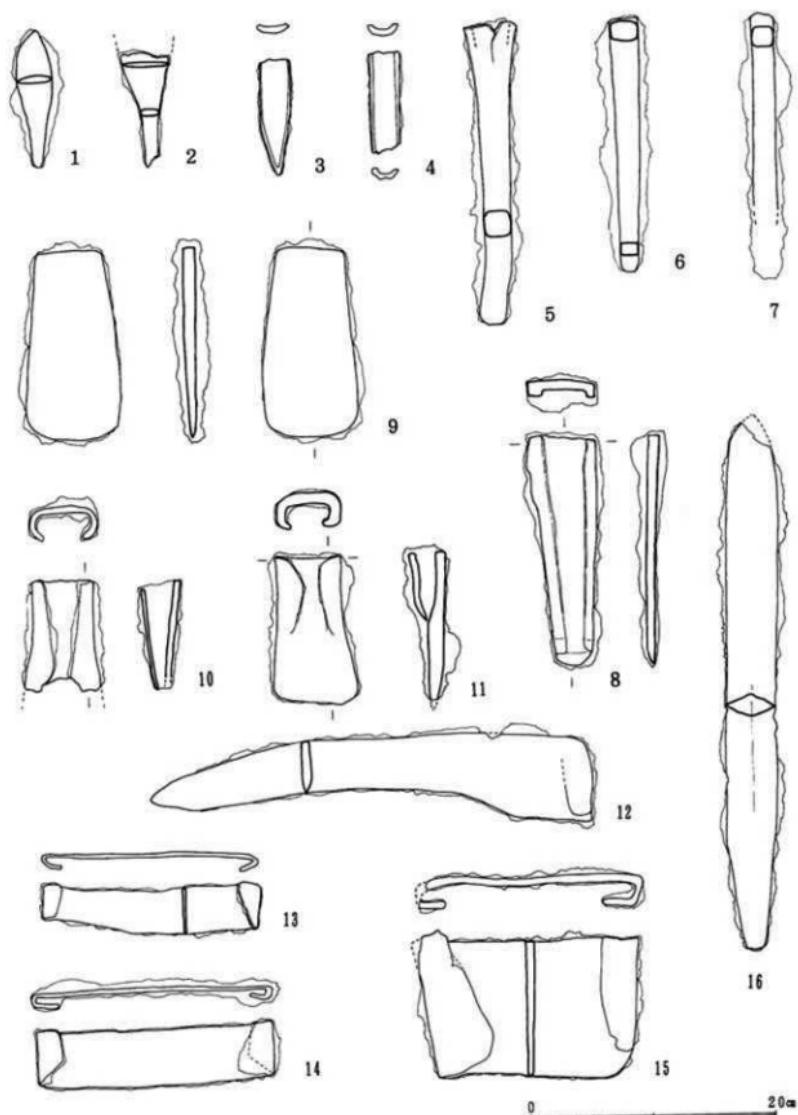


Fig.27 吉野ヶ里遺跡北内郭跡出土鐵器実測図

3・4はである。3は検出時の出土であり、刀部のみ残存しており、残存長4.7cmである。裏スキを持つタイプである。4はSD1101墳跡出土であり、身部のみであり残存長4.2cm、幅1.1cmで、断面U字形を成す。

鉄斧は9～11の3点が出土している。袋状鉄斧2点、板状鉄斧1点である。10は袋状鉄斧であり、SH1113豎穴住居跡からの出土である。刃部が欠損し、袋部のみ残存する。残存長は4.6cm、基部幅は2.6cmである。11はSD1101墳跡出土のものである。完形であり、全長6.0cm、基部幅2.7cm、刃部幅3.4cmであり、刃部幅の方が大きい。9は板状鉄斧であり、所轄建物不明の柱穴出土の完形品である。全長7.8cm、最大幅3.9cmである。

農具類では鎌、摘鎌、鋤先が出土している。12は鎌であり、SD1102墳跡より出土している。全長18.1cm、基部幅3.4cmである。刃部は曲刃であり、基部の折り返しは横U字形になる。基部及び折り返し部には木質は残存していない。13・14の摘鎌は、SH1113豎穴住居跡及びSD1162墳跡から各一点ずつ出土している。13は刃幅9cm、縦幅2cmである。また、SD1162出土の摘鎌(14)は刃幅9.8cm、縦幅2.3cmである。背面には有機物が付着する。13は鋤先であり、刃幅7.9cm、縦幅5.7cmである。刃部は使用により折り返し部分まで摩耗している。また、折り返しの一方は叩き出しを行っておらず、縦方向に對して鋸角に折り曲げることによって折り返しを形成し、刃部の使用を可能にしている。現時点では破損品の再利用の可能性を考えておきたい。

武器類としては鉄鎌2点、鉄剣1点が出土している。1は有茎で柳葉形のであり、全長5.70cmである。2も同形と考えられるが、先端部を折損している。残存長4.85cmである。16は短剣である。圓が不明瞭であり、幅広の長めの茎を持つ。目釘穴は認められない。鎬も不明瞭であり切っ先を欠損する。全長21.5cm、剣身長17.2cmである。

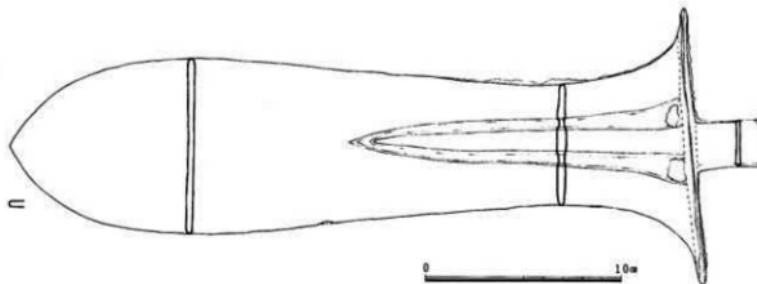


Fig.28 吉野ヶ里遺跡北内郭跡出土中広銅戈実測図

以上、北内郭は完全な発掘をおこなっていないにもかかわらず、多量の鉄製品を出土した。調査面積から勘案するとさらに多量の鉄製品を包含しているものと考えられる。また、すべてを見尽くしたうえで判断すべきであるが、注目すべき点として、工具の割合が非常に高いことがあげられる。

青銅器としては、SD1122墳跡内に掘り込まれた小穴から銅戈が出土している。小穴は、SD1122墳跡方形張り出し部の東側基部付近に掘削されており、平面形態は梢円形であり、長軸48cm、短軸24cm、であった。墳跡は深さ約20cm残存しており、周辺の構造の深さを勘案すると小穴は墳の埋土上面より掘削されたものではなく、墳の埋没過程中に埋納されたものと考えられる。さらに、このことより銅戈の埋納は墳跡の埋没に関連したものと考えられる。

銅戈（Fig.27）はその小穴の底部に刃部を横にして埋納されていた。切っ先の方向は北である。全長38.1cm、刃部最大幅8.98cm（厚さ0.35cm）、刃部最小幅6.42cm、茎幅2.55m、茎の厚さ0.41cm、闊幅13.82cm、闊厚さ1.97cmで、重量は481grである。刃部は丁寧に面取りされている。柄内部に文様などは認められない。また、鎗は認められないがその大きさや形態より広形銅戈に近い中広銅戈に属すると考えられる。なお、小穴の土層観察等から、埋納容器等の痕跡は認められなかった。

通常は集落から離れたところから出土するが、今回のように集落内部の特に墳跡から出土したということは興味深い。SD1122は内塹が掘削され北内郭が成立する直前に埋没しており、何らかの関係が認められる。

北内郭跡は極めて計画的に設計された区画と言える。前述したように、南東から北西ラインを中心線に取ると、南北はほぼ対象形となる。さらに、入り口も柵列や土壁によって鍵形に屈曲し、容易に中には侵入できないような構造をもっていた。

また、周辺との配置関係を考えると、まず、少なくとも中期前半以来、隣接する斐棺墓群とは厳密に区画されている。前期末には北内郭に北接する場所に斐棺墓群が営まれ、中期後半まで続く。その後SD1101環墳跡が掘削されるが、墓域には全く侵入していない。さらに、西接する位置にも中期から後期初頭の斐棺墓及土壤墓等が存在するが、北側同様に居住城の侵入は全く見られない。居住空間と墓域としての意識は住居跡及び斐棺墓が出現する、前期末から後期まで存続しているようである。さらに、他地区と異なり連絡とこの意識が統一していることより、当初より単なる居住城を越えた意味合いのある場所であったことが想定される。また、北接する斐棺墓群（吉野ケ里丘陵V区）では中央部に幅約1.2mの通路状の空白地が存在している。さらにその北部では弥生時代後期の掘立柱建物跡や立柱と考えられる柱穴がある。ここにおいて、墳丘墓の中心に位置する最古のSJ1006斐棺墓、立柱跡、掘立柱建物跡、通路状の空白地、北内郭内の大型建物跡などを見た場合、これらは一直線に配置されていることが分かる。また、これらについては、墳丘墓の構築は中期前半であり、埋葬は中期後半まで継続し、斐棺墓群は前期末から中期後半まで、掘立柱建物は後期のものと考えられ、形成時期はそれぞれ異なる。おそらく墳丘墓を中心として、徐々に古いものを取り込み一連の空間を成立させたものとみられる。これら一連の施設群によって墳丘墓を中心とした祭祀的空間を形成したものと考えておきたい。

4. 妙法寺跡

田手一本黒木地区I区の220調査区は、吉野ケ里遺跡南内郭の復元集落から南南東に500m、JR長崎本線の北50mに位置する。現在の東妙寺とは南流する田手川を挟み西に約220m離れている。標高は約16mの吉野ケ里段丘の南先端部付近にある。調査前までは畠として野菜類が生産されていたところであり、調査区は南東方向にや

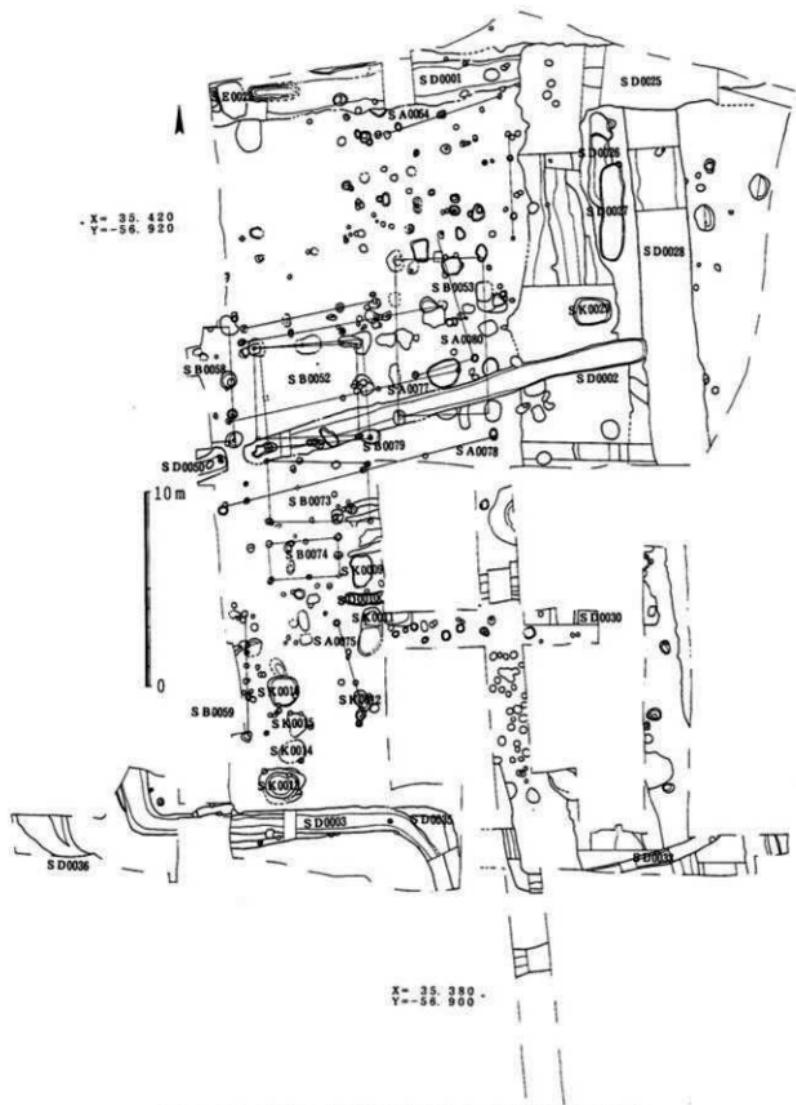


Fig.29 吉野ヶ里遺跡妙法寺跡遺構分布図

や傾斜している。調査面積は947m²で、東南部はトレンチを設けて部分的な調査を実施した。

この調査区で確認された遺構は、弥生時代中期のものとみられる貯蔵穴跡2基を除いて、ほとんどが鎌倉時代から戦国時代にかけてのものとみられる溝跡20条、掘立柱建物跡7基、柵跡7列、土壙30基、井戸跡1基、小穴多数などを確認した。中世の遺構・遺物の概要については、以下のとおりである。

(1) 遺構

① 溝跡

溝跡には、建物跡群などが存在する空間を区画するものや、その他の機能をもつと考えられるものが存在する。また、調査区南から北、さらには西、そして再び北へ巡る溝跡も存在する。この溝跡も内部空間の区画線の一部と考えられるが、この溝跡と並行して通称「深道」と呼ばれている中世から現代まで遺存した規模の大きい道路跡が存在している。

S D0001溝跡

調査区北端の東西溝跡である。幅は約2m、深さは最深部で0.58mを計る。方位は北に5度振れる。断面形は逆台形状で壁は上部がやや開いて立ち上がる。また、溝の底は西から東へ緩やかに高くなっている。東はS D0025溝跡によって切られており、延長16mが残存していた。

S D0002溝跡

調査区の中央を東西に走る断面逆台形の溝跡。全長21.4mで調査区内において完結している。幅は1.0m～1.6m、深さは検出面から最深部まで0.48mを計る。方位はE-15°-Nである。東端は削平のためわずか0.09mの立ちあがりを確認した。また、さらに東側は地形が傾斜しており後世の削平が激しく、この溝の延長上に対応する溝跡は検出できなかった。

S D0003溝跡

調査区最南部でクランク状に折れ曲がる溝跡を検出した。東西に13m遺存する溝跡が、東端は南へ西端は北へそれぞれ曲がり、調査区内での延長は17.5mとなる。方位は東から真西へそしてほとんど真北を向いている。南へは弧を描くように曲がる。溝跡の幅は0.9m～1.2mで、深さは3.5m～5.0m遺存していた。

S D0025溝跡

調査区東を南北に通り、調査区北端で東に直角に曲がる溝。断面形は床が幅広く上部が聞くU字形である。溝の幅は3.1m～5.6m、深さ0.82m～1.18mを計る。屈曲部から南に20m検出し、さらに南へはトレンチで溝の行方を確認した。南になるにしたがって溝の中軸がゆるやかに東に湾曲している。

S D0028溝跡

調査区東を南北に通り、調査区北端でS D0025溝跡の東西ラインに切られる溝跡。断面形は床が幅広いU字形である。溝の幅は2.7m、深さ0.4m～0.6mを計る。南に18m検出し、さらに南へはトレンチで溝の行方を確認した。総延長39.5mを検出した。方位はE-5°-Nである。

S D0030溝跡

調査区東を南北にはしる溝跡をS D0025溝跡の1～5トレンチ（2トレンチのぞく）の下層で検出した。断面はU字形で、3・4トレンチでは明確な段がついており、S D0025溝跡との境が明瞭に観察できた。S D0025溝跡が掘られる前に掘られた溝である。S D0025溝跡の延長でS D0030溝跡を検出できなかった部分はS D0025溝跡の底面より浅くなっていたものとみられる。

S D0033溝跡

調査区南東部に東西にはしる溝跡である。S D0003溝跡と3mの間隔をとり、ほぼ平行してクランク状に曲がる。幅0.45m～0.75m、深さ0.25～0.36mの断面逆台形である。東西方向の部分の方位はS D0002溝跡等と同じE-15°・Nと一致している。この溝の延長は東に向かう方向の溝は調査区内では検出できなかった。

S D0035溝跡

調査区南中央部でS D0003溝跡の掘替えと考えられる溝跡を検出した。検出できたのは北東の曲がり部のかたの部分と、西の曲がり部西北部である。加えてS D0035溝跡の土層からみると滞水したと考えられる水平堆積がみられ、S D0003溝跡のトレーニング土層の下層が同じように水平堆積がみられた。S D0003溝跡と同じ方向に掘られているので掘替えと判断した。また、西の拡張部に於いてもS D0003溝跡に切られる溝状のものがみられる。

S D0036溝跡

調査区西端南のトレーニングからS D0003溝跡に3mの間隔をとって平行してめぐる溝跡を一部検出した。断面形はV字形と考えられるが、西側のかたは調査区外で未検出。表土層から3.25m下からは小石を含む非常に固く締まった砂質の層があった。調査区外南部にもこの溝跡に続いて同じようにクランク状に折れた溝状の落ち込みが地形として残っている。

その他の溝跡

S D0010溝跡は、調査区南西部に位置する断面逆台形状の溝。東西方向に1.9m検出した。幅0.6m、深さ0.1～0.3mで床面は調査区外に向かって緩やかに低くなっている。この溝の東約5mの位置にあたる平成元年度に実施した4トレーニングの調査で検出されたS D03溝跡と同一のものと考えられる。S D0026溝跡は、S D0025溝跡北部の西に約1mの間隔をもって存在する南北方向の溝跡である。全長3.9m、幅1.2m、深さ0.2mの規模である。遺物なし。S D0027溝跡は、S D0026溝跡の南に接して存在する溝跡である。全長4.9m、幅1.15m、深さ0.7mの規模で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。S D0050溝跡は、S D0002溝跡から西に0.9m間隔をもってはじまり、調査区外の西にのびると考えられる溝跡。S D0002溝跡と床面の高さを比べるとS D0050溝跡のほうが0.35m程高い。溝床の東端で柱穴を検出した。

②掘立柱建物跡

調査区では多数のピットを検出した。溝跡の方位との一致や位置関係・柱穴の間隔からみて7基を掘立柱建物跡と判断した。

S B0052掘立柱建物跡

調査区中央のやや北西寄りにある2間×1間（全長5.24m×5.14m）の平面方形の建物跡である。柱穴の平面形態はほぼ橢円形である。柱穴の大きさは1.0m～1.2m、柱痕跡は径0.15m～0.20mである。北中央の柱穴では六角形をした柱痕跡を検出した。六角形の柱痕跡は2本密着した状態で、東の柱は西の柱に対して大きく建物の軸はS D0025・S D0028溝跡などの方位と一致している。溝に対して建物の方位を合わせているが、柱穴掘り方の大きさに対して小さい柱を用いている。

この建物跡の南には、0.8mの間隔をもち東と西の柱筋を掘えたS B0073掘立柱建物跡と、さらに約1mの間隔をもち西側の柱筋を掘えたS B0074掘立柱建物跡が存在する。

S B0053掘立柱建物跡

調査区の中央部にある2間×4間で建物面積36.0m²の南北棟の建物跡である。柱穴の平面形態は隅丸方形で不定

型なものや方形のものも含まれる。柱穴の規模も径約1mと大きいが、柱痕跡は小さく径0.30m～0.38mである。軸はほぼ南北軸に合ひ1°西に振れる。

S B0058掘立柱建物跡

調査区中央西端に平行2間、梁行は調査区外西にのびると考えられる建物跡。柱穴は平面ほぼ円形で0.70m～0.88m柱痕跡0.30m～0.38m、柱間は3.0mとなっている。南北軸から5°西に振れるもので、S D0025・S D0028溝跡などの方位と一致している。

S B0059掘立柱建物跡

調査区南西部のS K0016土壌を囲む位置にある1間×1間(2.25m×3.1m)の平面方形の建物跡である。柱穴は小規模である。

S B0073掘立柱建物跡

S B0052掘立柱建物跡の南に方位を揃えて並ぶ1間×3間(1.8m×3.5m)と考えられる南北棟の建物跡である。柱穴は小規模である。

S B0074掘立柱建物跡

S B0073掘立柱建物跡のさらに南に並ぶ1間×2間(3.05m×5.2m)の東西棟の建物跡である。梁行の間隔は1.6m～1.9mと差がある。方位は並んでいる他の建物に比べて若干(約2°)西傾向している。柱穴は平面円形で小規模である。

S B0079掘立柱建物跡

S B0052掘立柱建物跡を替えたと思われる建物跡。規模はほぼ同じ。

③柵跡

柱穴の規模が小さく、柱穴の間隔が広いことや列の総延長が長いものを柵列と考える。4基が存在する。

S A0075柵跡は7m区間(4間分)を検出した。柱間隔は1.5mで、列方向はE-15°-N。S A0076柵跡は20m区間(4間分)を検出した。柱間隔は5.0mで、S D0002溝跡北西部を囲む柵列跡。方位はE-10°-Nで他の柵列の角度と異なる。S A0077柵跡は6m区間(3間または6間分)を検出した。柱間隔は2.0m、列方向はE-15°-Nで、SD0002溝跡に沿って存在する。西の延長部分は後世の削平を受けているが、さらに西約6mの位置で同一の柵跡のものと考えられる柱穴を確認したので、総延長は12m以上となる可能性もある。S A0078柵跡は7m(または14m)区間(2間または4間分)を検出した。柱間隔は3.5mで、列方向はE15°-Nである。S D0002溝跡の南に沿って存在する。S A0080柵跡は12m区間(4間分)を検出した。調査区中央部に位置するS D0002溝跡の北を東西方向に走り、東から北へ直角に曲がる柵列跡。柱間は3.0mで、方位はE-15°-Nである。

④土壤

S K0009土壤(長径1.56m、短径0.96m、深さ0.11m)は、平面形がいびつな長方形の土壤で、壁は真っ直ぐに立ち上がる。方位は北向き。S K0011土壤(長径2.60m、短径1.05m、深さ0.24m)は、平面形がやや細長い楕円形の土壤で、2段掘りとなっている。東南部は削平を受けている。S K0012土壤(長径1.07m、短径0.64m、深さ0.20m)は、平面形が隅丸長方形の土壤で、壁は掘り鉢状に緩やかに立ち上がる。S K0013土壤(長径2.46m、短径1.80m、深さ0.55m)は、平面形が楕円形の土壤で、壁は床面から緩やかに立ち上がる。S K0014土壤(長径2.90m、深さ0.05m)は、平面形が方形か長方形の土壤で、削平が激しい。S K0015土壤(長径1.23m、短径0.87

m、深さ0.11m)は、平面形が不整方形の土壤で、壁はやや急に立ち上がる。S K0016土壤(長径1.23m、短径0.87m、深さ0.11m)は、平面形が不整方形の土壤で、壁はやや急に立ち上がる。遺構中央部床面では焼土・炭化物がみられる。S K0029土壤(長径1.94m、短径1.37m、深さ0.45m)は、平面形が隅丸方形の土壤で、壁の立ち上がりは急である。長軸を東西に向いている。S D0025溝跡の中層から検出したもので、溝が中程まで埋まっている。これは掘削されたものらしい。

⑤井戸跡

S E0022井戸跡は長径1.94m、短径1.32m、深さ1.08mの、平面形が隅丸長方形の掘り形をもつ井戸跡で、壁の立ち上がりは急である。井戸枠は痕跡を含め検出できなかった。床面は標高13.4m。S D0001溝跡の幅に納まる。S D0001溝跡との関係では、溝のアゼの下層に水平堆積があり、滞水していたとみられる。しかし、溝が高まつたところにあることや井戸の長軸が溝の方位と無関係に掘られていることから、溝と井戸が同時に併存していた可能性はないものと考えられる。

(2)遺物

出土遺物としては、土器、陶磁器、瓦、金属製品、石製品などがある。土器の種類は土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器などである。陶磁器は青磁、白磁、青白磁、無釉陶器、褐釉陶器などである。弦生土器・石斧・石戈・石鎌など弥生時代の遺物も出土したが、ここでは中世の遺物についてのみ概略を報告する。

①土器

土器には土師器(土師質土器)の小皿、杯、鍋、壺、羽釜、瓦器の椀、瓦質土器の大鉢などがある。

i. 小皿 (Fig.30-1~17)

小皿は、形態的に、深みのあるものと器高が低く扁平なものに分けられる。深みのあるものは、底部から体部が開くように立ち上がるものの、底部から稜をもって体部が急な角度で立ち上がるものの、底部の径が小さく体部が開くものなどに分けられる。すべて底部は糸切り離して粘土塊から離している。糸切り離し痕が残っているものが多く、中には板状圧痕がついたものも存在する。

S D0025溝跡の中層からは33個体がまとめて出土したが3・4枚ずつが重なった状態であった。完形のものは26個ある。すべてが糸切り離し。板状圧痕がみられるものは6点で、その内の5点は非常に板目が細かい圧痕がみられた。口縁部がU字状に欠けているものが13点あった。うち23個体が口径6.8cm~7.2cm、器高1.8cm~2.05cm、底径4.8cm~5.2cm、他の3点が口径7.4cm~7.5cm、器高2.0cm~2.15cm、底径5.0cm~5.2cmである。

ii. 杯 (Fig.30-18~28)

杯は、深みのある小皿の形態と同じく、底部から体部が開くように立ち上がるものの、底部から稜をもって体部が急な角度で立ち上がるものの、底部の径が小さく体部が開くものなどに分けられる。すべて底部は糸切り離して粘土塊から離している。糸切り離し痕が残っているものが多く、中には板状圧痕がついたものも存在する。口径11.0cm~13.3cm、器高2.8cm~4.3cm、底径5.4cm~8.9cmである。

口径11.4cm~11.8cm、器高3.4cm~3.8cm、底径7.8cm~8.0cmの杯(20)は、外面が丁寧なクロナデ調整で、内面体部から底部にかけてヘラミガキ様の跡がみられる。焼成良好のためか明褐色となっている。

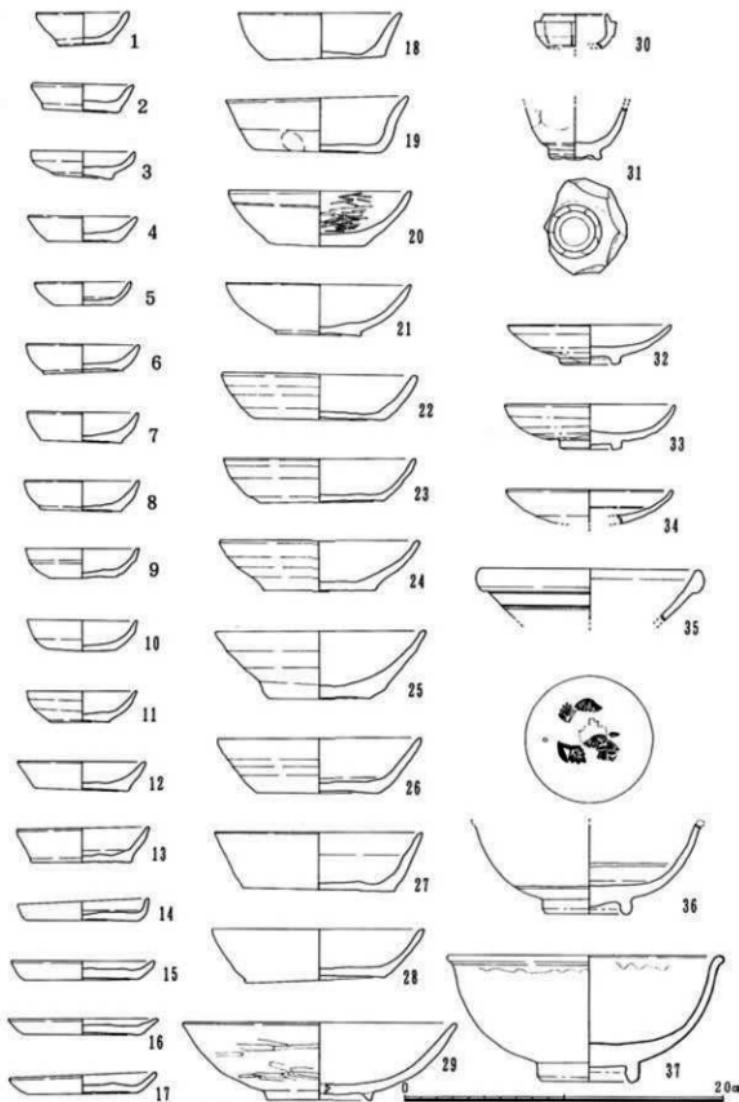


Fig.30 吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(1)

(1-S D0002 2-5-8-12-13-15-19-29-30-32-33-36-37-S D0025 3-9-11-20-21-S K0029 4-S D0027
14-23-27-S K0016 28-S D0001 26-34-35-S D0028 24-S K0011 22-25-S E0022 31-S K0009)

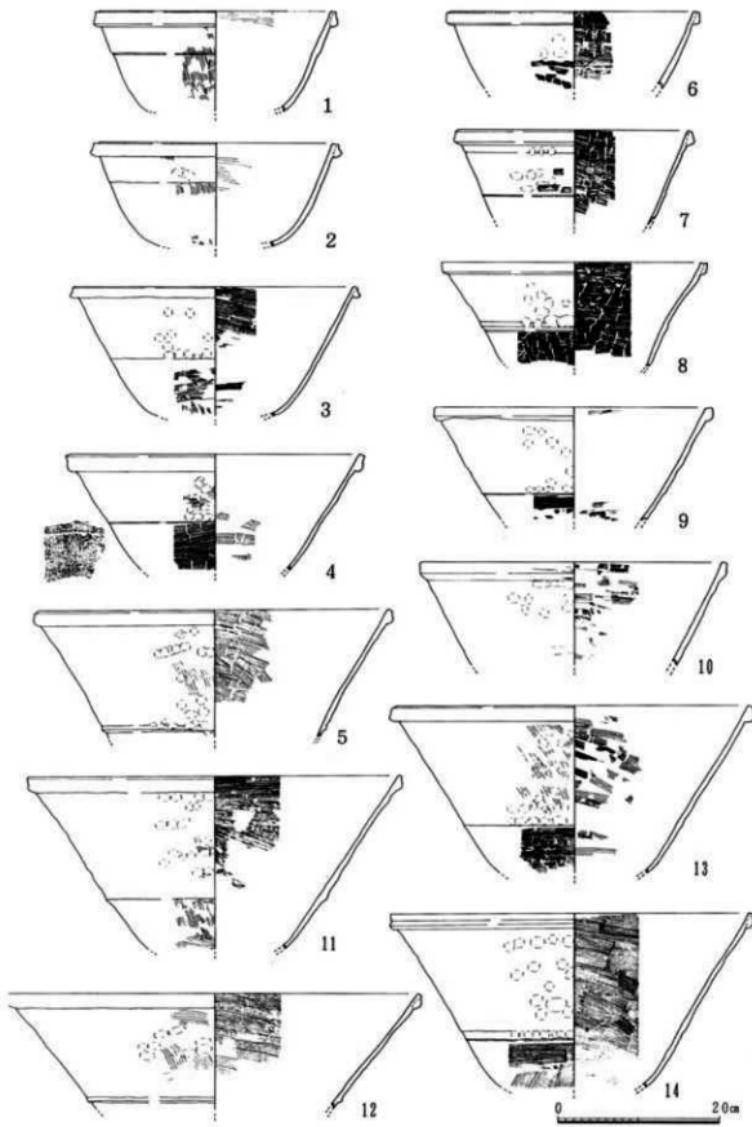


Fig.31 吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(2)

(S D6025)

iii. 檻 (Fig.30-29)

瓦器の檻 (29) である。底部からわずかに丸みを帯びた体部が緩やかに開く。口縁部はごくわずか外に開く。底には先端が丸い断面三角形の貼り付け高台がつく。体部外面はヘラミガキが施されており、内面はナデ調整である。復元口径17.0cm、器高4.9cm、高台溝6.6cmである。

iv. 鍋 (Fig.31-1-14)

鍋は大きさと器形からⅠ類～Ⅴ類に分類できる。すべて底部を欠失している。

Ⅰ類 (1・2) は、器形は底部から体部にかけて丸味をもち（胴部がやや張る）、立ち上がりはやや急で内反り気味に口縁が開く。調整は体部内面には横に荒いハケ目後ナデ消し、体部外面は縦に荒い刷毛目に入る。また煤が外面全体に付着している。口縁部は玉縁状で上面にナデで面取りがなされる。口径は28.1cm～28.4cm。

Ⅱ類 (3・4・9・10) は、器形はわずかに内反（外に膨らむ）して聞く体部から底部にかけてやや丸味を帯びる体部中央につなぎ部をもつ。口縁部は玉縁状で上面にナデで面取りがなされる。体部外面上部には指頭痕が多く、斜め方向のハケ目がわずかにみられる。体部下部には隙間なく横方向のハケ目がある。4は体部外下部には接続状のヘラ描き文様が施されている。口径28.4cm～36.6cm。

Ⅲ類 (5・13・14) は、器形は底部から緩やかに立ち上がり、体部の下部から口縁部にかけてわずかに外に反りながら直線的に開く。口縁部は外に張りつけた玉縁状を呈する。口縁上面には面取りがなされる。調整は内面体部は口縁部から下部にかけてはくまなくハケ目調整がなされる。体部外面は横方向に並んで押さえ痕がつき、斜め方向に荒いハケ目調整がなされている。体部外下部は水平方向にハケ目を施す。口径42.5cm～43.8cm。

Ⅳ類 (6～8) は、体部下部から口縁部にかけてわずかに外反して直線的に開く。体部内面上部には横方向に、外面上部には縦方向のハケ目がくまなく入っている。口径は29.4cm～29.8cmであるが、11のような口径45.2cmといった大型のものもある。

Ⅴ類 (12) は、体部下部から口縁部にかけて直線的に開く。荒い目のハケ目が口縁部下の体部に斜めに入る。などである。口径49.8cm。

鍋には体部中央付近に段をもつが、その部分の径は8と12を除き、12.6cm～13.4cmの間におさまる。また、これらは調整の仕方で大きく2つに分類することができる。体部内面をハケ目調整後ナデ消しするもの (1～4・9・10) と、隙間なくハケ目調整を施すもの (5～8・11～14) がある。前者が先のⅠ・Ⅱ類に、後者がⅣ・Ⅴ類にみられる傾向がある。Ⅱ・Ⅲ類のものには内面の調整にかかわらず、外下部に横方向のハケ目調整される一群がある (3～5・8～10・13・14)。これらの鍋は溝跡からの出土であるが、異なる型のものが重なり合って出土した状況などからみて、鍋の使用に際しての使い分けがなされていた可能性がある。

v. 壺 (Fig.33-3)

置かれたような状態で出土した1は胎土には小石を多く含む。は体部肩に菊花文がつく2は体部最上部に穿孔が施される。体部外面は褐灰色、胎土は明褐色でわずかに砂粒を含む。復元口径13.0cm。

vi. 羽釜 (Fig.33-1-17)

体部は上位で内に曲がり稜がつく1は口縁部がわずかに外に開く。体部上部の鉢は、やや鉢・穿孔ともに右

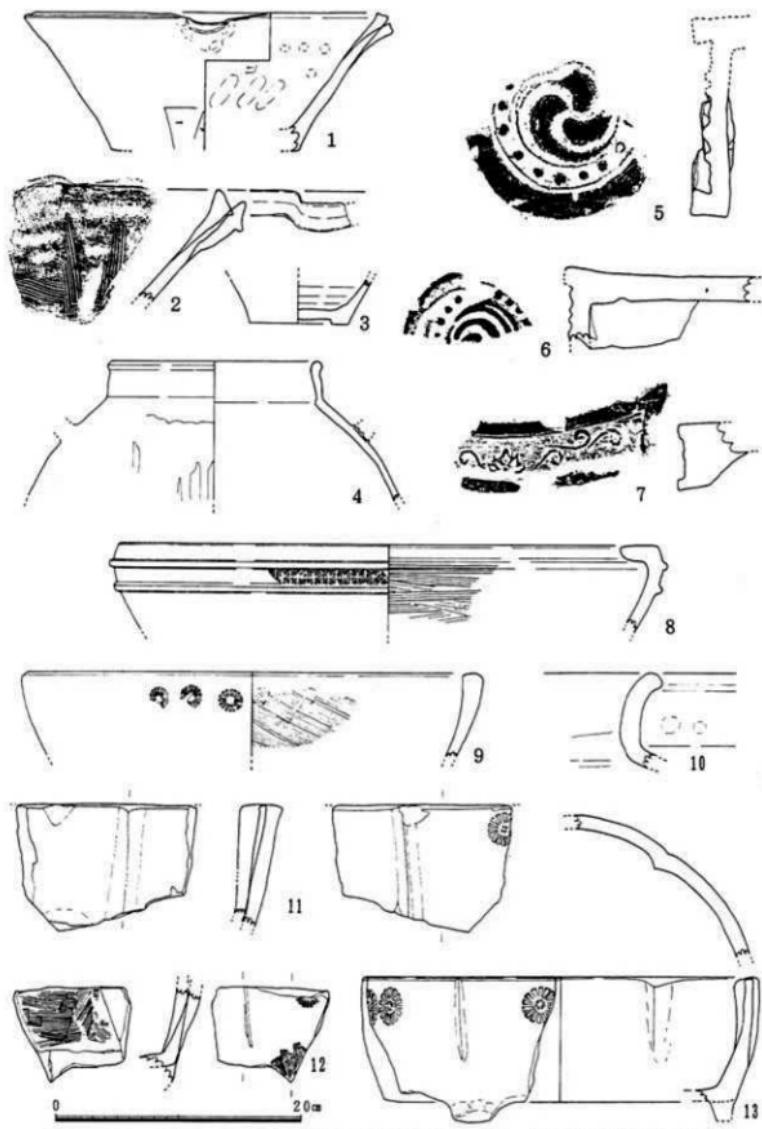


Fig.32 吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器・陶磁器実測図(3)

(1-S K0011 2-7-8-11-12-S D0025 3-S K0016 4-S D0001 5-S K0001 6-S K0015 9-S D0028 10-S D0002 13-S E0022)

回転方向に傾いている。脚下面から体部下部にかけてススが付着。体部外面は暗褐色で紫がかる。胎土は明褐色で砂粒を含む。内面には一部工具痕がみられる。復元口径17.2cm。やや胴が張る2は体部外面肩に意匠のようなヘラ書きがみられる。

vii. 火鉢 (Fig.32-8~13)

瓦質の火鉢は、S E 0022井戸跡、S D 0025溝跡、S D 0001溝跡などから、破片を含めて13点出土した。13は胴部中央がわずかに膨らみ、口縁から体部にかけて6箇所の凹部をもつと考えられる輪花状の器形である。体部口

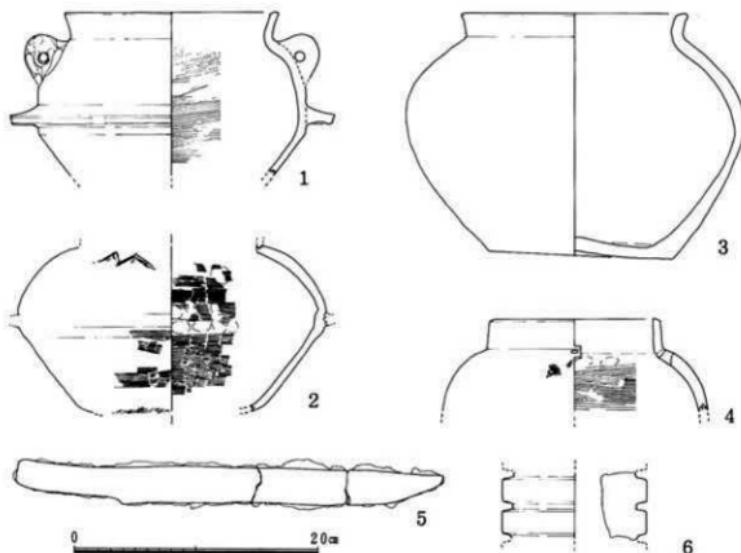


Fig.33 吉野ヶ里遺跡妙法寺跡出土土器とその他の遺物実測図(1)

(1-S D 0003 2-6-S D 0025)

クロナデ、体部内面凸部下には指押さえ痕がある。口縁部にミガキの痕跡がみられる。復元口径は約34cm、器高は11.8cmである。器面はナデで仕上げられているが、凹凸部には縱方向のヘラミガキ、体部外面にはごくわずかな横方向のヘラミガキが残る。輪花は2つ1組で配されるとみられる。胎土は明るい灰白色土で表面には明るい黒灰色の焼しがなされている。表面には黒雲母の微粒が多くみられる。11の輪花の凹凸部は長い棒状のもので外から押さえられたようで、その角度は垂直となっていない。また、窪ませた部分に縱にミガキ痕を残す。胎土は白灰色で褐色の砂粒が多く入る。12は器壁が薄い硬質のもので、凹部の表現がヘラ書きのものである。

9は平面円形とみられる瓦質の火鉢で、菊花文をもつものがS D0028溝跡から出土した。胎土は灰黒色で表面近くは灰白色に焼けている。器壁は黒灰色にいぶされている。内面は斜めに方向の削ったハケ目がつき口縁近くは横ハケ目後ナデ消し。口縁部近くがわずかに肥厚している。他に土師質の火鉢としては16弁の菊花文を配したものや体部内面のみに凸部をもうけている破片等がある。口縁部が内側に曲がるもので連続スタンプ文（溝文、S字文、巴文、格子文）を配したものもある。8は復元口径43.2cm。

②陶磁器

i. 陶器捏鉢 (Fig.32-1)

常滑焼の片口捏鉢である。復元口径は27.9cm、残存器高11.4cm、復元底径15.5cmである。S D0025溝跡とS D0001溝跡の切り合い部とS K0011土壤で出土した破片が接合。体部上半はくすんだ赤色で下部にいくにしたがって明るくなっている。胎土は灰黒色から明赤色である。

ii. 陶器擂鉢 (Fig.32-2)

備前焼の片口擂鉢である。幅1.4cmの擂目が縱方向と横方向に走る。胎土は赤味のある灰黒色で粒石が混じる。

iii. 陶器壺 (Fig.32-3)

耳をもつ壺の底部とおもわれる。底径7.95cm、素地は灰色で釉薬がかかる。

iv. 陶器甕 (Fig.32-4)

大甕の口縁部から肩部にかけての破片で、肩部に耳が付いていたらしい痕跡が残る。復元口径17.6cm。

v. 青白磁合子 (Fig.30-30)

平面八角形になるとみられる合子の身。復元口径3.8cm。釉はやや青みを帯びた白色で、素地は白色でやや灰味がある。

vi. 白磁杯 (Fig.30-31~33)

切り高台の杯(31)の体部は八面の面取りがなされている。釉は黄味を帯びた白色で胎土は明るい褐白色である。高台つきの杯(32・33)の釉は乳白色でやや緑味がある。胎土は灰白色でわずかに黒鐵粉をふくむ。口径10.55cm、底径3.9cm、器高2.8cm。

vii. 白磁皿 (Fig.30-34)

高台つきの皿。釉は乳白色で外面の高台側面までかけられる。胎土は白色でやや黄味がある。見込み部分に沈線を巡らせる。復元口径10.3cm。

viii. 白磁碗 (Fig.30-35)

大きく開く体部に大きな玉縁がつく。体部上位外面に沈線が巡る。復元口径14.4cm。

ix. 青磁碗 (Fig.30-36・37)

丸く立ち上がる体部の先端にわずかに外反する先端の丸い口縁がつき、底部には厚く高い高台がつく。胎は厚く、釉も厚くかけられている。36は見込みに草花文があり、復元口径15cm、底径5.2cm。釉は淡緑色に発色している。37は口径17.4cm、底径6.5cm、高さ7.9cmである。釉は淡緑色に発色している。

③瓦

破片がほとんどであるが、全体の形状が分かるものが数点存在する。

i. 軒丸瓦 (Fig.32-5・6)

(31)は瓦当の内区が左回りの三巴文で、中心には径2.0cmの珠文が入る。巴文の尾部は長くほぼ一周し、まわりには連珠文を配する。瓦当面の復元径は16.1cm。

(15)は瓦当の内区が左回りの巴文で、尾が内区の界線に接している。外区には珠文が配されている。布目痕がみられる。外区内縁は磨耗しており不明である。

ii. 軒平瓦 (Fig.32-7)

均整唐草文で中央筋に木の葉様の文様を配する。外側の唐草文は界線に接している。焼成不良で焼きしまっておらず、焼しがみられないため器面は明黄褐色である。

④その他の遺物

i. 石製品

石鍋小片を20点出土、ほとんどが滑石製である。他に相輪 (Fig.33-6)、石臼片、砥石が出土した。相輪は、宝塔もしくは宝鏡印塔のものとみられる。軽石様の石を使っている。復元最大径11.8cmを測る。

ii. 青銅製品

銅鏡（洪武通寶）がSK0029土壤の上層から出土した。

iii. 鉄製品

小刀 (Fig.33-5)・釘などが出土した。小刀はトレンチ中央部の6トレンチのSD0025溝跡の下層から出土した。全長は35.0cmである。

妙法寺は正嘉年間（1257～1259）頃に創建された尼寺であると伝えられている。鎌倉期に描かれたと伝えられる国指定重要文化財の「東妙寺并妙法寺境内絵図」によって七堂伽藍を備えた寺院であったことが理解できる。絵図では、田手川東の東妙寺が瓦葺きであるのに対して、妙法寺は板葺きで礎石建ちの建物となっている。絵図には妙法寺の北西方に丘のような高まりが表現されていることは、南墳丘墓（仮称）との関連で興味深い。東妙寺と並んで寺勢が盛んだることは、東妙寺文書より窺い知ることができる。

妙法寺は元龜元年（1570）に大友氏の兵火にあい焼失し、知足庵という小堂に本尊だけは祀られていたといふ。東妙寺は弘安年間（1278～1288）の宇多天皇の命により西大寺唯円上人が西下して元軍退散の勅願寺として創建された14世紀初頭には寄進を受け、妙法寺とともに寺領が増大した様子が文書に記されている。室町期14世紀に度々狼藉禁制は直冬の軍が両寺に駐して、その支配が及んでいたことを示している。中央政権の三巴の政治情勢を反映した九州の社会の緊張と多くの論旨・令旨などは権力者の寺に対する意識と寺勢の隆盛を物語っている。この第220調査区では、寺域を区画するとみられる溝跡を検出した。鎌倉期の東西溝と南北溝とそれらを切って直角に曲がる南北朝期の溝跡である。この溝跡では染付磁器が最上層から2点出土したのみで、調査区全域でも染付磁器はわずかに散見される程度であることから、この地域に染付が流入したと考えられる15世紀の前半中頃には寺の衰退があったのかも知れない。周辺の確認調査では中世の溝跡がいくつも確認されていることなどから、寺域の移動も視野に入れた調査が必要である。

遺物としては、博多や草戸千軒など地方の流通拠点以外では出土例の少ない奈良火鉢が出土したことは興味をそそる。これは鎌倉時代の井戸跡や溝跡から出土したものであるが、比較的早い時期に地方の一寺院である妙法寺にもたらされたことは、中央の西大寺系寺院との深い関わりを感じられる。また、寺院跡であることを示す遺物として多数の瓦と石塔の相輪などがある。軒丸瓦の中央に点をもつ巴文様は、大宰府の推定金光寺跡出土のものと似る。瓦は鎌倉期の溝跡からごく少数出土するが、大半が南北朝期・室町期の溝跡から出土したことから、鎌倉期の終わり頃に瓦葺きになった可能性がある。

陶磁器については資料の少ない14世紀の遺物が出土したことに加え、あまり一般的ではない器種が含まれていたことも寺院跡であるということを示すとともに、中央と深い関わりを窺わせている。溝跡から土鍋などの調理具が多く出土したが、寺院の厨房関連の施設の存在を思わせる。絵図の中で食堂が寺域の北西部に存在していることと関連があるものと考えられる。また、戦国期の溝跡は、東に田手川という河川、南には幾重にも溝を巡らせているところなどは、中世においても地形を生かした要害の地としての機能を果たしていたことを窺わせている。

調査区北端に位置する東西方向の溝跡は寺域の北を画する溝であった可能性もある。この東西溝の東への延長線が、現在の東妙寺の寺域の北域と合致していることも興味あることである。第220調査区は調査の直前まで菅まれていた畑作によりかなりの遺構が破壊されているが、周辺の広域的な調査によって、全体の伽藍配置や寺院の変遷、さらには「絵図」と出土遺構との関連などが明らかになるものと考えられる。

V. おわりに

平成元年度から7年度までの7年にわたる調査によって、昭和61年度から63年度にかけての工業団地計画に伴う発掘調査段階で知られていた吉野ヶ里遺跡の全体像がさらに詳しく把握でき、また、発掘調査が至らず内容が不明であった地区的状況が明らかになりつつあることは大きな成果であった。

成果のうち大きなものをあげてみると、南部（田手二本黒木地区K区）の中期始め頃の青銅器鉄造に深い関わりをもつ構造の確認と周辺の竪穴住居跡からの朝鮮系無文土器の発見、北埴丘墓と同様な技術で築造された南埴丘墓（仮称）の確認、工業団地計画に伴う調査で明らかになっていた環壕区画（南北内郭）跡とは別に2重の環壕に囲まれた環壕区画（南北内郭）跡が発見されたことなどである。また、工業団地計画に伴う調査で出土した遺構や遺物、あるいは調査記録類の整理・分析を通して次第に吉野ヶ里遺跡の全貌が明らかになりつつある。また、吉野ヶ里遺跡のみならず周辺で実施された発掘調査の成果などによって、弥生時代における佐賀平野東部地区的地域集落の構造がおぼろげながら見えてきたと言っても過言ではない。

以下、弥生時代の吉野ヶ里遺跡の集落・墓地の変遷や内容について、これまでの調査成果や分析結果を基に述べてみたい。

吉野ヶ里遺跡は、日本初期農耕社会の成立と発展の中で、北部九州の一地域における政治的・社会的・経済的・文化的・宗教的な形成・発展過程を具体的にたどることのできる豊富な情報をもっている。それは、この遺跡が40ha以上におよぶ弥生時代最大の環濠集落であると同時に、弥生時代の全時期を通じて規模を拡大しながら変化・発展していった継続的な集落であるからである。しかも、これら集落と対応して、集落を営んだ人たちを埋葬した埴丘墓や甕棺墓といった墳墓の形式・変化が対応してとらえられるのである。

特に後期阶段になると諸施設を整えて都市的な機能を備えるに至り、地域の政治・経済・宗教的な中核集落となつたと考えられる。発掘された諸施設の構造・配置などは、「魏志倭人伝」に記す「宮室・樓觀・城柵・邸閣」といった施設と符号するところがある。倭人伝に記された国の中で、その中心集落跡が明らかなものは現在調査が進行している長崎県壱岐の原の辻遺跡が唯一であるが、この吉野ヶ里遺跡は倭人伝が記す内容、ひいては当時の「国」の中心の様相を具体的に示しているということができる。

1. 吉野ヶ里弥生集落の変遷

吉野ヶ里遺跡の弥生時代集落の変遷については、段丘南部に存在する前期や中期の集落跡や墓地跡の調査が進展していない現状の中で、以下のように考えられる。

(1) 弥生時代前期（前4～2世紀）

弥生時代としての土地利用は、弥生時代前期初頭に始まる。段丘の斜面や裾部などに少 数の竪穴住居と貯蔵穴、周囲の墳墓によって構成された小集落が形成される。吉野ヶ里遺跡の周辺の低地の微高地上には、神埼町馬都や神崎ヶ里、三田川町田手一本杉遺跡など縄文時代晩期の集落跡が存在しており、これらの集落と関係をもつて吉野ヶ里遺跡の初期集落が成立したと考えられる。

間もなくして段丘南部（田手二本黒木地区II区、吉野ヶ里丘陵地区VII区）の尾根上に、環濠を有する広さ約3haの拠点的な集落が成立する。この集落が形成されたところは吉野ヶ里段丘の中で最も段丘の幅が広い場所であり、段丘上で基も良好な集落立地条件を備えた場所といえる。この集落内部及び周辺の状況は未調査のため不明

な点が多いが、竪穴住居と貯蔵穴などから構成された吉野ヶ里の中心集落と考えている。この環壕跡は、前期末頃までは機能を維持していた。環壕内から発見された輪の羽口や取り瓶らしい土製品などは、前期の段階ですでに青銅器の鋳造が始まっていた可能性を示している。

広域的に見ると、小規模な集落とともに中原町町南遺跡や東脇振村松原遺跡などの小規模環壕集落が営まれるが、これらと有機的な結びつきをもった地域社会が形成されていったものと考えられる。約3haという規模の大さきや、集落群の密度から考えられる集住の度合いなどから、吉野ヶ里集落が地域の中核的集落へと発展する傾向を強めていったものと考えられる。

(2)弥生時代前期～中期前葉（前2・1世紀）

各地区に小集落が存在するという前期の状況は、この時期まで継続するが、集落内の竪穴住居数が増加する地区（吉野ヶ里丘陵地区VI区）や、新たに集落を形成する地区（志波屋四の坪地区の段丘上など）もあらわれ、遺跡のほぼ全域にわたって集落が形成される。段丘尾根の各所で成人用壺棺墓を主体とする墓地が営まれるが、中には比較的規模の大きい墓地も形成される。段丘南部の前期の環壕は前期のうちに機能を失ったが、多量の土器の散布状況やこの地区的南部で発掘された銅劍・銅矛・鉄型や関連の遺構などは、この時期も依然としてこの地区に集落拠点が存在していたことを示している。さらにこの集落拠点内部（田手二本黒木地区III区）には青銅器工房が設けられ、細形銅劍や細型銅矛などの青銅製武器の鋳造は遅くともこの時期には開始されていた。

この環壕集落周辺は中期までの間、吉野ヶ里集落のなかの拠点集落が継続的に営まれたところであるが、後に北内郭が営まれる地区（吉野ヶ里丘陵地区VII区）でもこの時期にまとまりのある集落が形成される。この地区的集落だけは、弥生時代の終わり、さらには古墳時代初頭まで継続する。

また、この時期には段丘尾根の各所で、成人用壺棺墓を主体とする墓地が営まれるようになり、中には吉野ヶ里地区II区や吉野ヶ里丘陵地区VII区の墓地のように、比較的規模の大きい墓地も形成されている。

(3)弥生時代中期前半（前1世紀）

この時期の集落は、条塹（環壕になる可能性もある）によって北部を区切られた段丘南端部（吉野ヶ里丘陵地区VII区・田手二本黒木地区II・III区・田手一本黒木地区I区）に存在すると考えられるが、田手二本黒木地区III区で多数の貯蔵穴跡群が発掘したのみで、集落の内容については調査が及んでいない。

後に北内郭が営まれる地区（吉野ヶ里丘陵地区VII区）やその周辺（吉野ヶ里丘陵地区V区・吉野ヶ里丘陵地区I区）では竪穴住居跡が比較的集中して発掘されており、この場所と段丘南部の2箇所に人々が集住していたものと考えられる。しかし、空間の広がりや出土遺物の量などから、段丘南部が中核的な集落であったものと考えられる。しかし、後に北内郭が営まれる地区については、次の時期以降の祭祀的な文物の出土や、後期に環壕によって閉鎖的な空間が形成される点、前時期から古墳時代まで継続する点などから、特殊性をもつた集落であった可能性が高い。

この時期、吉野ヶ里集落の構造と形成秩序を知る上で重要な要素と考えられる事象が現れる。北塙丘墓・南塙丘墓（仮称）と長大な壺棺墓の列埋葬の形成である。

北塙丘墓は、後の環壕集落内部の段丘最高所（吉野ヶ里丘陵地区V区）に築造されており、長径40mという塙丘規模は墓の造営において共同体員間に顕著な差異が生じていたことを示している。北塙丘墓から発掘された14基の埋葬はすべて成人で、他の塙丘墓とは違って小兒墓を含まず親族墓ではなく、特定の身分の歴代の塙墓群といえる。この時期の塙丘墓の壺棺は1基であるが、銅劍が副葬されていた。次の時期を含めた壺棺墓から出土し

た銅劍やガラス製管玉などと合わせ考えると、集落構成員の中から首長ないし祭事権者といった身分的に突出した人々が出現したことを如実に示しているとみることができる。

南部段丘上（田手一本黒木地区Ⅰ区）においても埴丘状の盛土遺構（仮称南埴丘墓）が築かれるが、現在までに10%にも満たない範囲が発掘された状況であるが斐棺等の発見もなく積極的に埋葬施設と規定する根拠は見当たらない。南埴丘墓（仮称）は、北埴丘墓の南約700mの位置の南北を意識した線上（真北に対し6°東に振れる）に存在し、段丘最高所に築かれた北埴丘墓をコントロールポイントとし太陽運行の南北中点方向にあることなどを考え合わせると、祭殿など祭祀行為に関わる施設であった可能性もある。

また、この時期には、段丘の尾根筋に沿って長大な斐棺墓等の大規模な列状埋葬が開始される（志波屋四の坪地区、吉野ケ里丘陵地区Ⅵ区、吉野ケ里丘陵地区Ⅶ区～同Ⅱ区～同Ⅲ区、吉野ケ里地区Ⅱ区～Ⅲ区）。志波屋四の坪地区段丘上から現在の日吉神社の南に接した吉野ケ里丘陵地区Ⅰ区にかけての墓列は長さ600mに及ぶ。これらの長大な斐棺墓列は中央に墓道らしい空白地を設け、その両側に斐棺を整然と埋置しており、つよい社会規制が窺える。ただし、一般的墓地の中にも、周囲の斐棺墓群より際立ったものも存在し、各集団の中にも他の人々からやや突出した個人、あるいは集団が生まれていたことを示している。

以上のように、この時期吉野ケ里集落は、北埴丘墓と南埴丘墓（仮称）の成立により大きな変換点を迎えたといえる。それは単なる段丘上の中央核的集落としての性格から、両埴丘墓に象徴される祭祀空間としての性格を備えた集落への変化であり、そして両埴丘墓を結ぶ空間が後の環濠集落形成の計画空間となっていたものと考えられる。

（4）弥生時代中期中頃～中期後半（前1～後1世紀）

南部（吉野ケ里丘陵地区VIII区）の段丘の北部を南北に区切る条堤はこの時期も継続し、住居群はその南に集中して存在するものとみられ、この時期も段丘南部の最も段丘幅の広い地域が居住の中心域であったと考えられる。この時期の終わり頃から後期初頭にかけて、後に南内郭が営まれる地域（吉野ケ里地区Ⅵ区、吉野ケ里丘陵地区Ⅲ区）において竪穴住居が増加する。一方、集落の倉は、中期前半までが主に貯蔵穴であったのに対し、この時期以降は掘立柱形式の高床式となっており、特に段丘南部の西側段丘裾部（田手二本黒木地区Ⅰ区、田手一本黒木地区Ⅲ区）に多く営まれる。

この時期の墓地もそれぞれ中期前半の墓域を踏襲するが、新たな墓域を形成するところもある。依然として斐棺墓を主体とするものであるが、土壙墓（一部木棺墓を含む）も数が増加する。また、この時期の墓地の中にも一般とは周囲の斐棺墓群より際立った墳墓や墳墓群が存在する。埴丘墓に対する埋葬もこの期まで継続されるが、斐棺は13基あり、7本の銅劍やガラス管玉などが副葬されていた。北埴丘墓には塚を渡る墓道と祭祀施設が設けられ、埴丘墓に対する祭祀が開始される。これらに用いられた多数の土器を主体とした祭祀用具は北埴丘墓の東に位置する大型土壙に廻棄されている。この北埴丘墓の墓前・周辺でおこなわれた祭祀は、出土土器の量の膨大で広域な地域性を窺わせる大規模なものであり、吉野ケ里集落が統合的な祭祀の場としての性格を強めていったことを窺わせる。

また、この時期の終わり頃には、埴丘墓を北辺に取り込んで、大規模で各所に出入口を有する外環濠の造営が開始される。外環濠は北埴丘墓と南埴丘墓（仮称）をそれぞれ北端と南端に取り込んで造営されており、南北約1kmの環濠集落の形成は、地形に大きく扱っているとはいえ、この両埴丘墓を結ぶ空間が環濠集落構成の計画空間となっていると捉えられる。

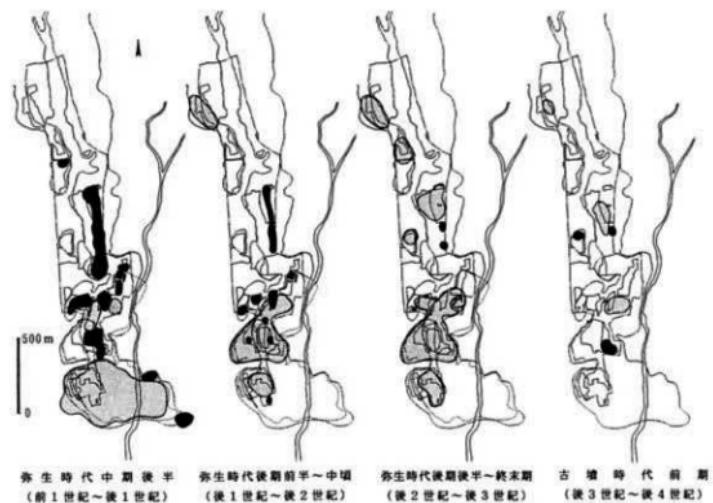
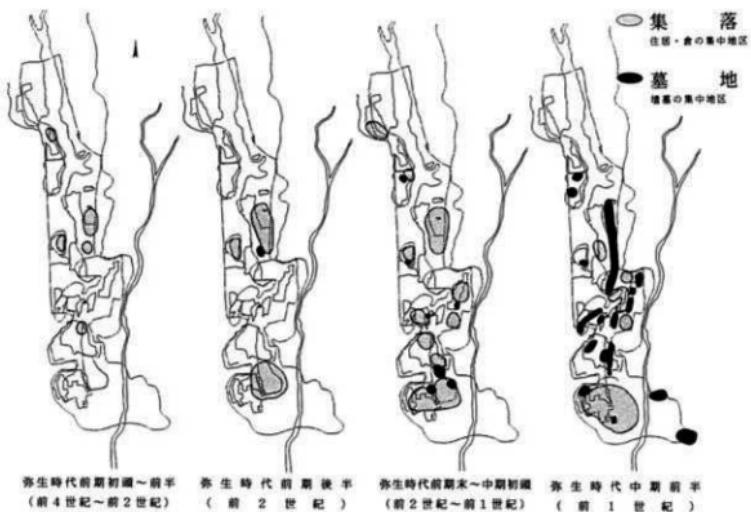


Fig.34 吉野ヶ里遺跡弥生時代の集落・墓地変遷概要図

(5) 弥生時代後期前半～中頃（後1・2世紀）

この時期の初めに外環塙は全域が完成するが、この外郭線によって囲まれた範囲は約40ha以上と広大である。この時期の最も大きな変化は、集落の拠点が段丘南部から段丘中央部に移動し、この時期の終わり頃に、外環塙によって囲まれた中央部の段丘上に集落拠点が南部から移動してくることである。また、この時期までには南内郭の北東方約150mの位置（吉野ヶ里丘陵地区VII区）に何らか区画が設けられる。後の北内郭の初現的なものと考えられる。

南内郭の内塙には平面円形の突出部が設けられ、その内側に物見櫓と考えられる大型の掘立柱建物が配置されている。こうした突出部をもつ弥生時代の環塙集落（環塙区画）は神埼郡東脅振村松原遺跡や神埼町迎田遺跡、佐賀郡大和町惣座遺跡など有明海沿岸佐賀平野から筑後川沿岸地域の中核集落の標準的な構造となっている。ただし、この突出部に伴って物見櫓跡が確認されたのは吉野ヶ里遺跡が唯一である。福岡県八女市深田遺跡など直線的な環塙に突出部をもつ、あるいは群馬県三ツ寺1遺跡など環塙内側の空間に突出部をもつ古墳時代のいわゆる豪族居館跡は、佐賀平野を中心とした弥生時代後期の突出部をもつ環塙集落をモデルにした可能性がつよく、さらにこのような構造は、中国漢時代前後の城郭都市の城壁に作る馬面や角楼、甕城といった防護施設からの影響が考えられる。

竪穴住居跡群は、南内郭周辺に集中して営まれる傾向が認められる。内塙内には物見櫓や特別区画の中の竪穴住居（後に掘立柱建物となる）等の特異な施設が設けられる。竪穴住居は内郭内だけではなく、内塙と外環塙との間一帯にも営まれる。南内郭内部および周辺から竪穴住居が集中して発掘されていることや、出土遺物の内容や量などから居住域であったことは間違いないと考えられるが、前時期から継続している段丘南部の集落に居住する人々との間には格差（階層差）が存在したことが考えられる。

このことは、北埴丘墓と南埴丘墓（仮称）をそれぞれ北端と南端域に置く吉野ヶ里環塙集落の中で、北がより地位が高く、神聖な場所として意識されるようになったことの現れとも推測され、「南北」がつよく意識された集落構造が感じられる。

この時期までは内郭周辺で青銅器が製造されており、また一帯から100点以上の鉄器を出土（後期終末期までを含む数）したことは、他の集落との格差を示すとともに、鉄器生産をも包括する集落であった可能性を示している。倉は、外環塙の外側（吉野ヶ里地区VII区西部）に集中して営まれるが、大型のものが多い。同時に10数棟の高床倉庫が建ち、集中管理されていたものと考えられる。一方、環塙集落の外にも北方などの段丘各区に分散的に集落が存在するが、これらは周辺広範囲に存在した同時期の集落を含め、拠点に対応する衛星的な集落と考えられる。

中期後半に引き続き、北埴丘墓の祭祀はこの時期も継続している。また、墓地においては、變棺墓も営まれるが、前時期からの土壙墓がさらに盛行し後半頃には土壙墓が墓地の主体となる。しかし、この時期のうちに埴墓の数は激減したものと考えられ、後期後半の確実な埴墓は見当たらない。

(6) 弥生時代後期後半～終末期（後2・3世紀）

南内郭跡では、内塙が前時期の内塙よりやや規模を拡大して掘り直され、物見櫓を配置した新環塙区画が営まれる。長方形に近いが湾曲して不整形な平面形をなす前時期の南内郭に較べ、この時期の内郭は長形に近づいた平面形をとり、集落の体裁を整えたものとみられる。物見櫓跡と考えられるものは、内塙の東側で2箇所、北および西側でそれぞれ1箇所の計4箇所確認されている。また、この時期までには南内郭の北東方に約150mの間隔

をもって、内堀と中堀の二重の環濠によって区画され、物見櫓をともなう北内郭が設けられる。平面A字形の対称形をもつなど極めて企画的に營まれた区画であると考えられる。南西部に配置された鍵形の出入口は弥生時代としては特異な存在であり、環濠突出部とともに中國漢時代前後の城壁構造の影響を認めることができる。

北内郭内部には1辺約12.5mの祭殿と考えられる大型高床建物をはじめとする掘立柱建物群を設けており、区画の北外側には倉庫と考えられる小規模な建物群を配置している。

南内郭周辺では、後期中頃までは内郭の内外に住居が營まれていたが、この時期の住居は内郭の内側と北内郭との間を除いて營めなくなる。内郭内の人々と周辺の人々との間の階層差が明確なことを示している。このことと対応するかのように、環濠集落北端から北西約400mの段丘上（志波屋四の坪地区段丘上）に新たな集落が形成される。環濠こそないが、竪穴住居の規模は大きく、鉄器や漢式鏡片をもつものもある。

この時期の集落構造で注目すべきは、北埴丘墓と南埴丘墓（仮称）が造営されたとき意識されたと思われる南北の軸線が、この時期にも引き継がれ、北内郭の造営やその位置に深く関わっていると考えられる点である。北内郭内部の大型掘立柱建物の南北中軸は、この南北軸線に沿って設定されているとみられる。北埴丘墓の南前面で発掘された立柱や拌殿（祠堂）とおぼしき1間×2間の小規模掘立柱建物跡も、この南北軸線上に存在している。北内郭が段丘の尾根ではなく、わざわざ東側の斜面にかかる場所に寄せて營めていることも、この軸線がつよく意識されていたことを示していると考えることができる。

銅戈や祭祀専用土器群などの出土遺物からも推定できるが、北内郭は南内郭に比べ、より祭祀的な場としての性格がつよく、よりつよく神聖なる場所として意識されていたと考えられ、環濠集落を形成する要素としては機能差があったと推察できる。北内郭は「国」の統治機構を担う首長あるいは祭事権者、南内郭は「国」の統治機構を補佐する一般構成員の上に立つ上層階級の人々の居住区とみなすことができる。

南と北のこうした配置関係は、中国後漢代の都城にもみられるものであり、また大阪府池上曾根遺跡の大型建物遺構にも南北方位が認められることが指摘されている。弥生時代後半期の集落形成、それも地域的政治社会の中核的集落形成と構成にあたっては、南北方位が一つの原理として用いられるようになったことも想像される。世界の歴史的・民俗的事例が示すように、集落形成にあたって、居住する場所の自然的条件だけではなく、そこに暮らす人々の社会観や世界観が集落構造に具体的に反映されることは広くみられる。また、特に祭祀にかかわる施設の設置にあたって、太陽や月の動きなど天体の動きを基準とし、これを「聖なる基準線」とすることも、多くの事例が示している。

吉野ケ里集落の集落構造の上にも当時の人々の社会観や世界観の反映があり、それはこれまで述べたような南北方位を基本とするものであったと考えられる。

(7) 古墳時代初頭（後3～4世紀）

弥生時代の大規模な外環濠や南北内郭の環濠が埋没した後、古墳時代になると段丘の各所で数軒の竪穴住居が營まれ続けるものの、弥生時代の大きな集落は姿を消してしまう。ただし、北内郭区域には大型の住居を含む集落が存続する。また、この時期初めには南内郭区域南東部（吉野ケ里丘陵地区III区）で前方後方形埴墓や方形周溝墓が、北方の段丘尾根（志波屋四の坪地区・志波屋三四の坪乙地区）などで円形周溝墓が築造される。

2. 弥生時代後期の吉野ケ里集落

弥生時代の吉野ケ里集落の中で、最も調査が進み、内容が明らかになりつつある後期後半から終末期の状況は、

現状では以下のように考える。

(1) 大規模環壕（外環壕）と内郭の形成

吉野ケ里遺跡の後期の集落跡は、段丘の裾部を巡る大規模な外環壕によって区画された内部にその主体が存在する。外環壕の断面形態は底を直に掘り込んだV字形をなす。外環壕内の堆積土層は地山のローム土が地形的に低い場所から堆積しているので、場所の外側に土塁が存在していたものと考える。この外環壕では現在までに5ヶ所で出入り口跡を確認しているが、これらは同時に利用されたものと考える。南内郭西側部分では、塹を渡って集落内部に入る通路の両側に門柱跡と考えられる柱穴がそれぞれ3個存在する。外環壕は遺跡の南端から北墳丘墓の北側まで一連のものとして存在するものと考えられる。すべての期間において完全に管理・維持されたかどうかが不明であるが、環壕に伴う土塁や柵（城柵）は維持された可能性がつよい。

竪穴住居は、後期初頭までは地区全体の段丘尾根から段丘裾部にかけて少數が営まれているが、後期前半から中頃になって南内郭と北内郭が設けられてからは、それぞれの内郭一帯を中心にして数多く営まれるようになる。弥生時代後期前半～中頃になると、後期前半までに完成された外環壕の内部の中央部の段丘上に、南部にあった集落拠点が移動し、また、中期以降継続していた南内郭の北東約150mの位置にも内塹による内郭が形成される。竪穴住居群は、直後に南内郭が営まれる一帯に集中して営まれる傾向が認められるが、南内郭周辺では内塹内はもちろん、内塹と中塹との間、中塹と外環壕との間にも営まれている。

弥生時代後期後半～終末期になると南内郭はやや区域を拡大する。住居は後期中頃までは内塹の内外に営まれていたが、南内郭の内側と北内郭との間などを除いて営まれなくなり、内郭内に住む人々が周辺の人々から隔離されるようになる。

(2) 南内郭

南内郭一帯では、弥生時代の遺構として、竪穴住居跡93基、掘立柱建物跡39基などが発掘されている。掘立柱建物跡は後期前半以降のものが大半を占めるが、竪穴住居跡のうち後期前半のものが40基、後期後半から終末期のものが13基である。

後期の新田の内塹、その他の塹の断面はいずれも底が平たい逆台形となっており、塹内の堆積土層から、特に内塹では外側に土塁を設けていたことが判明した。後期中頃までに設けられた内塹は南北約150m、東西約70mの範囲、後期後半から終末期の内塹は南北約150m、東西約90mの範囲を巡る。環境内の面積は、それぞれ7800m²と11000m²である。長方形に近い湾曲して不整形な平面形に巡る古内塹に較べ、新内塹は長方形に近づいた平面形に巡り、規模を拡大して掘り直される。

古環壕には西側南寄りの位置に平面半円形の突出部が1ヶ所みられ、新環壕には東側の入口の両側に2ヶ所、北側に1ヶ所、西側に1ヶ所の計4ヶ所で環壕突出部が見られ、その内側に物見櫓を設けるなど、集落の体裁が整ったようである。古段階の環壕区画は外環壕との間に中塹をもつ二重の区画であった可能性がつよい。内塹の出入り口は東側の南寄りの部分に設けられ、掘り残しの陸橋となっている。古内塹には1ヶ所（埋め戻しの陸橋であったため調査時点では把握できなかったが、環壕内土器の出土数がわずかであったため、2ヶ所に陸橋があった可能性もある）、新内塹には2ヶ所設けられている。

環壕区画の内部には、竪穴住居跡のほか、物見櫓や特別区画の竪穴住居（後に掘立柱建物となる）等の特異な施設が設けられる。区画外の外環壕外側には高床倉庫と考えられる大型の建物跡が存在する。後期前半から終末期にかけてのものが60基は存在しているものと考えられ、同時に十数棟の高床倉庫が建ち並び、物資が集中管理

されていたものと考えられる。この地区については将来全城の詳しい確認調査を実施し、掘立柱建物跡群の内容を明らかにする必要がある。

また、外環境外郭線上（中心部南東方・吉野ケ里丘陵地区VII区東斜面）には逆茂木状の防備施設を伴う突出部が現れ、さらにこの突出部と内塙との間の吉野ケ里丘陵地区III区南東部には出入り口と考えられる開口部をもつ条塙が設けられる。この条塙は南側（湾曲する内側）に土壘の痕跡があり、南内郭の空間を守るために防御ラインと考えられる。これらのことから、この突出部が大環塙内の集落へ至る主要な入口の一つではないかと考えられる。環塙から出土した土器から、古内塙は後期後半に、新内塙は終末期（庄内式期）のうちに埋没したものと考えられる。

(3) 北内郭

北内郭跡一帯では、弥生時代の遺構として、竪穴住居跡約75基、掘立柱建物跡25基以上などが発掘されている。掘立柱建物跡は後期以降のものが大半を占めると考えられるが、竪穴住居跡は後期前半のもの数基、後期後半から終末期及び古墳時代初頭のもの30数基である。南内郭と違って、古墳時代初頭まで集落が継続している。この地区は中期初頭前後から集落が営まれ、古墳時代初頭に至るまで集落が継続して営まれるという極めて特異な区域である。

この地区の西側（吉野ケ里丘陵地区III区）や北側（吉野ケ里丘陵地区VI区）には接近した位置で前期末から後期初頭の斐棺墓を主体とした墓地が営まれているが、この墓域内へ集落域が入り込んでいないことや、集落内から中期以降の祭祀用土器群を多く出土することも注目される。

新段階の北内郭は頂点が丸い平面A字形をなす2条の塙によって囲まれているが、中塙は当初南西側へ大きく掘られていたものを、小規模に掘り変えられている。この中塙の基部の両端にも平面方形の突出部が設けられている。塙の断面形態はいずれも底が平たい逆台形となっており、塙内の堆積土層から、塙の外側に土壘を設けていたことが確認された。A字の頂点にあたる南西部には中塙・内塙ともに掘り残しの陸橋の出入り口が設けられているが、両者の位置は内部に向かって一直線上ではなくずらされており、柵列によって囲まれた鍵形に折れ曲がって入るという弥生時代の出入り口施設としては特異な構造である。

内塙・中塙で区画された内部には、竪穴住居跡や、物見櫓と考えられるものを含む掘立柱建物跡、土壙などがあり、区画外には竪穴住居や高床倉庫と考えられるものを主体とする掘立柱建物跡などが存在が、環塙が存在していた期間に共生するものは非常に少ないと考える。北内郭内部の空間の中央南寄りに大型の棟風の掘立柱の高床建物跡が存在する。規模・構造的に群を抜く巨大建物跡であり、これまでの吉野ケ里遺跡で検出した建物跡の中では最も大規模である。

後期後半に営まれた内塙と中塙は終末期に埋没したものと考えられる。なお、古段階内塙の突出部の東の底面に近い位置から、中広形銅戈（銅戈形祭器）が1点水平に置かれた状態で出土したが、新内郭造営時の旧塙埋め戻しの際に地鎮具として埋置されたものと考えられる。

(4) 環塙外側の集落

後期になると、環塙集落の外側周辺にも南内郭の北方約1.5kmの段丘上や他の段丘各地にも分散的に集落が形成されるが、これらは集落構造や出土品などからも環塙区域内の集落とは格差が認められ、段丘周辺の低地にみられる同時期の遺跡を含め、提点に対応する衛星的な集落であると考えられる。後期後半になると、内郭周囲の

住居が消滅することと対応するかのように、南内郭の北方約800mの志波屋四の坪地区の段丘上に新たな集落が形成される。環壕こそもたない集落であるが、鉄器や漢式鏡片をもつものもあり、周辺の他のこの時期の集落とは際立たぬ違いをみせている。また、内郭外に位置する外環壕で囲まれた内部の集落については未調査のため不明な点が多いが部分的な調査によれば、2~4棟の竪穴住居に高床倉庫が1棟でまとまりを形成するものと推測される。

3. 吉野ケ里遺跡の性格と意義

吉野ケ里遺跡周辺および全国の弥生時代集落との比較を通じて吉野ケ里遺跡の性格や意義を把握する。

全国の弥生時代集落跡を概観すれば、各集落跡間では有機的なネットワークが地域内で形成されており、また、それぞれの地域同士が政治的・経済的に結びついて日本の弥生社会を形づけている。地域ネットワーク内の個々の集落では、立地や集落規模、集落構造、集落の継続性、集落内での手工業生産の有無やその規模、出土品の質や量の違い、その他の事柄などから集落間格差が認められる。このような格差を検証することによって、吉野ケ里集落の特色や地域社会の中における存在意義が理解できると考えられる。

吉野ケ里遺跡が存在する佐賀平野東部は、脊振山麓部やそこから派生した段丘群、段丘に挟まれた谷底平野、さらには有明海に開けた肥沃な三角洲平野に多くの弥生時代の遺跡が分布している。これらの遺跡の分布状況を概観すると、西の佐賀市・郡との間に南北に長い遺跡の分布が希薄な地域が存在し、東の三養基郡（西から律令時代の三根郡・養父郡・基肄郡）との間に分布が希薄な部分ではなく、さらに東の鳥栖市との間にそれが存在している。「肥前國風土記」には奈良時代初期に三根郡は神埼郡から分かれた郡であるとあり、弥生時代において律令時代の神埼・三根両郡の範囲（現在の神埼郡と三養基郡西部の上峰町・三根町、佐賀市蓮池町周辺、佐賀郡諸富町一帯）で政治的・経済的・文化的な一つのまとまり（「国」）が存在していたものと考える。

吉野ケ里遺跡は、肥沃な平野を背景に、弥生時代前期から地域の社会的主導権をもち、弥生時代中期において地域（「国」）の中核集落となり、弥生時代後期になって地域の中核の大規模集落として完備された集落であると位置づけられる。集落の規模や構造、施設や出土品の内容などから、弥生時代後期の吉野ケ里遺跡は佐賀平野東部の中では際立った集落であり、集住性や防護施設の存在、祭祀の場の存在、手工業生産の存在などの都市的な要素も多く内包している。

周辺の集落分布をみると、特に後期後半から終末期において、吉野ケ里集落から半径2kmの範囲に可能性が濃いものを含めると4ヶ所の、半径4kmの範囲にはさらには2ヶ所の環濠集落が存在し、戦略的視点からみると、陸路と海からの河川交通の要衝をおさえ吉野ケ里集落を防衛するという、理にかなった分布（配置）と考えられる。周辺に存在が想起されるいわゆる高地性集落の確認は今後の課題である。

地域集落群を構成する集落の規模や構造の違いについては、純農村的な小規模集落跡から中・大規模な集落跡というような規模や環境の有無などの格差が存在している。集落立地については、吉野ケ里遺跡の場合、段丘の幅が広く（南部で約500m~700m）、周囲に段丘崖が発達しており防護的な意味合いのつよい立地と考えられる。また、段丘の東裾部に田手川、西裾部に貝川、さらに西方に三本松川などの河川の存在は、物資の大量輸送の観点からも優位な立地と考えられる。

弥生時代の集落跡には一時的なもの、断続的なもの、継続的なものの三者がある。吉野ケ里遺跡は弥生時代全時期をわたって継続するが、佐賀平野全体をみても長期継続型の集落は佐賀郡大和町惣座遺跡や鳥栖市袖北遺跡群、小城郡三日月町土生遺跡などの中核的集落に限られる。周辺の弥生時代墓地を概観しても、東脊振村三津

永田遺跡や、三養基郡上峰町と東脊振村にまたがる二塚山遺跡など多数の漢式鏡や大陸製鉄製武器などの副葬品をもつ墓地は長期継続の墓地である。他の環壕集落は、断続的あるいは一時的に存在したものであり、吉野ヶ里遺跡とは性格を異にしている。この点からも、吉野ヶ里集落がかなり広範囲な地域の中において、長期間にわたって勢力をもち続けた集落であったと言うことができる。全国的にも中核集落として著名な奈良県唐古・鍵遺跡や平等坊・岩室遺跡、長崎県原の辻遺跡、福岡県比恵・那珂遺跡なども、前期から後期の長期間にわたって營まれた継続型集落である。

弥生時代の集落内の手工業生産については、青銅器・ガラス製品・織物・石製品・木製品・鉄製品などなど様々なものと考えられるが、佐賀平野において特徴的なものは青銅器の生産である。吉野ヶ里遺跡では中期初頭から後期初頭までの剣や矛、巴形銅器などの石製鋳型がこれまでに7点出土している。この中には最古式の細形形式のものも含まれており、佐賀平野での青銅器生産の先進性を如実に物語った。また、前期の環壕下層から出土した取瓶や櫛羽口らしい土製品は、さらに古い時期での生産の可能性を示している。吉野ヶ里集落では青銅器のほかに鉄器の加工やガラス製品・絹布や大麻布の生産の可能性もある。吉野ヶ里遺跡はじめ唐古・鍵遺跡、大阪府の池上・曾根遺跡や鬼鹿川遺跡・東奈良遺跡、兵庫県田能遺跡、福岡県須須遺跡群など地域の拠点・中核的集落では青銅器を主体とする金属器製造などの手工業生産がなされ、集落発展の経済的基盤になったと考えられる。地域集落群の個々の集落から出土する遺物の量や質についても格差が窺える。大規模かつ中核的な集落跡からは、大量の弥生土器をはじめとする様々な遺物が出土するが、環壕が無く小規模になるに従って鉄器の出土数が減少する傾向がある。吉野ヶ里集落内部でも、後期の場合、南北両内郭跡周辺と他の集落跡とでは出土品についての量・質の違いが顕著であった。北部九州や近畿地方の環壕集落などの中核集落と環壕をもたない一般的の集落とは、青銅器（鋳型も含む）や鉄器その他の貴重な文物の出土の有無、あるいは出土数の多少によって格差が窺える。ちなみに弥生時代後期の吉野ヶ里集落の南北両内郭周辺では、農具・工具・武器など多種にわたる鉄器が多く出土したが、南内郭跡に比べ北内郭跡では数的に工具の占める割合が高かった。

これまでの調査や分析成果をもとに、吉野ヶ里遺跡の集落形成についての考えを述べたが、以上のことをまとめるに吉野ヶ里集落は次のような特質をもつ集落であったと指摘することが可能である。

- ・弥生時代前期前半から後期終末期にいたるまで、南部（田手二本木地区II区・吉野ヶ里丘陵地区VII区）の前期の環壕集落を中心に規模を拡大しながら変化・発展していった長期継続集落である。
- ・弥生時代後期の環壕集落の規模は40haと佐賀平野のみならず、全国的にみてもしばしば抜けていた規模をもつ集落であった。
- ・弥生時代の生産利器として極めて貴重な鉄器が環壕集落跡中心部を中心として多種・多様にわたり出土している。鉄器と並び、祭りの道具や墓地への副葬品として貴重な地位をもつ青銅器の鋳型が多く発見されており、少なくとも中期初頭から一貫して青銅器生産がおこなわれていたと考えられる。このほかにもガラス製品・絹織物などの手工業生産品が出土している以外にも、南海産貝製腕輪など広く交易がおこなわれていたと推定できる遺物も多数出土している。
- ・一般の埋葬形態とは際立った違いをみせる埴丘墓が中期前半に築造され、これに対する祭祀が後期に至るまで継続されている。さらに後期後半には北埴丘墓の南前方に祭殿を思わせる大型掘立柱建物を内部に置く特殊区画（北内郭）が成立するなど、周辺の集落にはみられない大規模で特殊な祭祀的施設が存在する。
- ・これらの特質は、まさに弥生時代の中核的大規模集落の特性そのものである。

- ・また周辺集落の状況をみると、吉野ケ里遺跡が中核的大規模集落としての形態を整える弥生時代後期には、吉野ケ里の周辺で交通や軍事的に要衝と思われる場所に環壕集落が立地し、さらにその周辺には環壕をもたない一般集落が分布する様子を窺うことができる。
- ・こうした集落の在り方から、弥生時代後期の佐賀平野東部では、集落間の階層化が進行し、各階層の集落が有機的に結びつきながら、ピラミッド的な地域的社会（「国」）を構成していたと考えることができる。
- ・吉野ケ里遺跡は、その頂点に位置する集落跡であり、その成立の背景には、佐賀平野の高い農業生産力と、出土遺物にみられる鉄器、青銅器、組織物などの手工業生産や他地域との交易等の活発な経済活動、それに埴丘墓祭祀等に代表される独自の祭祀的世界観によって形成されていった部（種）族社会の成熟があったと推察できる。

いずれにせよ、未調査地区である段丘南部や段丘西の水田地帯の発掘調査さらには広域的な調査をおこない、既調査遺跡の再評価などと合わせ、吉野ケ里遺跡のもつ内容の把握に努めなければならない。

なお、本文は、国営吉野ケ里歴史公園整備計画策定のために、建設省九州地方建設局国営吉野ケ里歴史公園工事事務所が開催している「国営吉野ケ里歴史公園建物等復元検討委員会（工藤圭一委員長）」や佐賀県教育委員会が開催している「吉野ケ里遺跡建物等復元研究会」の委員の中特に工藤圭一（沼津工業高等専門学校長）、大塚和義（国立民族学博物館第1研究部教授）小田富士雄（福岡大学人文学部教授）、金園忠（天理大学文学部教授）、小林達雄（國學院大學教授）、小泉和子（生活史研究所代表）、高倉洋彰（西南学院大学文学部教授）、田中淡（京都大学人文科学研究所教授）、西谷正（九州大学文学部教授）、宮本長二郎（東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター長）、村武精一（共立女子大学文学部教授）などの諸先生や、カ歴史環境計画研究所の秋山邦雄、小山久美子両氏からの教示や討論、また調査員諸氏との議論の成果に期するところが大きい。国営吉野ケ里歴史公園建物等復元の検討結果については、建設省九州地方建設局国営吉野ケ里歴史公園工事事務所から『国営吉野ケ里歴史公園建物等復元検討調査報告書』として、平成8年3月に刊行されている。



吉野ヶ里道路全景（仮復元状況、西上空から）



1



2

1. 青銅器鋳造関連遺構全景（第154調査区 S K104土壤、北から）

2. 青銅器鋳造関連遺構全景（第154調査区 S K104土壤、南から）



1



2

1. 南埴丘墓跡（假称）全景〈北から〉

2. 南埴丘墓跡（假称）全景〈上が南〉



1



2

1. 盛上の状況（第148調査区、南東から）
2. 土堆墓状遺構（第149調査区、西から）



1



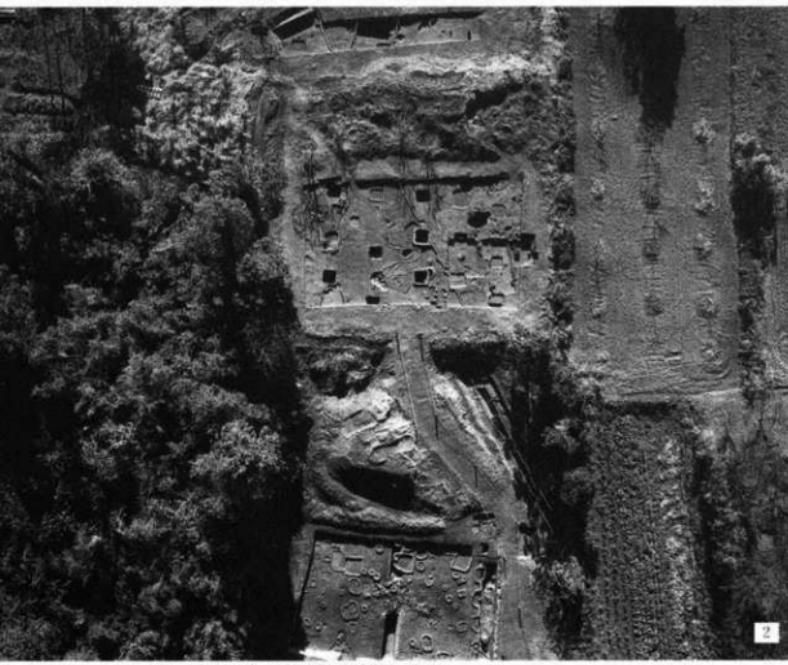
2

1. 第169調査区(全般) (豪棺墓群、南から)

2. 第169調査区(全般) (豪棺墓群、上から)



1



2

1. 第191調査区(全景)〈前期環境と甕棺墓群、北から〉

2. 第189調査区—第192調査区(全景)〈北から〉



1. 第188調査区全景（谷跡など、南から）
2. 第187調査区全景（塙跡など、上が西）



1



2

1. 第185-186調査区全景〈南から〉

2. 第185-186調査区全景〈上が北〉



1. 北塙丘墓南西の外縁出入口跡全景（第211調査区、南から）
2. 南部の外縁出入口全景（第221調査区、上が西）



1



2

1. 北塙丘墓跡発掘状況（北から）

2. 北塙丘墓跡発掘状況（南から）



1



2



3



4



5



6



7



8

1. S J 1050號棺墓〈北から〉 4. S J 1055號棺墓〈北から〉 7. S J 1056號棺墓〈北から〉
 2. S J 1051號棺墓〈東から〉 5. S J 1054號棺墓〈北から〉 8. S J 1056號棺墓銅劍出土状況
 3. S J 1051號棺墓〈東から〉 6. S J 1054號棺墓銅劍出土状況



1



2



3



4



5



6

1. S J 1057號棺墓〈西から〉

2. S J 1057號棺墓〈西から〉

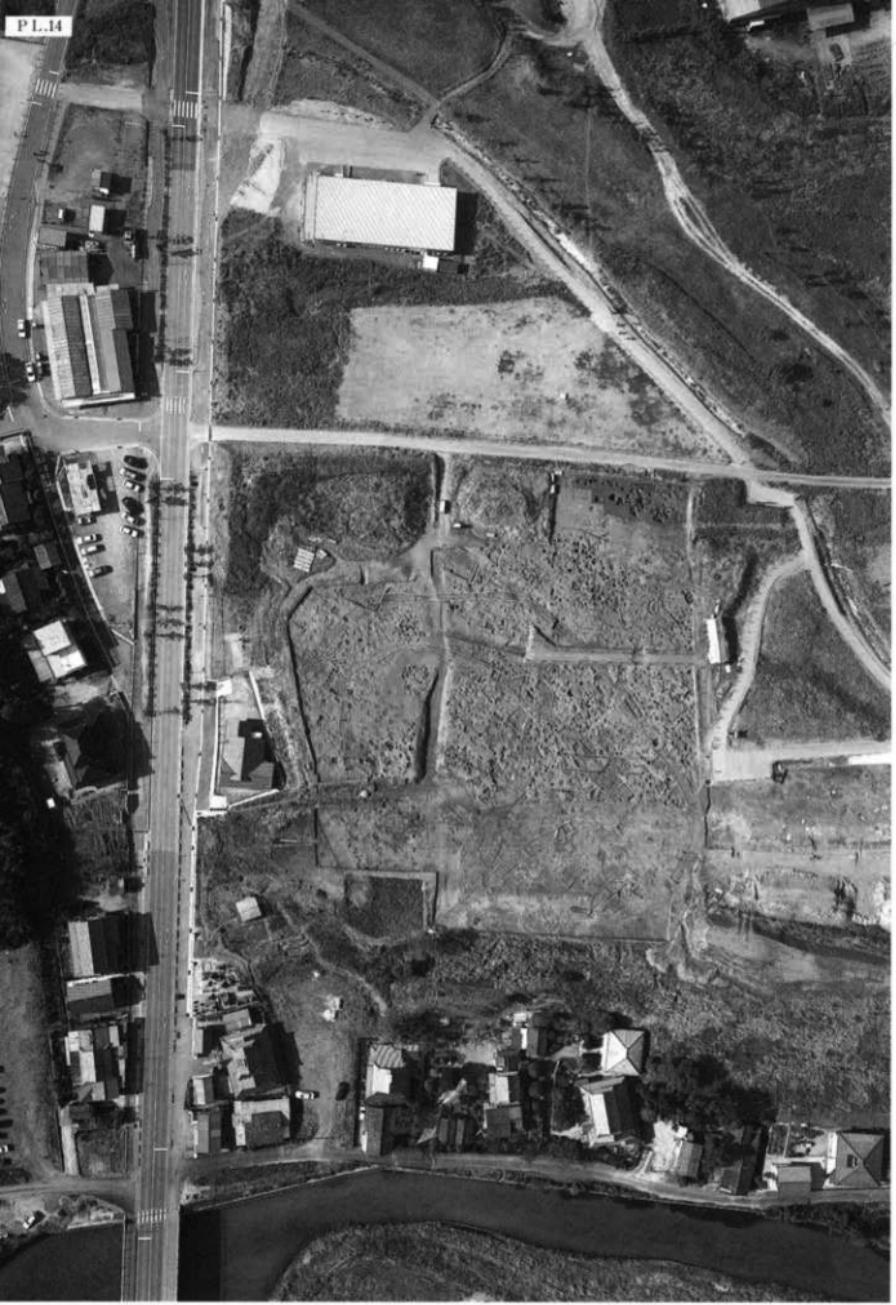
3. S J 1057號棺墓銅劍出土状況

4. S J 1057號棺墓出土把手頭飾出土状況

5・6. 北埴丘墓盛り土の状況



〈上から SJ1009・1005・1006・1054・1056・1007・1057・1006寶棺墓出土〉



北内郭路 <上が西>



1. 北墳丘墓跡と北内郭跡（上が東）

2. 北内郭跡の大型掘立柱建物跡（南から）

3. 北内郭跡の出入り口路（北東から）

4. 北内郭跡環壕出土の銅大刀。



1



2

1. 妙法寺跡発掘区全景〈北から〉

2. 妙法寺跡発掘状況〈上が東〉

佐賀県文化財調査報告書第132集

吉野ヶ里遺跡

－平成2年度～7年度の発掘調査の概要－

平成9年3月27日印刷

平成9年3月31日発行

編集 佐賀県教育委員会

発行 佐賀市城内一丁目1番59号

印刷 大成写真製版所

佐賀市巨勢町大字牛島字一本松353

